秋田県文化財調査報告書第266集
払田柵跡調査事務所年報１９９５

払田柵跡

―― 第103～106次調査概要 ――

1996・3

秋田県教育委員会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

ほったのさくあと

払田柵跡

―― 第103～106次調査概要 ――

1996・3

秋田県教育委員会

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

外郭線角材列と櫓状建物（西から）

1　D期角材列（北から）

2　外郭線角材列と溝（東から）

1　ＳＩ1167竪穴住居跡と土坑群（南から）

2　ＳＢ1127掘立柱建物跡（南から）

1　ＳＩ1148・1149とＳＢ1178等建物跡

2　調査地の全景（東から）

序

国指定史跡払田柵跡は、管理団体である仙北町による環境整備も順調に進捗し、見学者も年々増加していることは喜びに堪えないところであります。

平成７年度の調査は、第５次５年計画の２年次にあたり、外郭北部低地の調査をはじめとする４地区の調査を実施しました。

第103次調査は、昨年から継続する外郭線角材列と櫓状建物の有無を確認する調査で、新たに櫓状建物を検出しました。さらに、従来全くその存在が知られていなかった大溝が発見され、外郭線と外柵との違いが一段と明らかになりました。

第105次調査は、政庁東方にある平坦地の利用状況の解明を目的とする調査で、４年目になりました。これまで3,300㎡を発掘し、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、板塀など多くの遺構が検出され、この地域の６時期にわたる変遷が明らかとなりました。

本書は以上のような成果を収録したもので、古代城柵官衙遺跡の研究上、資するところが大きいと考え、ご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、調査ならびに本書作成にあたって御指導・御助言を賜りました、文化庁、奈良国立文化財研究所、国立歴史民俗博物館、宮城県多賀城跡調査研究所、秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所に心から感謝申し上げるとともに、史跡管理団体仙北町、同教育委員会、千畑町教育委員会、ならびに土地所有者各位の御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成８年３月15日

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所長　冨　樫　泰　時

例　　言

1　本書は秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が、平成７年度に実施した第103次～106次調査の概要報告である。

2　調査に当たり、調査研究の顧問である秋田大学新野直吉学長、国立歴史民俗博物館情報資料研究部長岡田茂弘教授から御指導いただいた。

3　角材の樹種の鑑定は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部、光谷拓実主任研究官に依頼した。

4　河川跡の電気探査は、秋田大学鉱山学部応用地球科学教室、西谷忠師助教授に依頼し、その成果を御報告いただいた。

5　土色の記載については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖1989年版』を参考にした。

6　実測図は国土調査法第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図及び地形図中の方位は座標北を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報1977』を参照されたい。

凡　　例

1　遺構には下記の略記号を使用した。

ＳＡ　角材列・柱列、　ＳＩ　竪穴住居跡、　ＳＢ　掘立柱建物跡、　ＳＤ　溝・板塀
ＳＫ　土坑、　ＳＬ　河川跡、　ＳＸ　その他の遺構

2　掘立柱建物跡の模式図には下記の記号を用いた。

柱掘形○　柱痕跡◉　推定柱位置＋

3　遺構・遺物の挿図には、下記のスクリーントーンを使用した。

焼土・焼面　柱痕跡　スクモ層　地山　火山灰
炭化物　漆　内面黒色処理

払田柵跡調査事務所年報1995

目　　次

第１章　はじめに …… 1
第２章　調査計画と実績 …… 3
第３章　第103次調査 …… 6
第４章　第104次調査 …… 21
第５章　第105次調査 …… 29
第６章　第106次調査 …… 81
第７章　調査成果の普及と関連活動 …… 86
報告書抄録 …… 87

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　払田柵跡調査実施位置図 …… 5
第３図　第103次調査位置図 …… 6
第４図　第103次調査遺構配置図 …… 7・8
第５図　調査区西部の遺構 …… 9・10
第６図　ＳＡ1100、ＳＢ1144、ＳＸ1180 …… 11・12
第７図　ＳＡ1100土層断面図 …… 14
第８図　ＳＤ1145土層断面図 …… 16
第９図　ＳＡ1100、ＳＤ1145出土遺物 …… 17
第10図　遺構外出土遺物 …… 18
第11図　角材列、築地土塀、溝、櫓状建物の位置模式図 …… 20
第12図　第104次調査位置図 …… 21
第13図　第104次調査遺構配置図 …… 22
第14図　土層断面図 …… 23
第15図　ＳＬ1146出土遺物 …… 24
第16図　遺構外出土遺物（１） …… 26
第17図　遺構外出土遺物（２） …… 27

第18図　遺構外出土遺物（３）…… 28
第19図　第105次調査位置図 …… 29
第20図　政庁と調査区 …… 30
第21図　第105次調査遺構配置図 …… 31・32
第22図　ＳＩ967・1147 …… 33・34
第23図　ＳＩ967出土遺物 …… 36
第24図　ＳＩ1148 …… 37
第25図　ＳＩ1148出土遺物（１） …… 38
第26図　ＳＩ1148出土遺物（２） …… 39
第27図　ＳＩ1148出土遺物（３） …… 40
第28図　ＳＩ1148出土遺物（４） …… 41
第29図　ＳＩ1149、ＳＫ1157 …… 42
第30図　ＳＩ1149出土遺物 …… 43
第31図　ＳＩ1167、ＳＫ1165・1174 …… 44
第32図　ＳＩ1167出土遺物（１） …… 45
第33図　ＳＩ1167出土遺物（２） …… 46
第34図　ＳＢ1127 …… 47・48
第35図　ＳＢ1177 …… 49
第36図　ＳＢ1178・1184～1186、ＳＤ1170・1175 …… 51・52
第37図　ＳＤ1170土層断面図 …… 54
第38図　ＳＤ1182土層断面図 …… 54
第39図　調査区東方の土坑群 …… 55
第40図　ＳＫ1150・1154・1155・1156・1160 …… 56
第41図　ＳＫ1154出土遺物 …… 57
第42図　ＳＫ1157出土遺物 …… 58
第43図　ＳＫ1158出土遺物 …… 59
第44図　ＳＫ1159出土遺物 …… 59
第45図　ＳＫ1158・1159・1161・1164・1171・1176・1181、ＳＸ1179 …… 60
第46図　ＳＫ1161出土遺物 …… 61
第47図　ＳＫ1165出土遺物 …… 62
第48図　ＳＫ1166出土遺物 …… 62
第49図　ＳＫ1162・1163・1166・1168・1169・1172・1173 …… 63

第50図　ＳＫ1171出土遺物 …… 64
第51図　ＳＫ1172出土遺物 …… 65
第52図　ＳＸ1179出土遺物 …… 66
第53図　遺構外出土遺物（１） …… 67
第54図　遺構外出土遺物（２） …… 68
第55図　遺構外出土遺物（３） …… 69
第56図　第90・95・100・105次調査検出遺構全体図 …… 73・74
第57図　政庁東方地区の遺構の変遷 …… 77・78
第58図　電気探査測点位置図 …… 82
第59図　測点148の測定結果とモデル構造 …… 83
第60図　比抵抗断面図 …… 83
第61図　河川敷および最終段階河川推定経路 …… 84

表　目　次

第１表　調査計画表 …… 3
第２表　調査実績表 …… 4
第３表　遺構の併行関係 …… 71
第４表　政庁東方の遺構期 …… 76

図　版　目　次

巻首図版１　第103次調査　外郭線角材列と櫓状建物
巻首図版２　第103次調査　１　Ｄ期角材列　２　外郭線角材列と溝
巻首図版３　第105次調査　１　ＳＩ1167竪穴住居跡と土坑群　２　ＳＢ1127掘立柱建物跡
巻首図版４　第105次調査　１　ＳＩ1148・1149とＳＢ1178等建物跡　２　調査地の全景（東から）
図版１　第103次調査　１，２外郭線角材列
図版２　第103次調査　１，２　外郭線角材列
図版３　第103次調査　１　調査区西端の角材と丸柱　２　調査区西端の角材列
図版４　第103次調査　１，２櫓状建物と角材列
図版５　第103次調査　１，２　櫓状建物北西隅柱掘形
図版６　第103次調査　１，２外郭線角材列と溝

図版７　第103次調査　１，２　溝土層断面

図版８　第104次調査　１　調査地全景　２　ＳＬ1146

図版９　第105次調査　１，２　調査地全景

図版10　第105次調査　１　ＳＩ967・1147　２　ＳＩ1148

図版11　第105次調査　１　ＳＩ1148　２　ＳＩ1149、ＳＫ1157

図版12　第105次調査　１，２　ＳＩ1167

図版13　第105次調査　１，２　ＳＢ1127

図版14　第105次調査　１　ＳＢ1127南西隅柱掘形　２　ＳＩ1148・1149、ＳＢ1178

図版15　第105次調査　１　土坑群　２　ＳＫ1154

図版16　第105次調査　１　ＳＫ1155・1156　２　ＳＫ1163

図版17　第105次調査　１　ＳＫ1164　２　ＳＫ1176

図版18　第106次調査　１，２　河川跡の電気探査

図版19　第103～105次調査　遺　　物（１）

〃　　〃

図版28　　遺　　物（10）

第1章　はじめに

払田柵跡は秋田県仙北郡仙北町払田・千畑町本堂城回にある。遺跡は雄物川の中流域に近く大曲市の東方約6㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置し、第三紀硬質泥岩からなる真山、長森の丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川）によって挟まれた低地に立地する。

1902・3（明治35・36）年の千屋村坂本理一郎による溝渠開削の際や、1906（明治39）年頃から開始された高梨村耕地整理事業の際に発見された埋もれ木が、地元の後藤宙外・藤井東一らの努力によって歴史的遺産と理解され、遺跡解明の糸口が開かれた。1930（昭和5）年3月、後藤宙外が調査を実施し、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われて遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、1931（昭和6）年3月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、1988（昭和63）年6月29日付けで史跡の追加指定がなされて現在に至っている。史跡指定面積は894,600㎡である。

1970年代になって、指定地域内外の開発計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実態を把握することを目的に、1974（昭和49）年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した。さいわい、地元管理団体仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。事務所は1986（昭和61）年4月、「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称した。現在は「払田柵跡調査要項」の第5次5年計画に基づいて計画的に発掘調査を実施している。

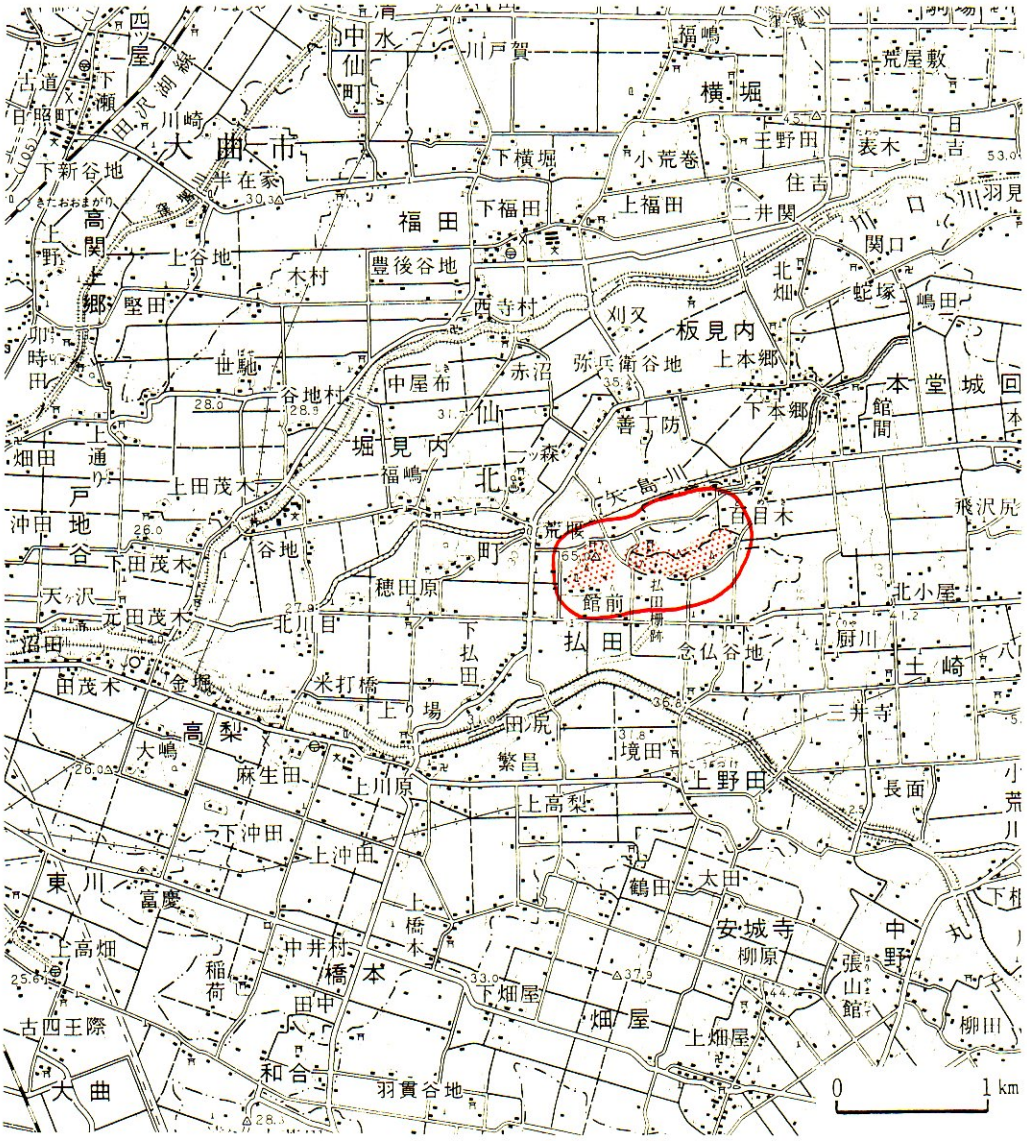
史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。外柵は東西1,370ｍ、南北780ｍの長楕円形で、延長3,600ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約875,000㎡である。外柵は1時期の造営で角材列が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は東西765ｍ、南北320ｍの長楕円形で面積約163,000㎡、外郭線の延長は約1,760ｍで石塁、築地土塀、（東・西・南の山麓）と角材列が連なり、東西南北に八脚門が開く。外郭北門は2時期、東門・西門・南門は4時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称していたが、これまでの調査成果を踏まえ、1995（平成7）年から呼び替えたものである。

長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物にはⅠ～Ⅴ期の変遷があり、創建は9世紀初頭、終末は11世紀初頭である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年3月）として公刊した。

出土品には、木簡・漆紙文書・墨書土器・塼・土師器・須恵器・灰釉陶器・斎串・曲物など

がある。木簡には「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石二斗八升」「嘉祥二年正月十日」などの文書・貢進用木簡がある。墨書土器には「懺悔」「厨」「厨家」「官」「文」「小勝」などの文字がある。

管理団体仙北町は1979（昭和54）年から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業を進めており、1982（昭和57）年からは調査成果に基づき環境整備事業を実施している。さらに1991（平成３）年からは「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門や河川跡の復元整備、ガイダンス施設の設置などを積極的に実施した。



第１図　遺跡の位置

第２章　調査計画と実績

平成７年度の調査は「払田柵跡調査要項」に基づく、第５次５年計画の２年次にあたる。さいわい事業費については、秋田県の要求額どおりの国庫補助金の内示（総計費1,500万円のうち、国庫補助金750万円）を得たので、次のような「平成７年度払田柵跡調査計画（案）」を立案した。

第1表　調　査　計　画　表

調査次数	調　査　地　区	調査内容	調査面積	調査期間
第103次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木）	外郭線角材列と櫓状建物の調査	300㎡	４月10日～５月31日
第104次	外　郭　北　部 （仙北町払田字百目木，長森）	外郭低地の遺構確認調査	300㎡	６月１日～７月20日
第105次	外　郭　東　部 （仙北町払田字長森）	建物跡・板塀等の調査	500㎡	７月21日～10月20日
第106次	外柵東・南部 （仙北町払田字大谷地，千畑町本堂城回字森崎）	電気探査による河川跡の調査	48,000㎡	10月21日～10月31日
合　　計	４　　地　　区		電探48,000㎡ 発掘 1,100㎡	

平成６年度から平成10年度までの調査は、「払田柵跡発掘調査第５次５年計画」として立案され、顧問の指導と助言を得て承認されたものである。

第103次調査は、外郭線角材列の検出と櫓状建物の有無の確認を目的としたもので、昨年の第99次調査に継続する調査である。

第104次調査は、昨年の第98次調査の成果を踏まえた、外郭低地における遺構の分布調査の一環で、木簡をはじめとする木製品が出土したホイド清水北側の低地を対象とした。

第105次調査は、政庁の東方にある平坦地の利用状況の解明を目的としたもので、平成３年度の第90次調査、５年度の第95次調査、６年度の第100次調査の継続である。

第106次調査は、「ふるさと歴史の広場」事業に伴って検出された河川跡の範囲を電気探査によって探ることを目的としたもので、昨年の第101次調査の継続である。

平成７年度の調査の実績は第２表のとおりである。

第2表 調 査 実 績 表

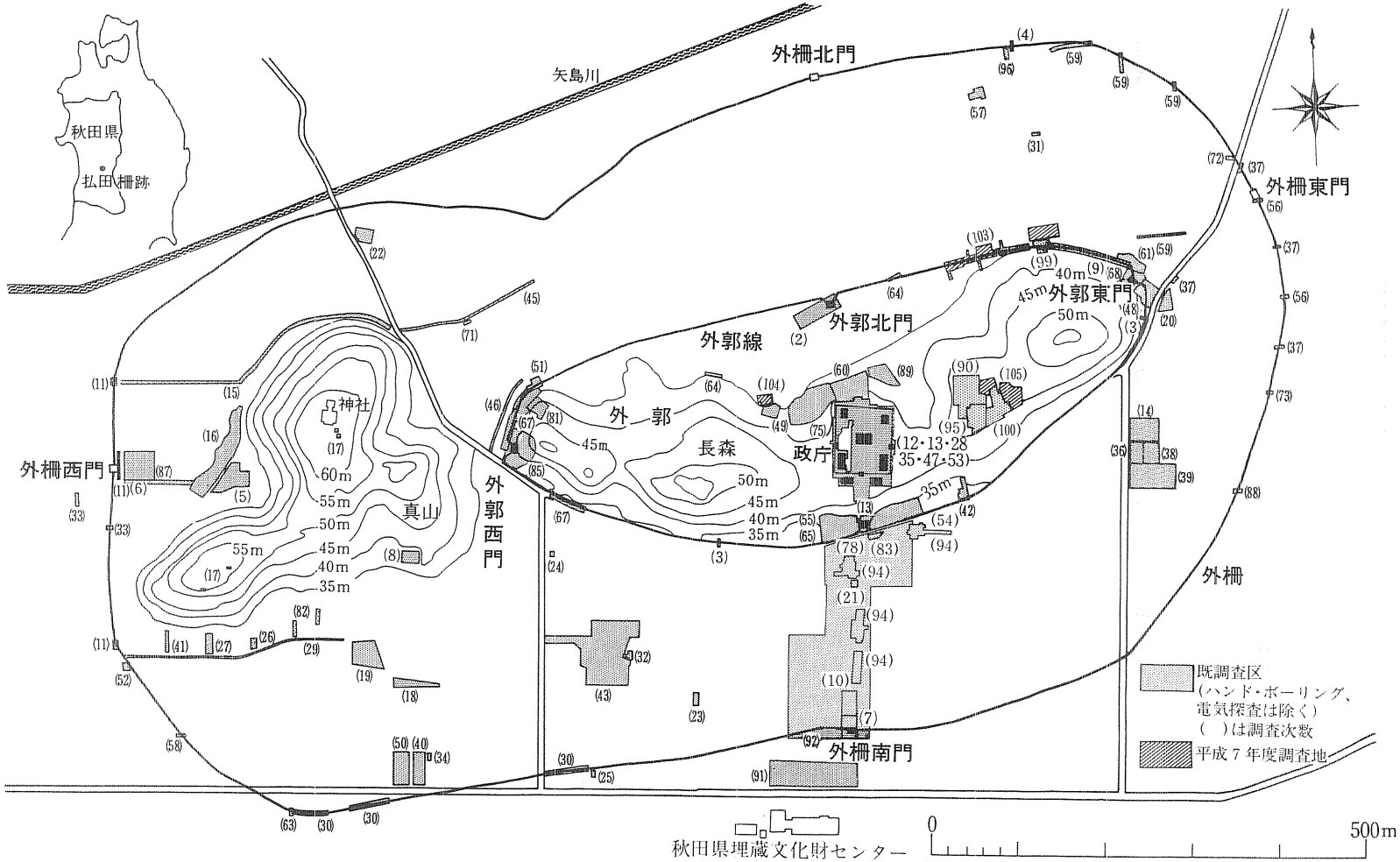
調査次数	調 査 地 区	調査内容	調 査 面 積	調 査 期 間
第103次	外 郭 北 部 (仙北町払田字百目木)	外郭線角材列と櫓状建物の調査	630㎡	4月17日～6月22日
第104次	外 郭 北 部 (仙北町払田字百目木、長森)	外郭低地の遺構確認調査	300㎡	6月19日～7月7日
第105次	外 郭 東 部 (仙北町払田字長森)	建物跡・板塀等の調査	800㎡	7月12日～10月19日
第106次	外 柵 東・南 部 (仙北町払田字大谷地、千畑町本堂城回字森崎)	電気探査による河川跡の調査	134,000㎡	10月23日～11月9日
合 計	4 地 区		電探134,000㎡ 発掘 1,730㎡	

第103次調査では、角材列に伴う櫓状建物は、D期建物のみが、昨年の調査で検出された建物から106ｍ離れた位置に検出された。角材列の北には、これまで全くその存在が知られていなかった大溝を初めて確認し、東西方向に長さ116.5ｍにわたって検出した。これにより、外柵と外郭線との違いが一段と明確になった。角材列の残存状況は悪く、年輪年代測定に適した材もなく測定は行わなかった。

第104次調査では、従来ホイド清水に関わる遺構の存在が予想されて来たが、清水からの流れがあるほかは遺構が全く見られず、ホイド清水に関連する何らかの遺構は、低地には全く存在しないことが判明した。

第105次調査では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板塀、土坑等が検出された。4次にわたる継続調査でこの地域の利用の仕方の変遷に見通しが得られたことから、この地域の調査は終了することとした。遺物では「官小勝」と書かれた墨書土器が一竪穴住居跡から3点出土した。

第106次調査では、河川跡の電気探査を東方に広げるとともに、昨年垂直探査を行わなかった範囲でも再度実施した。河川の流れは大きく二つあり、政庁跡の南側で合流して一つになっていることが新たに明らかとなった。



第2図　払田柵跡調査実施位置図

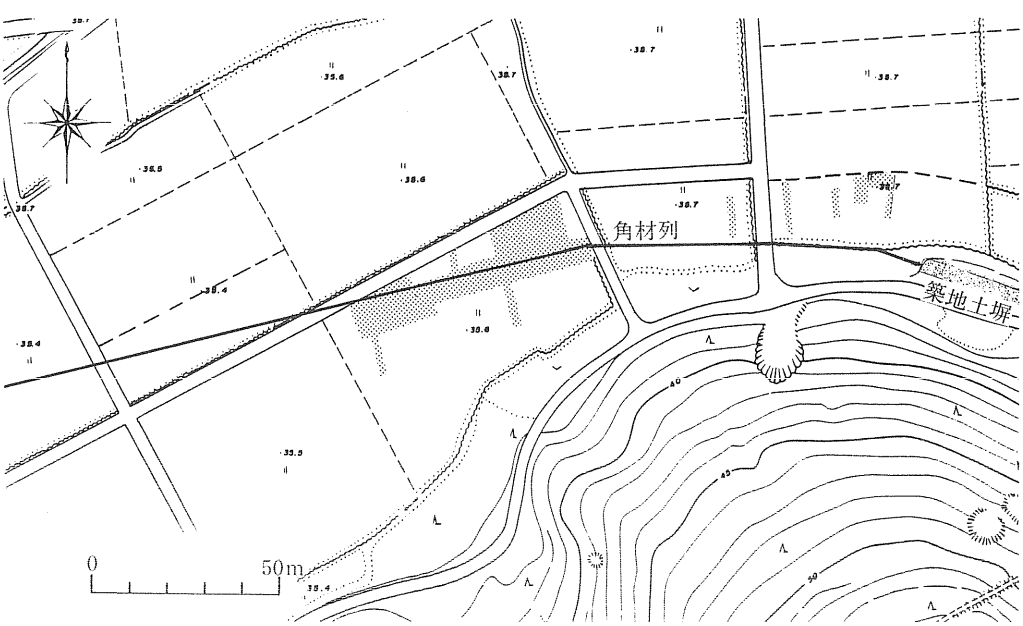
第３章　第103次調査

第１節　調査経過

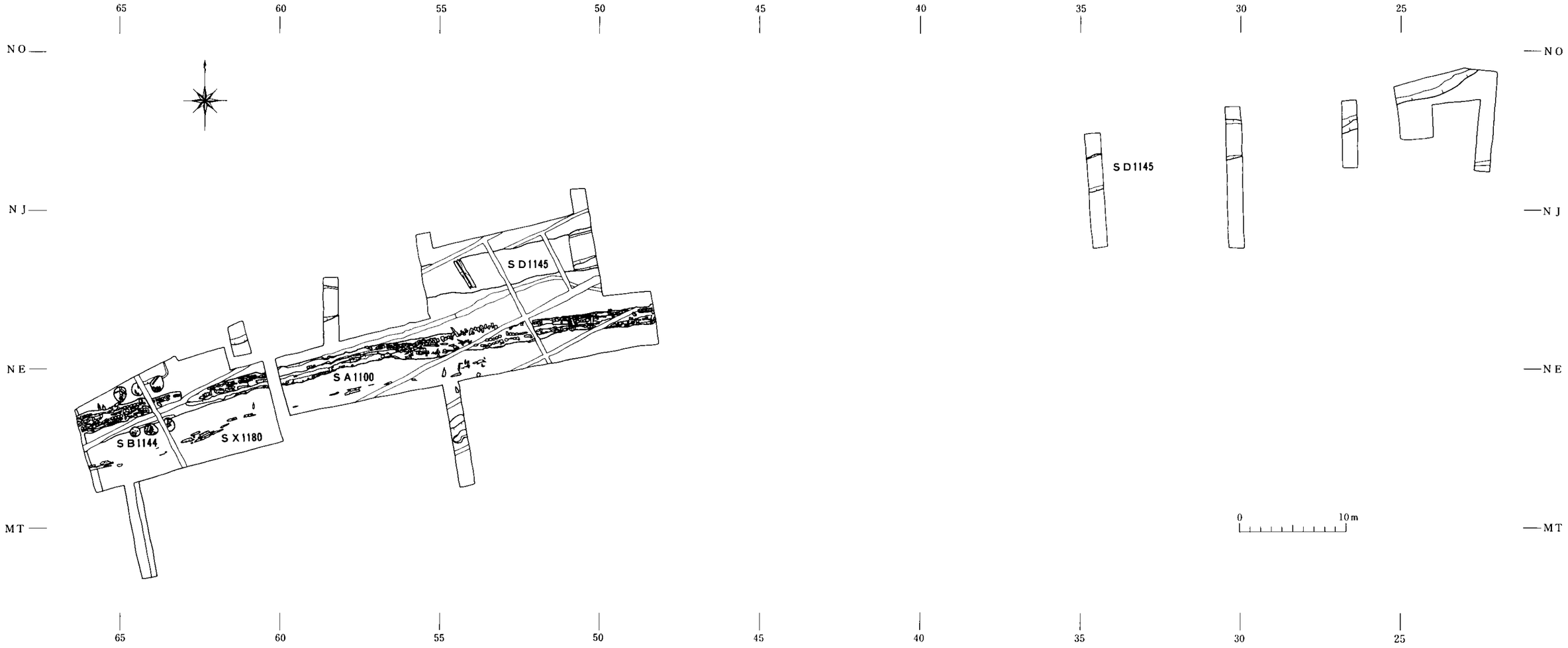
第５次５年計画の基本的計画の中には、外郭線北部の区画施設の調査を組み入れ、昨年の第99次調査からその調査を開始した。その結果、第99次調査では、外郭線と外柵が創建時に同時に造られたことが判明し、外郭線角材列と櫓状建物に４時期があって外郭線全体が４期にわたって造営されていることがほぼ明らかとなった。また、櫓状建物の配置は外郭線上に約90ｍ間隔と推定された。

そこで今年は、昨年の調査区の西側に連続する地域に調査区を求め、まだ未確定の２期め、４期めの角材の年輪年代測定も含めて、主として櫓状建物の配置状況を明らかにすることを目的に調査を行ったのである。

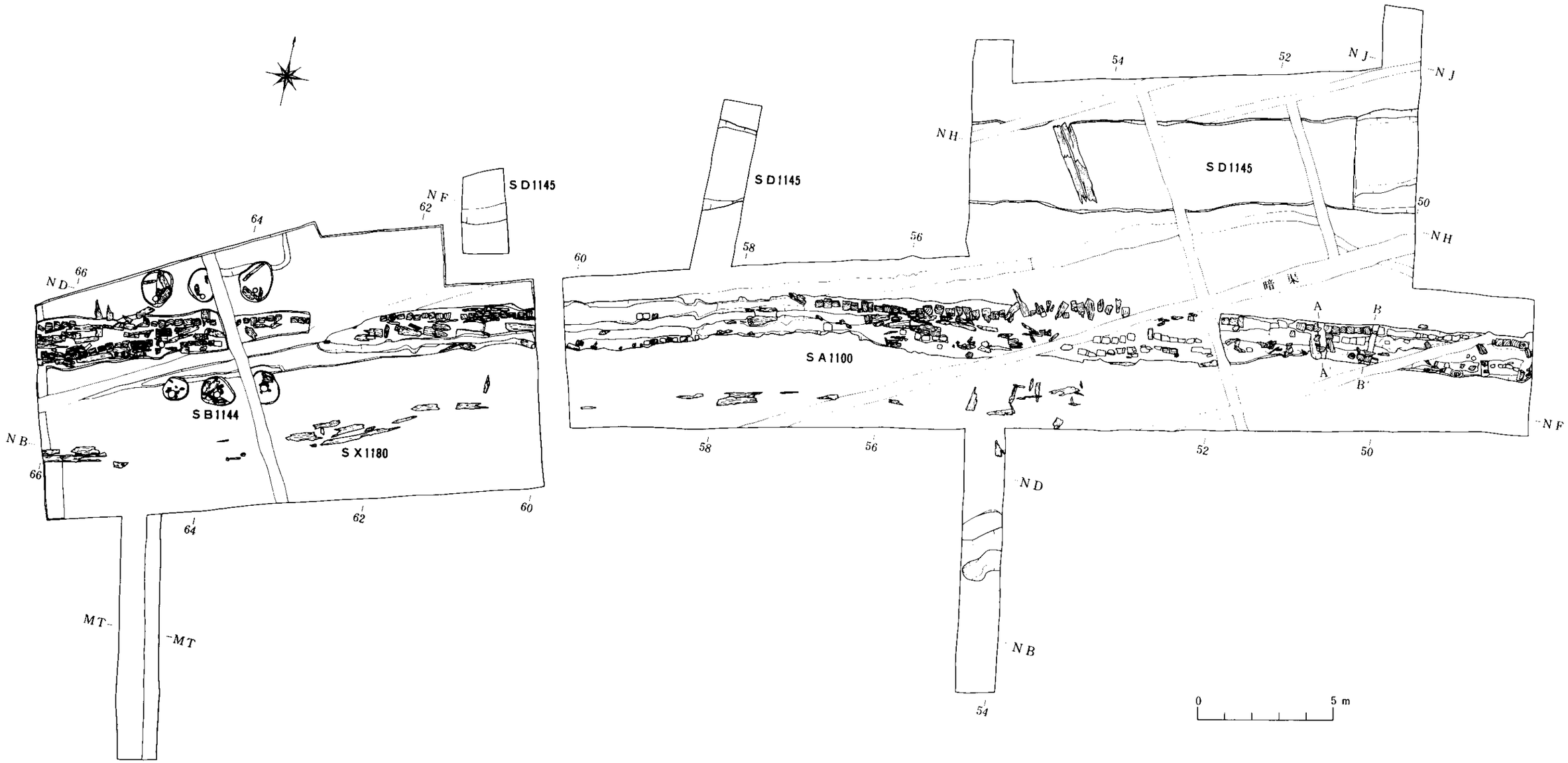
調査は４月17日から開始し、この日テント設営、機材の搬入を行い、東から西に向かって表土剝ぎと遺構確認作業を続けた。28日に調査区の西方で櫓状建物を検出、５月９日、その付近での角材列と火山灰との層位的関係及び角材列と櫓状建物の位置関係から、櫓状建物の時期はＤ期かと判断された。10日、大正大学名誉教授斎藤忠氏来跡。角材列は全体に遺存状態が悪いが、調査区西端部の櫓状建物付近では良く残っており、23日、この位置の写真撮影を実施した。



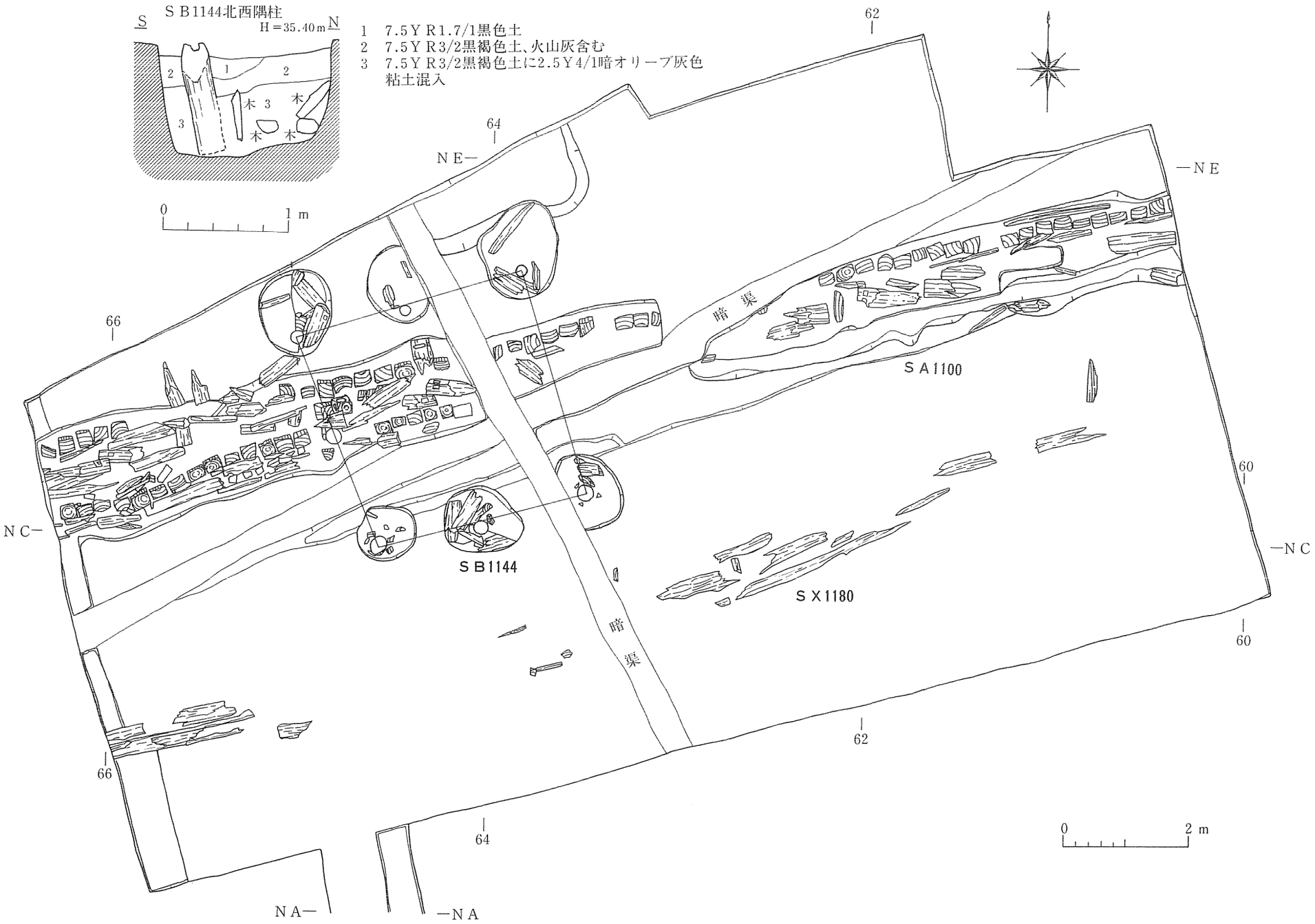
第３図　第103次調査位置図



第４図　第103次調査全体図



第５図　調査区西部の遺構



第６図　ＳＡ1100・ＳＢ1144・ＳＸ1180

翌日から平面実測を開始し、同時に、東に向かって角材とその抜き取り痕の検出作業を進めた。

６月５日、角材列の北側に南北方向のトレンチを３本設定して掘り下げたところ、東西に走る溝を検出、昨年のＳＸ1102にも連なるものと考えられた。９日、全景写真撮影。13日、溝を東へ追跡するため、昨年度の第99次調査区の角材列の北側にもトレンチを設定、溝は北へカーブしながら東へ続いていることがわかった。

19日から第104次調査への移動とその表土剝ぎを併行し、全体の実測作業を終えたのは６月22日である。

第２節　検出遺構と遺物

１　遺構と遺物　（第３・４図）

調査地は外郭北東部にある元水田で、標高35.70ｍほどの平坦地である。土層は、調査区の東半部では遺構検出面にまで耕作が及んでいて、耕作土を剝がすと角材の頂部が検出される。西ほど地盤が軟弱で、60ラインあたりから急激に湿地状態となっている。

調査区西端の土層は、第１層：黒褐色水田耕作土。第２層：黒褐色シルトに黄褐色土の粒子が混じる。第３層：黒褐色シルト、上下にスクモが混じる。第４層：黒褐色シルトに十和田ａ火山灰を含む。第５層：黒褐色粘土。第６層：暗灰黄色粘土で、第２・３層が角材列の上を覆っている。第５・６層は角材列等を構築する以前に存在した自然堆積層である。検出遺構は角材列１、櫓状建物１、溝１、その他の遺構１の計４遺構である。

（１）　角材列

①　ＳＡ1100　（第５～７図，巻首図版１・２，図版１～３）

昨年度調査地のすぐ西に隣接して、東西54.5ｍにわたって検出した角材列である。部分的には直線であるが、57ライン付近で角材列の方向が少し南へ屈折し、全体的に南へ湾曲している。

角材は調査区西端付近では遺存状態が良好であるが、その他では暗渠排水溝を構築した時の抜き取りや、耕作者による抜き取りが激しく、その痕跡も明瞭に残っていない箇所が多い。また、角材列にも重複があり、角材やその抜き取り痕が明確に４列見られる所はない。

Ａ列には最も多い81本の角材が遺存していて、その一辺の大きさは測定し得るものの平均で長辺27.3cm、短辺21.8cmである。多くは密接して直立しているが、55ライン付近や65ライン付近では南または北に傾斜、あるいは根元から抜き上げられた形で横倒している。昨年の調査で年輪年代は確定しているので、測定は行わなかった。

Ｂ列には直立して残存するものはほとんどなく、わずかに櫓状建物付近に２本残るだけであ

る。C列ではそれが皆無である。

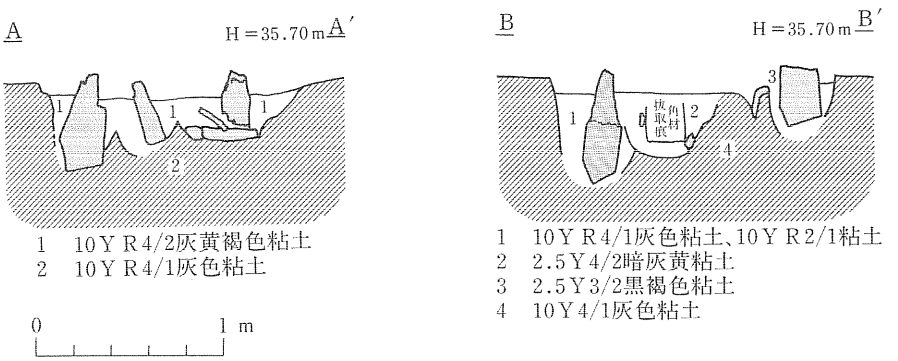
A列とD列の間には角材列の方向に沿って角材が横倒している。これは、C列を構築する際に角材の基部を布掘り内で固定するため、B列の角材の多くを抜いて横にして使用し、D列を構築する際にも同様にC列角材列の多くを利用したためであろう。調査区の西端の土層断面ではそれがなされなかったせいか、A～C列の上を厚さ5～6㎝の火山灰層が水平に覆っているのが見られた。

D列には25本の角材があり、一辺の大きさの平均は長辺26.4㎝、短辺19.6㎝である。昨年の調査区でも一部で見られたが、全体的にC列とほぼ同位置に重複して構築されていると考えられる。櫓状建物付近には19本の角材が密接して良好な状態で残っている。布掘り内の埋土に火山灰を含んでいて、火山灰降下後の構築である。角材の基部を固定するために入れた材が多く見られ、中に長さ1.3ｍ、直径約20㎝の広葉樹の丸柱も入っている。

櫓状建物付近のD列に、明らかにスギとは異なる角材があり、奈良国立文化財研究所、光谷拓実氏から鑑定していただいたところ、キハダが1点、クリが4点であった。

B～D列に年輪年代測定に適した材はなく、測定はできなかった。

D列の布掘内から、底部切り離しが回転糸切りで無調整の土師器杯（第9図1）が出土した。



第7図　ＳＡ1100土層断面図

（2）　櫓状建物

①　ＳＢ1144　（第5・6図，図版4・5）

東西・南北方向とも2間の掘立柱建物である。建物規模は、北側で見ると総長3.7ｍ、柱間距離は東から1.9ｍ、1.8ｍであるが、南側は総長3.4ｍ、東から1.8ｍ、1.6ｍと短く、全体が歪んだ形である。西側は総長3.6ｍ、柱間距離は北から1.7ｍ、1.9ｍである。

柱掘形はいずれも楕円形で、北西隅柱の場合、長軸1.35ｍ、短軸1.16ｍ、深さは確認面から90㎝で、垂直に掘り込まれている。北側3本の柱は掘形の南に片寄った位置にある。丸柱で、直径は約20㎝あり、広葉樹を用い、南に傾いている。掘形内にはスギ角材の他、半截した広葉

樹の丸柱などが、埋土とともに充填されている。地盤が極めて軟弱であることによるものであろう。火山灰層を切って掘り込んでいるので、埋土には火山灰を含んでいる。

西側中央にはＤ期角材列と並んで丸柱があるが、東側のそれは水田の暗渠排水溝に切られていて残存しない。両者とも柱掘形は検出されないが、建物のこの位置に柱があるのは昨年の第99次調査のＳＢ1096のＤ期建物の場合と同じである。

火山灰降下後の構築であること、Ｄ期角材列が建物の南北方向を通っていて、この建物がＤ期角材列をまたぐ形であることから、この建物はＤ期の建物である。建物の位置は南側中央の柱で見ると、ＳＢ1096のＤ期建物の南側中央の柱から、西へ106ｍの距離がある。

南側中央の柱掘形と、南東隅の柱掘形から土師器杯の小破片が出土した。

調査範囲内にはＡ～Ｃ期の建物は検出されなかったが、建物の柱掘形内や、Ｄ期角材列の布掘り内に丸柱が入れられていることから、古い時期の建物が付近に存在するものかもしれない。

（３）　溝

①　ＳＤ1145　（第５・８図，図版６・７）

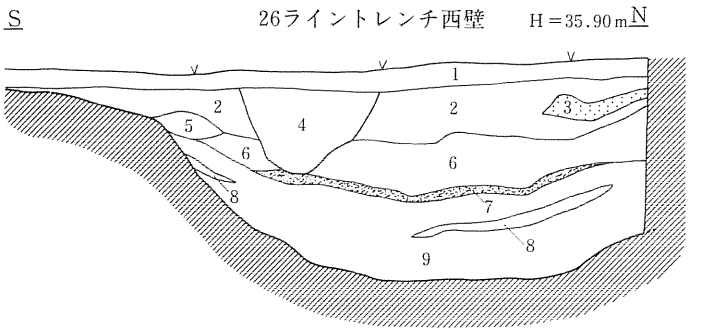
角材列の北にあり、東西方向に直線的に延びる溝で、長さ116.5ｍを検出した。

調査区の西部では角材列との距離が約4.5～６ｍであるが、溝が直線的であるのに対して角材列がカーブしているため、東ほどしだいに間隔が広くなり、調査区東方の27ラインでの距離は18～19.5ｍとなる。

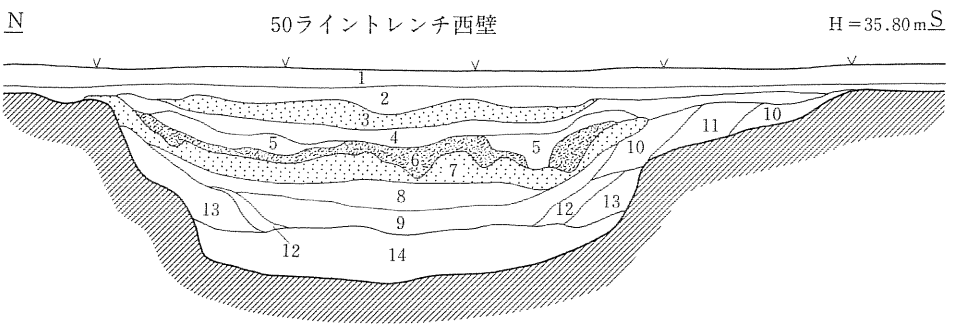
確認面での上面幅は3.4～4.0ｍで、底面は平坦かやや丸みをおび、断面形は逆台形か椀状をなす。底面幅2.2～2.7ｍ、深さ0.6～1.0ｍほどである。堆積土は全体に粘質土で、溝の下方に倒木や枝・葉を多く含み、中位から上位にかけてスクモ層となる。底面より30～50cm上位に火山灰層がある。第99次調査でＳＸ1102その他の遺構としたのは、この溝の一部である。

溝は全体に直線的であるが、調査区の東端ではわずかに北にカーブしている。その北は耕作中の水田であるため調査はできなかったが、溝が角材列や築地土塀に沿う形とはなっていないことは明らかである。カーブするあたりは、ちょうどＡ期角材列と築地土塀との接点に近い位置である。なお、角材列の内側にもトレンチを設定して調査したが、溝は存在しなかった。

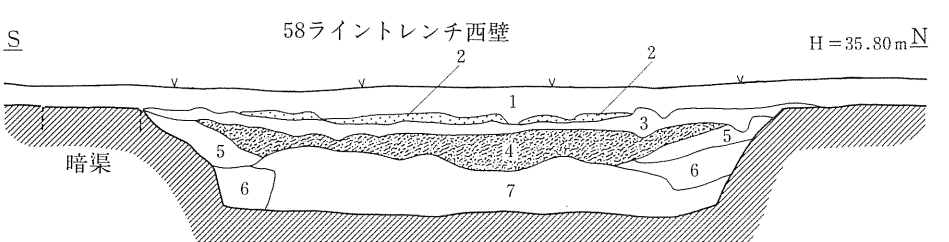
遺物は、溝底から砥石（第９図２）が出土したほか、昨年ＳＸ1102内に堆積した火山灰の直下から「車」の墨書のある土師器杯（年報1994第13図２）が出土している。



1　7.5Y R3/1黒褐色耕作土
2　10Y R3/1黒褐色粘土
3　7.5Y R3/2黒褐色スクモ層
4　2.5Y2/1黒色粘土、旧水路
5　10Y R3/1黒褐色粘土、10Y R4/1褐灰色粘土
6　10Y R3/1黒褐色粘土に10Y4/1粘土粒が混入
7　10Y R3/1黒褐色粘土に10Y R6/4にぶい黄橙色火山灰混入
8　10Y4/1灰色粘土
9　10Y R2/1黒色粘土、木の枝多く倒木あり



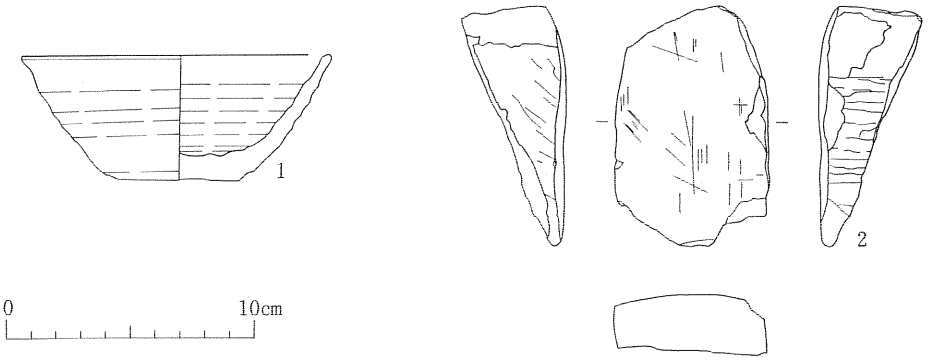
1　10Y R3/1黒褐色耕作土
2　7.5Y R3/1黒褐色水田床土
3　5 Y R3/1黒褐色スクモ層、植物根多い
4　7.5Y R1.7/1黒色土、7.5Y R2/1黒色土、ごく少し火山灰混入
5　10Y R3/1黒褐色粘土
6　10Y R3/1黒褐色粘土に10Y R5/4火山灰が多く入る
7　10Y R2/2黒褐色粘土、下方にスクモが3～5cmの厚さで堆積
8　7.5Y R2/2黒褐色粘土、ごく一部に火山灰あり
9　5 Y R1.7/1黒色粘土
10　10Y R3/1黒褐色粘土
11　5 Y R3/1黒褐色粘土
12　2.5Y2/1黒色粘土
13　2.5Y2/1黒色粘土に2.5Y4/2暗灰黄地山粘土少し混入
14　2.5Y3/1黒褐色粘土、植物多い倒木あり



1　7.5Y R3/1黒褐色耕作土
2　5 Y R3/1黒褐色スクモ層
3　7.5Y R1.7/1黒色土
4　10Y R3/2黒褐色粘土、火山灰を含む
5　10Y R3/2黒褐色粘土
6　10Y R3/1黒褐色粘土を主体に10Y4/1灰色粘土が粒状に入る
7　10Y R2/1黒色粘土、植物多い　スクモぎみ

0　1 m

第8図　SD1145土層断面図



番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
1	土師器	杯	ＳＡ1100・Ｄ期	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.4	4.7	5.1	0.4	41.0	28°	19－1

番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
2	砥　石	ＳＤ1145	１面使用。反対面は破損。	9.7	6.2	4.2	19－2

第９図　ＳＡ1100、ＳＤ1145出土遺物

（４）　その他の遺構

①　**ＳＸ1180**　（第５・６図）

角材列の南側に平行して東西方向に点々と横たわる材木である。調査区の中央部から西端にかけて、殊に湿地状態の強い調査区西方に多く見られる。

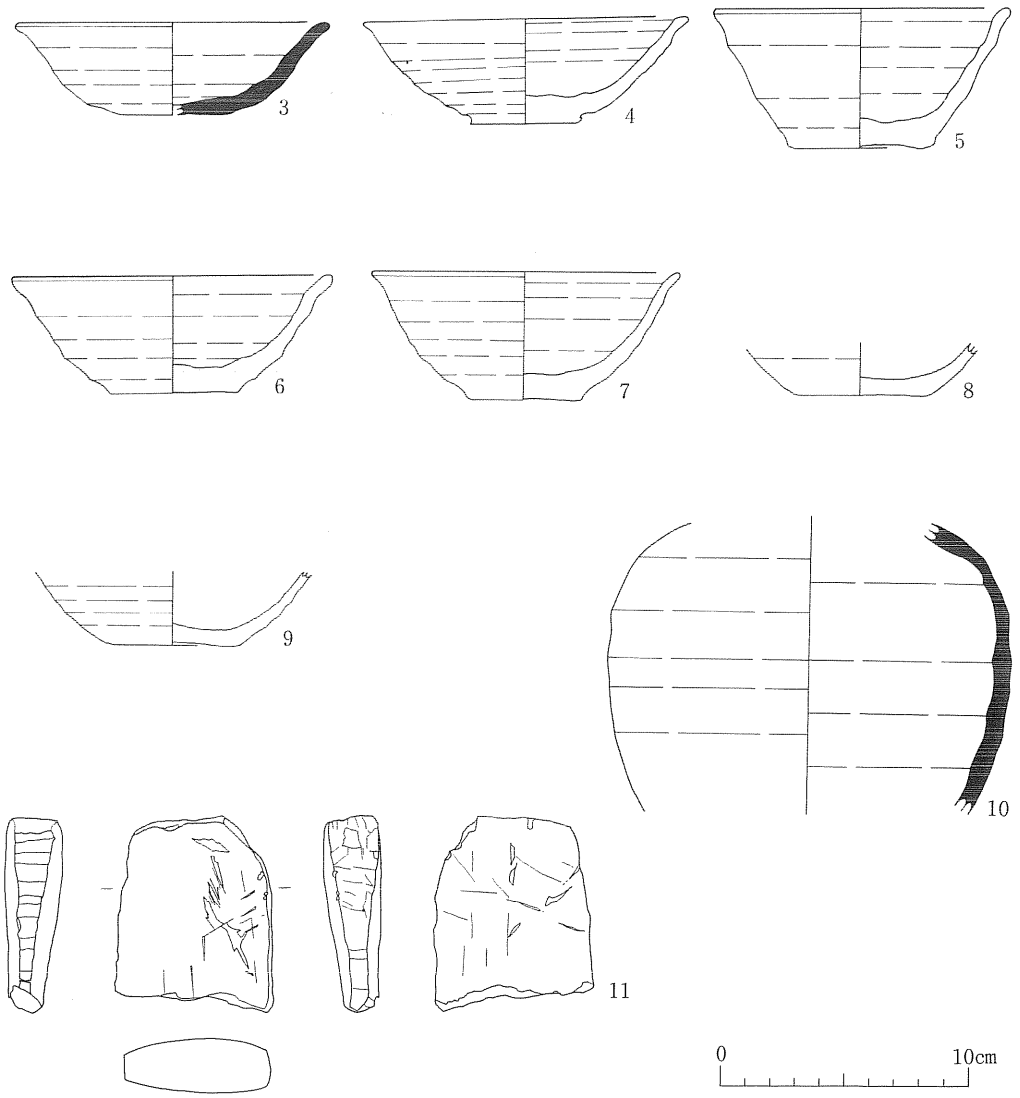
材木はスギで、全体の腐食が激しく、形状や加工痕をとどめていない。長いものでは、長さ３ｍ、幅20～30cmで、３列になっている箇所もある。角材列との距離はＡ期角材列から４～５ｍほどである。火山灰層との関係がわかる位置では、明らかに火山灰の下になっている。

２　遺構外出土遺物　（第10図）

（１）　**須恵器**　第10図３は杯で、灰白色を呈し、幾分膨らみのある体部から、口縁部が外反する。底部切り離しは回転糸切りである。10は長頸壺の体部で、十和田ａ火山灰の上から出土した。

（２）　**土師器**　４～９は杯で、黄橙色を呈し、底部切り離しは回転糸切りである。８を除き、火山灰上か火山灰に伴って出土した。

（３）　**砥石**　11は砥石で、２面を使用している。



番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
3	須恵器	杯	ＮＥ53・２層	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.6	4.4	3.7	0.4	29.4	36°	
4	土師器	杯	ＮＡ66・火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	13.0	4.2	4.2	0.3	32.0	40°	19－3
5	土師器	杯	ＮＢ62・火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	11.8	5.4	5.6	0.5	47.0	27°	19－4
6	土師器	杯	ＮＣ61・火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.8	5.0	4.7	0.4	36.0	31°	19－5
7	土師器	杯	ＮＤ61・２層 火山灰に共伴	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	12.2	4.6	5.1	0.4	41.8	29°	
8	土師器	杯	ＮＣ65・角材列上	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ		5.4					
9	土師器	杯	ＮＤ61・２層 火山灰に共伴	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ		5.2					
10	須恵器	長頸壺	ＮＡ63・火山灰上	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ							

番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
11	砥　石	ＮＣ65・２層	２面使用。破損。	7.9	6.4	2.3	19－6

第10図　遺構外出土遺物

第３節　小　結

１　角材列について

昨年度の第99次調査区同様に４列の角材列のうち、Ａ期角材列が比較的良好に残っている。全体に暗渠排水溝や近年の抜き取りによる破壊が激しいが、調査区西端部の櫓状建物付近では良好な状態である。その西端部でも直立して残る角材はＡ期とＤ期で、Ｂ・Ｃ期の角材はほとんどが一旦抜き上げられて横になっている。これは角材の基部を固定するために古い時期の角材を抜き上げて利用したものと考えられ、このことは、第９次調査における角材列のあり方との大きな相違である。

第９次調査の調査地点は外郭北東部の築地土塀のすぐ西に連続し、丘陵と低湿地との境目にあたる、比較的地盤の安定した土地であり、今回調査区の、殊に60ライン以西のような極めて軟弱な地盤とは異なっていて、あえて古い時期の角材を利用する必要もなかったのであろう。

払田柵跡における築地土塀と角材列は、地盤の相違に基づく区画施設の素材と工法の違いによるものであったが、角材列の中でも地盤に応じた対処の仕方の違いを見ることができる。

２　櫓状建物について

外郭東門の西にある築地土塀の東端部にある櫓状建物（ＳＢ79・80）から、昨年検出した櫓状建物（ＳＢ1096）の距離は約90ｍであったので、外郭線における櫓状建物の間隔を約90ｍと推定していたが、今回の調査ではＤ期建物だけでも106ｍの距離があることが判明した。(註１)

付近にＡ～Ｃ期の建物が存在するとすればそれ以上の距離となり、必ずしも外郭線上に等間隔で規則的に配置されていたものではなさそうである。また、Ａ～Ｃ期建物は存在せずＤ期建物のみであるならば、時期によって配置が異なることも考えられる。

３　溝について

角材列の北に溝が存在することが初めて明らかとなった。構築時期は、溝内に火山灰が堆積することから、少なくともＣ期角材列以前である。

しかし、長森の地形に沿ってカーブする築地土塀や角材列からなる外郭線に対し、直線で作られていて、それらとの距離は一定せず、郡山遺跡、胆沢城、徳丹城などの外郭線に伴う大溝のあり方とは大きく異なる。

また、長森丘陵の南側では、これまでの調査による限り検出されていない。東部が少し北にカーブすることから想定すれば、払田柵の北東を流れる河川から水を引き込んでいるものであろうか。外郭北門の前面ではどのようになっているのか、後述する第104次調査で検出されたホイド清水からの流れとどう関わるのかなど、今後角材列と共により西方の調査が必要である。

払田柵の外郭線にはこのように溝が伴うことが判明し、外柵との相違点の一つが増えたこと

になる。築地土塀、角材列、櫓状建物との位置関係は第11図のようになる。

4　ＳＸ1180について

角材列の内側に横たわる材木については、後藤宙外らによってその存在が知られていたが、(註２)文部省調査の報告書である『史蹟精査報告　第三』(註３)には次の記述がある。「柵木と山麓との間の水田も頗る軟かく深田である為めに多数の敷木が敷き詰められて居る、此の方法は又真山の南方字館前に於ても認められ、此の付近の湿地利用法の一であったであらうと思はれる。」

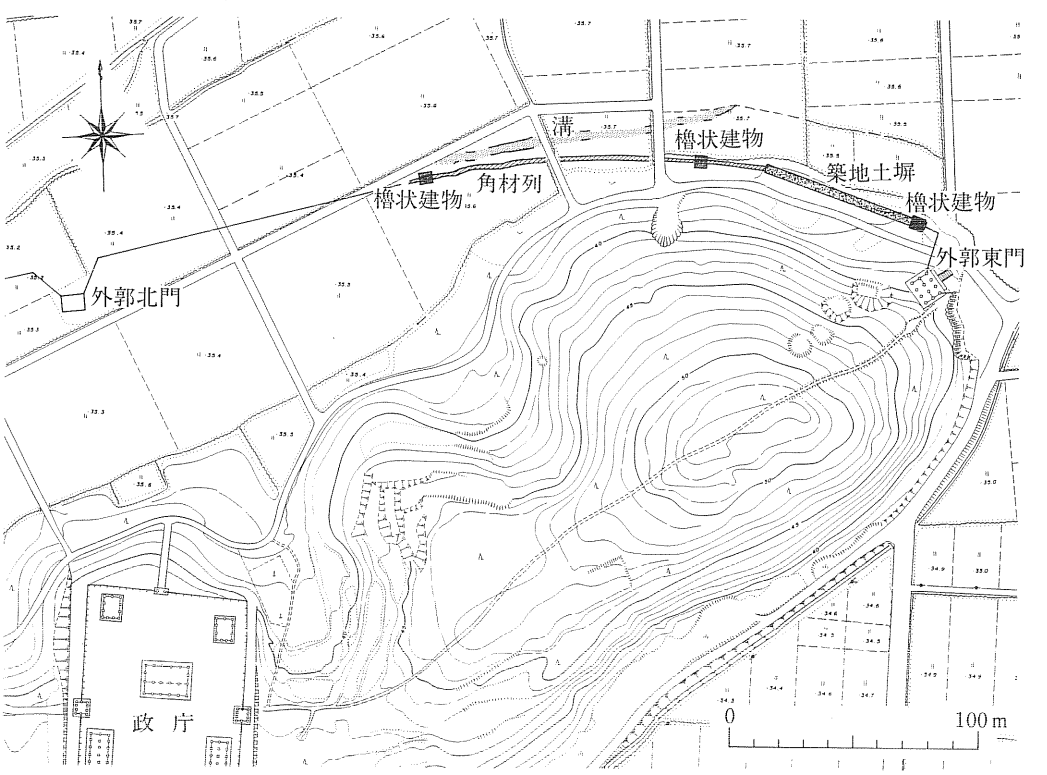
この館前の敷木は、写真図版では幾分丸みのある材木が４列に横たえられている様子がうかがわれ、遺構は現在も外柵南西部の内側に残っている。

今回、外郭線角材列の内側に平行して検出された材木遺構の性格は定かではないが、以上の記述などから推定すると、湿地状態の角材列の内部を歩行しやすくするためのものであろうか。

註１　払田柵跡の外郭線は曲線であるため、櫓状建物間の距離は測定方法によって多少異なり、この場合は調査東西基準線上における東西方向の距離である。また、４期あるので遺構の時期をＤ期に限定した上で、基準線に拘わらず、高低差を無視して遺構間の直接の距離を求めると、それぞれ92.5ｍ、106ｍとなる。

註２　後藤宙外「払田柵址は河辺府の遺蹟」『秋田考古会々誌』　第２巻第４号　1930（昭和５）年

註３　文部省『史蹟精査報告　第三　拂田柵阯・城輪柵阯』1938（昭和13）年



第11図　角材列、築地土塀、溝、櫓状建物の位置模式図

第４章　第104次調査

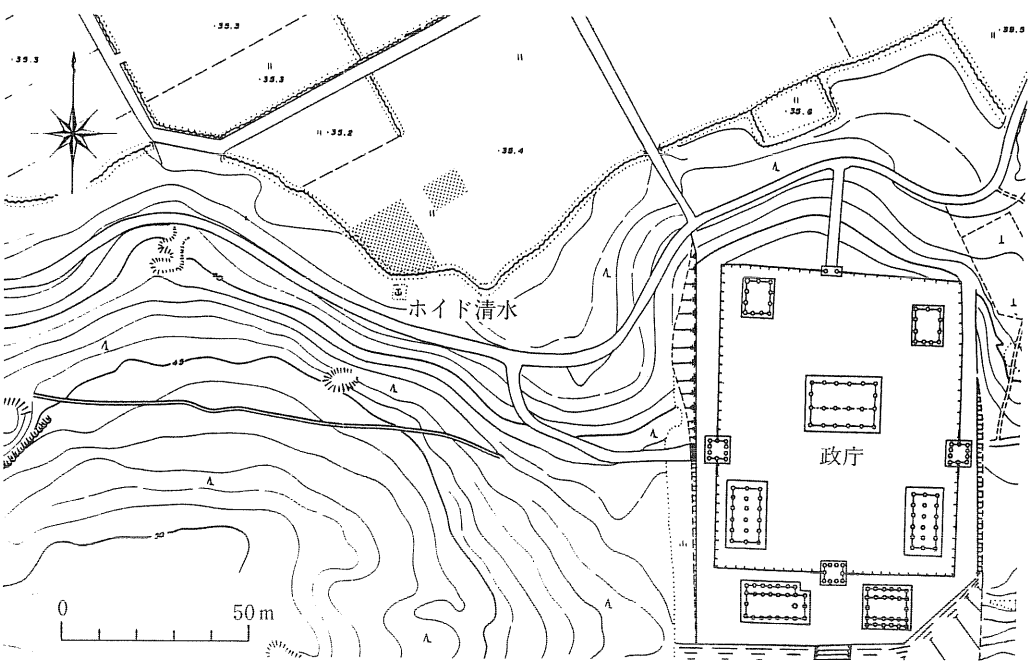
第１節　調査経過

第５次５年計画の一つに、外郭低地における建物などのあり方を探る調査を採り入れ、昨年度の第98次調査においてトレンチ13カ所を設定して予備的調査を実施した。

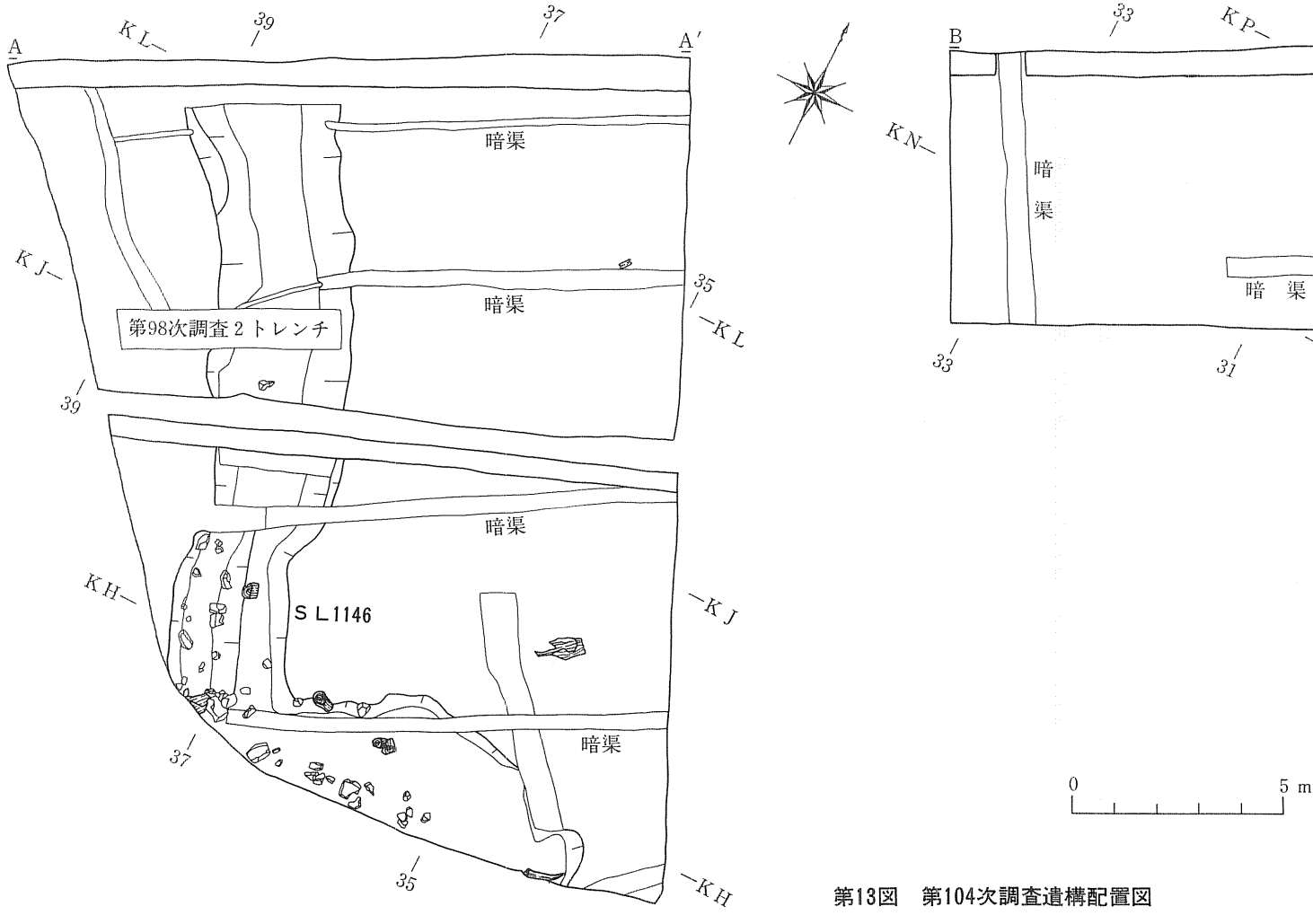
その結果、外郭低地は一部を除き広範囲にわたって地盤の軟弱な湿地であることが知られた。しかし、ホイド清水は古代から使用されている清水で、古くから木簡が採集されてきたほか、第49次調査においても井戸枠が検出され、木簡や木製品が出土した重要地点である。その北に位置する低地にも、ホイド清水に関連する何らかの施設の存在や、木簡等の遺物の出土が予想されたので、あえてこの位置の面的な調査を実施したのである。

調査は６月19日に開始し、第103次調査区からのテントの移動、機材の運搬等を行って翌日から表土剝ぎを開始した。26日、東西方向に２本のトレンチを設定し、土層の観察をしながら掘り下げる。28日、ホイド清水からの流れをＳＬ1146とする。他に遺構はなく、遺物もホイド清水に近いところから縄文、古代のものが少量出土するのみである。

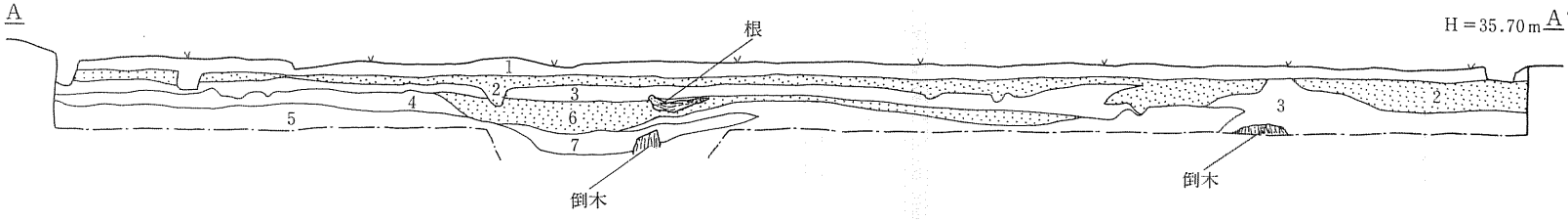
７月４日、ＳＬ1146を底部まで掘り下げる。７日、平面、断面の実測を終え、調査を終了した。



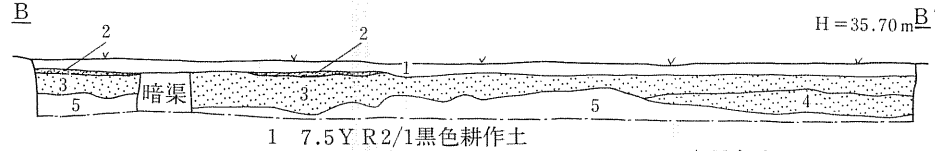
第12図　第104次調査位置図



第13図　第104次調査遺構配置図



1　7.5ＹＲ2/1黒色耕作土
2　7.5ＹＲ2/2黒褐色土、スクモ混じる
3　7.5ＹＲ3/2黒褐色粘土、木の根あり
4　10ＹＲ4/1灰色粘土
5　2.5Ｙ2/1黒色粘土
6　10ＹＲ2/2黒褐色粘土、木の根あり　スクモ混じる
7　7.5ＹＲ2/1黒色粘土、細かい植物混じる



1　7.5ＹＲ2/1黒色耕作土
2　10ＹＲ4/6褐色火山灰および10ＹＲ1.7/1黒色土
3　7.5ＹＲ2/2黒褐色スクモ層
4　10ＹＲ2/3黒褐色スクモ層
5　5Ｙ5/2灰オリーブ色粘土

0　2 m

第14図　土層断面図

第2節　遺構と遺物

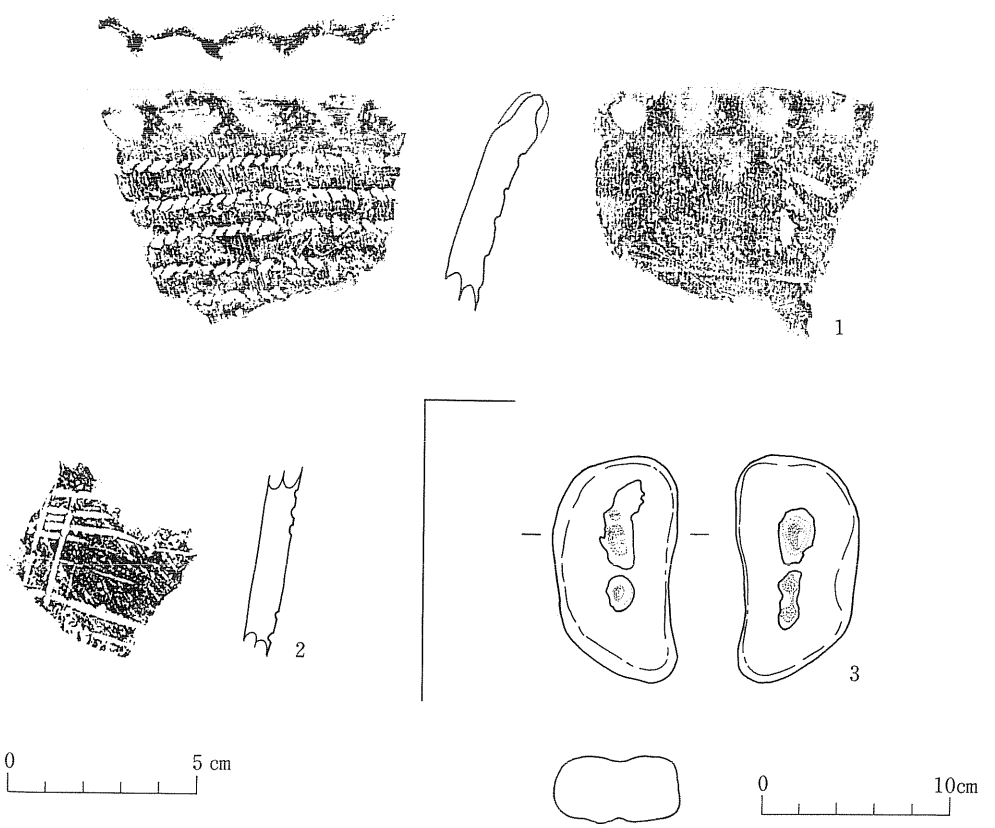
1　遺構と遺物　（第12・13図，図版8）

調査地はホイド清水北側にある標高35.3ｍの元水田である。基本土層は、第1層：黒褐色耕作土。第2層：十和田ａ火山灰と黒色シルト。第3層：黒褐色シルトにスクモが混じる。第4層：黒褐色粘土にスクモが混じる。第5層：灰色粘土である。河川跡1を検出した。

（1）河川跡

①　ＳＬ1146

ホイド清水から北へ向かって流れ出る河川跡で、長さ17ｍを検出した。幅2.8～3.6ｍ、深さ30～50cmあり、堆積土の上層は細かな植物が多く混じるスクモ層となっていて、下層にも黒褐



番号	種　別	器形	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
1	縄文土器	深鉢	口縁部の内外に押圧、その下に横位の撚紐圧痕。	6.5	8.0	1.0	19－7
2	縄文土器	深鉢	2～3条単位の沈線を、交互に斜位に施す。	4.1	4.7	0.8	
3	石　器	凹石	両面に2個づつの凹み。	12.1	6.5	3.5	19－8

第15図　ＳＬ1146出土遺物

色粘土の中に倒木や根が多く入っている。最下部には細かな砂利が堆積する。

調査区南部の上層から回転糸切り痕のある土師器杯の小破片が出土したが、下層からは古代の遺物はなく、縄文前期と考えられる土器（第15図１・２）や、両面に凹みのある凹石（３）が出土した。

調査区南側のホイド清水に近い丘陵裾は、東西約10ｍ、南北４ｍの範囲で黒色の落ち込みとなっていて、中に丘陵岩盤を形成する頁岩の角礫が多く見られるが、人為的なものではない。遺物は調査区南側に多く、これらとともに丘陵地から転落したもののように見られる。立木の根も丘陵側に多い。

ＳＬ1146には、人為的な形跡は見られず、ホイド清水からの湧水が自然にゆるやかに流れ出たものである。

この他の平坦面はスクモ混じりの軟弱な粘土層の地盤で、倒木や根が残っている。殊に北東部の調査区は耕作土を剝がすと火山灰が薄く全体に堆積し、その下は30～40cmの厚さのスクモ層となっている。

2　遺構外出土遺物

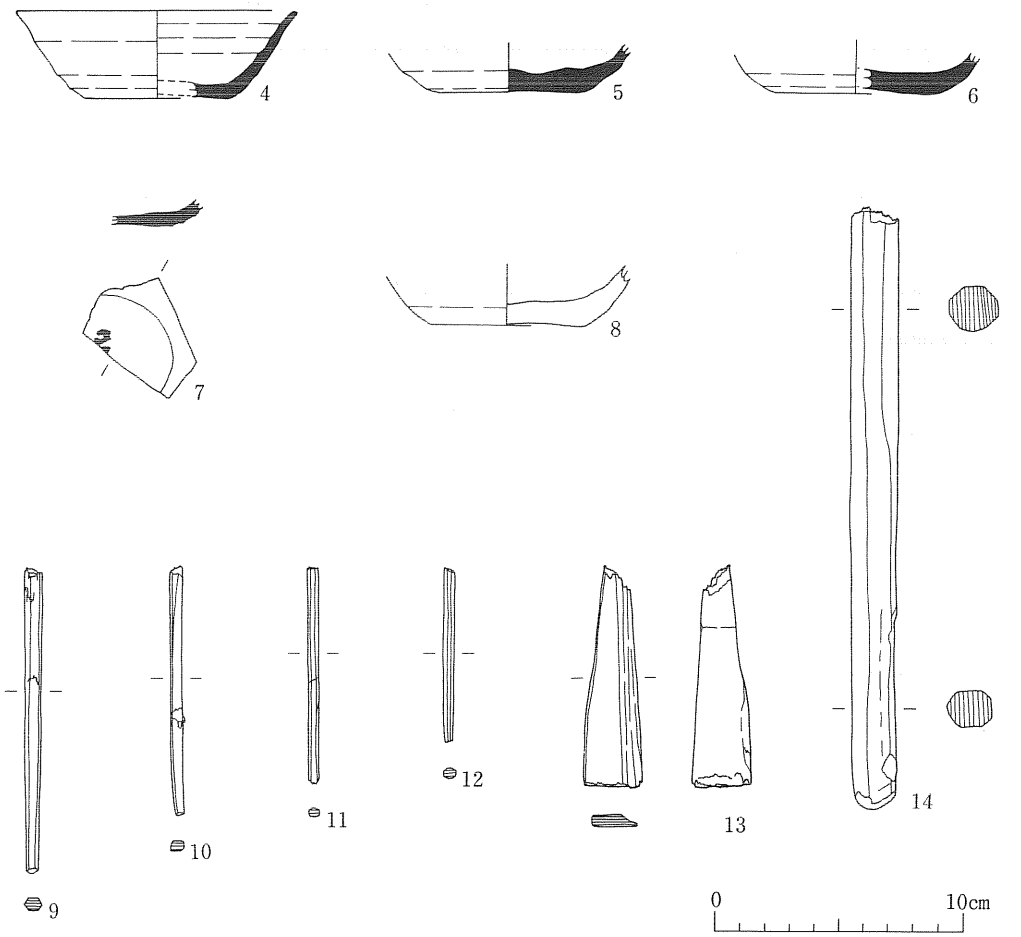
（１）　**須恵器**　第16図４～７は杯で灰色ないし灰白色を呈する。底部切り離しは４・７が回転糸切り、５・６が回転ヘラ切りによる。再調整は見られない。７の底面には「弓」と思われる墨書がある。他に破片資料であるが、壷の口頸部、甕の体部が出土した。

（２）　**土師器**　８は黄橙色の杯で、底部切り離しは回転糸切りによる。

（３）　**木製品**　９～12は箸、13はヘラ状の木器の一部と思われる。14は断面を円形に加工した棒状の製品である。下部10cmほどが擦り減っていて、柄杓などの柄かと推定される。

（４）　**縄文土器**　第17図15は深鉢の頸部で、押圧のある突帯の上位に横位の撚紐圧痕、下位に多軸絡条体を縦位に回転させた縄文が施されている。ＳＬ1146から出土した第15図１の土器と同一個体である。

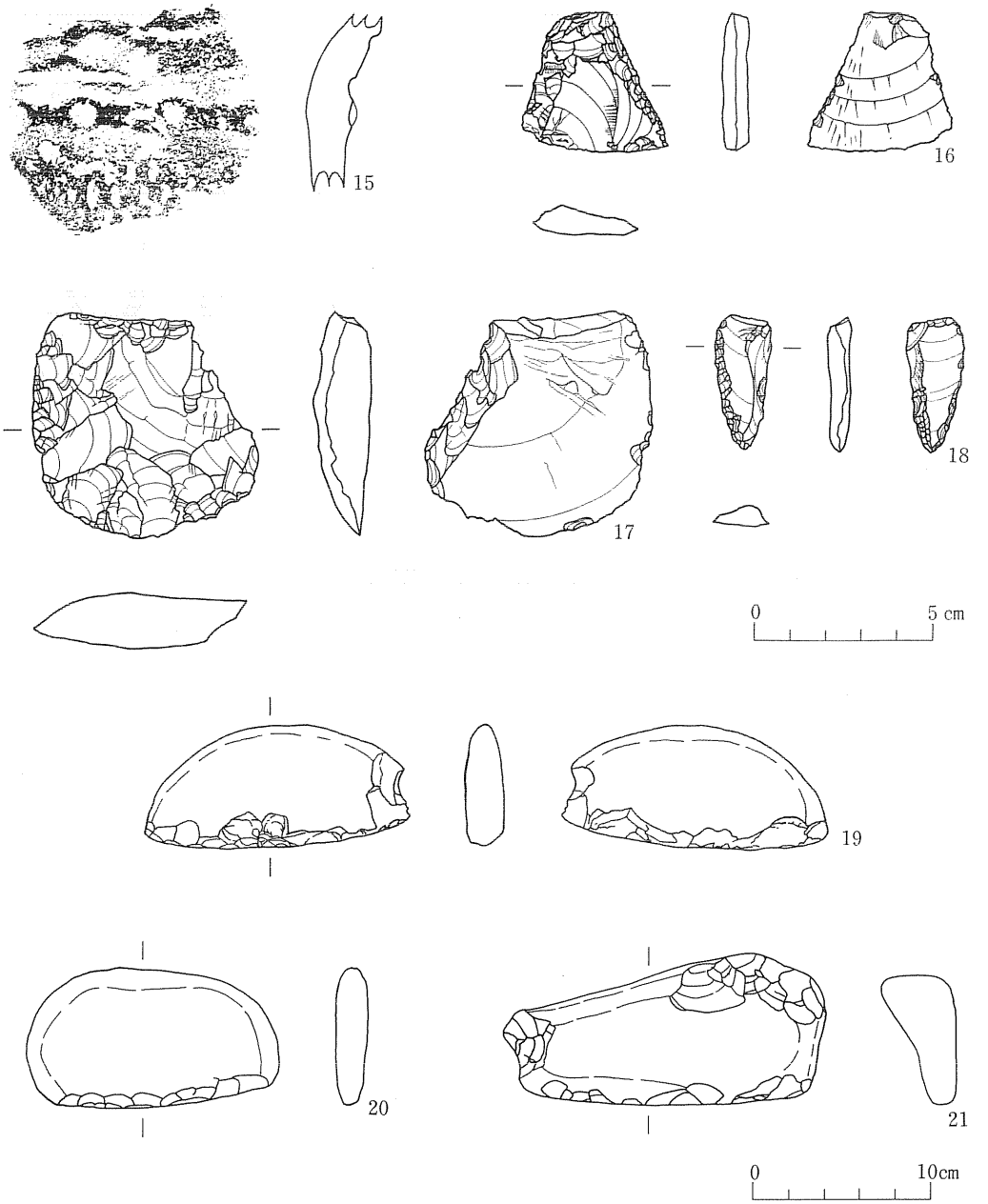
（５）　**縄文時代の石器**　16は両側縁に二次調整を施して刃部を作り出す。下部は破損している。17は１面の全体に調整剝離を施して丸みのある刃部を形成するが、片面には一次剝離面を大きく残す。18は両面に１次剝離面を残し、その両側に二次調整を施して鋭く尖る先端部を作る。先端部には使用痕と見られる摩滅があり、石錐としての使用が考えられる。19～21は半円形扁平打製石器で、19・20は一端に打ち欠きがある。第18図22は１面に浅い凹みがある。23は両面に浅い凹みがあるほか、側縁と端部に打痕がある。



番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
4	須恵器	杯	KG36・2層	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	11.2	5.4	3.5	0.5	31.3	31°	
5	須恵器	杯	KG34・3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ		5.8					
6	須恵器	杯	KG34・3層	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り 内面：ロクロナデ		6.6					
7	須恵器	杯	KG37・2層	外面：ロクロナデ、底部に墨書「弓」ヵ 内面：ロクロナデ							20－1
8	土師器	杯	KN33・火山灰上	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ		6.2					

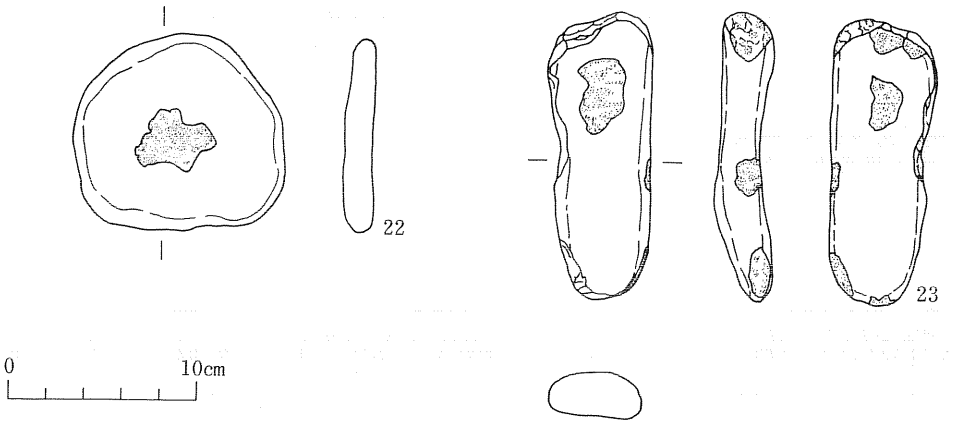
番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
9	箸	KH36・2層	折損。先端部を残す。	12.3	0.7	0.5	20－2
10	箸	KH36・2層	折損。先端部を残す。	10.0	0.5	0.4	20－2
11	箸	KH36・2層	折損。先端部を残す。	8.7	0.5	0.3	20－2
12	箸	KH36・2層	折損。先端部を残す。	7.1	0.4	0.4	20－2
13	篦状 未製品	KG35・2層	篦肩部から柄へ斜めに移行。	8.9	2.4	0.5	20－3
14	柄	KH36・2層	断面円形。基部が摩滅。	24.1	1.9	1.9	20－4

第16図　遺構外出土遺物(1)



番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図　版
15	縄文土器	深鉢	ＫＧ37・２層	押圧ある突帯、撚紐圧痕、多軸絡条体回転文。	6.5	7.8	1.4	20－５
16			ＫＨ37・２層		3.8	4.0	0.8	20－６
17			ＫＧ34・２層		6.3	6.3	1.6	20－７
18			ＫＩ37・２層	先端部が摩滅。	3.8	1.5	0.6	20－８
19	半円形編平打製石器		ＫＧ34・２層	一端に打ち欠きがある。刃部に磨痕。	7.0	14.8	2.3	21－１
20	半円形編平打製石器		ＫＨ37・２層	刃部に磨痕。	7.8	14.0	1.7	21－２
21	半円形編平打製石器		ＫＧ36・２層	刃部に磨痕。	8.5	17.9	4.2	21－３

第17図　遺構外出土遺物（２）



番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
22	凹　石	KH36・2層	一面に浅い凹み。	10.5	11.2	1.6	21－4
23	凹　石	KH35・2層	両面に浅い凹み。側縁と端部に打痕。	15.3	5.5	3.2	21－5

第18図　遺構外出土遺物(3)

第3節　小　　結

ホイド清水内やその周囲からは、これまで多くの木製品や木簡が出土し、その北にある低地からは、かつて開墾に際して材木が多量に出土したという伝承があり、ホイド清水に関わる建築物の存在が予想されてきた。

昨年度の第98次調査では、5年計画による外郭低地の調査に先立つ予備的調査として、ホイド清水の北にある低地にもトレンチを設定して土層の観察等を行った。この結果は必ずしも遺構の存在を窺わせるものではなかったが、トレンチによる小範囲の調査にとどまったため、今回あえて調査を実施したのである。

しかし、清水からの流れがあるほかは遺構は全く見られず、付近は広範囲にわたって極めて軟弱な土地である。木製品等の遺物の出土もほとんどなく、ホイド清水に関連する何らかの遺構は、低地には全く存在しないことが明らかとなった。

この流れは北西方向に流れると推定されるが、外郭線角材列や、第103次調査で検出されたＳＤ1145溝とが、この流れとどのように関連しているのか、今後の課題である。

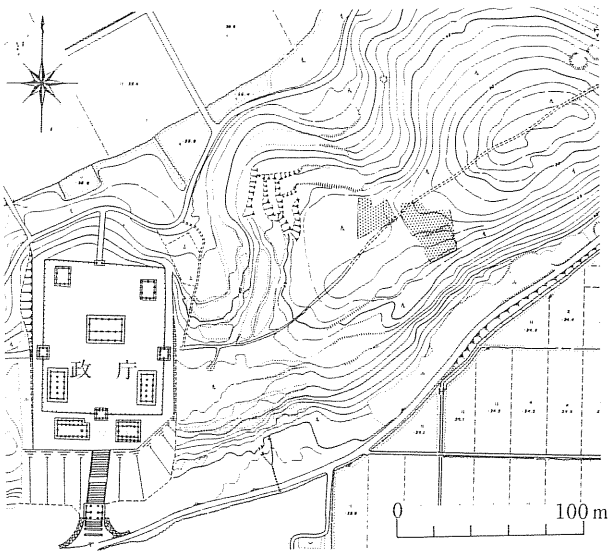
また、ＳＬ1146の堆積土下方からは、縄文前期の土器や石器が出土していて、この頃からホイド清水の湧水が利用されていたことが窺われる。

第５章　第105次調査

第１節　調査経過

政庁の東方には、長森丘陵上では政庁に次ぐ広さの平坦地が存在する。この平坦地の利用状態の解明を目的とする調査を平成３年度の第90次調査から開始し、５年度の第95次調査、６年度の第100次調査と進めてきた。

その結果、９世紀初頭頃から10世紀代にわたっての、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板塀など多くの遺構が検出され、それらの変遷にも大まかな見通しを得ることができた。



第19図　第105次調査位置図

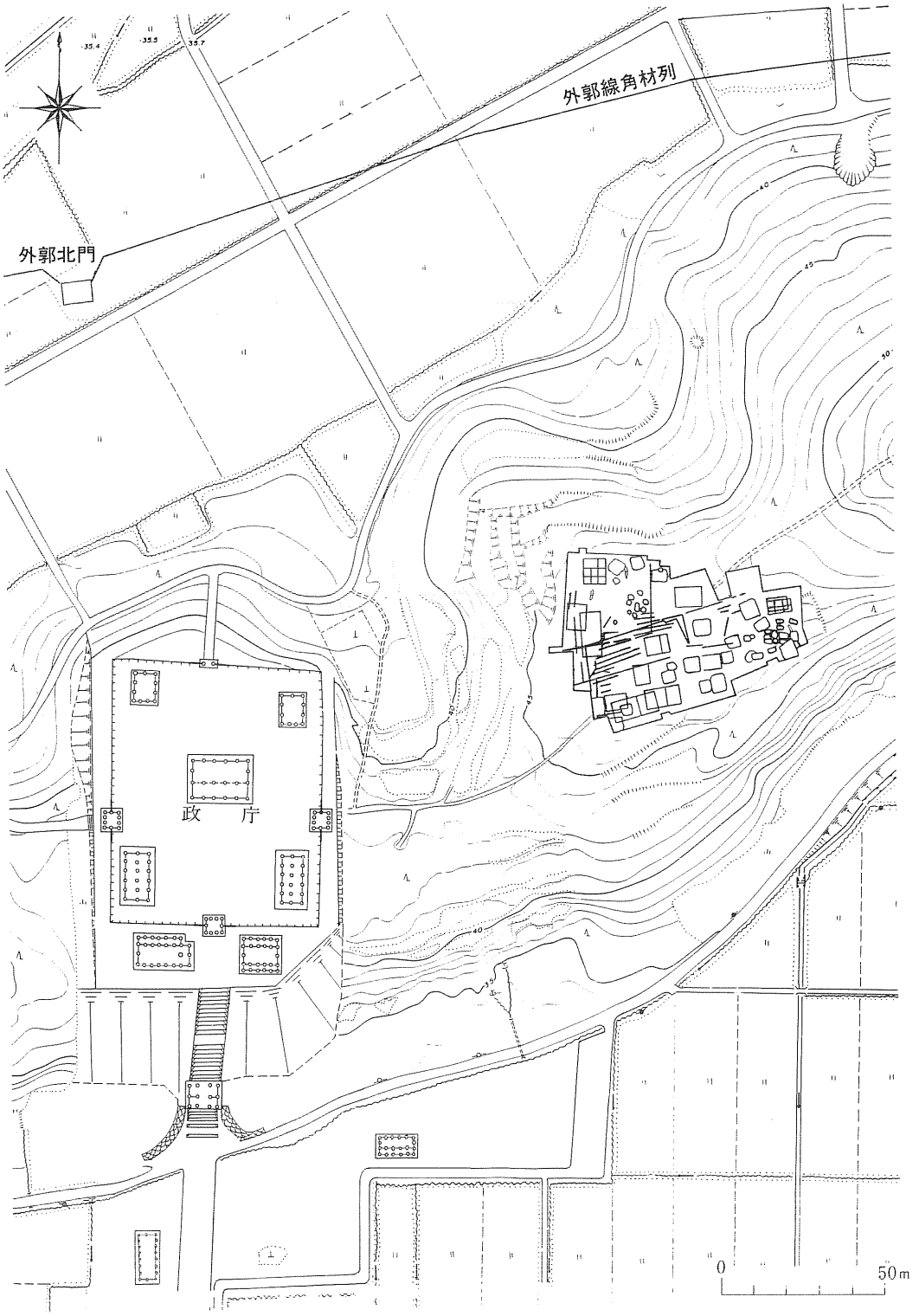
昨年の第100次調査では、東西棟のＳＢ1127掘立柱建物跡が、その西にある第90次調査で検出された南北棟のＳＢ937掘立柱建物跡と共にこの地域の創建期の建物で、ＳＢ1127を中心としてＳＢ937に対応する南北棟の建物の存在が、東の未調査区に予想された。

このため、今回はＳＢ1127掘立柱建物跡の全容の検出と、それら創建期建物群の配置状況を探ることを主目的に調査を実施したのである。

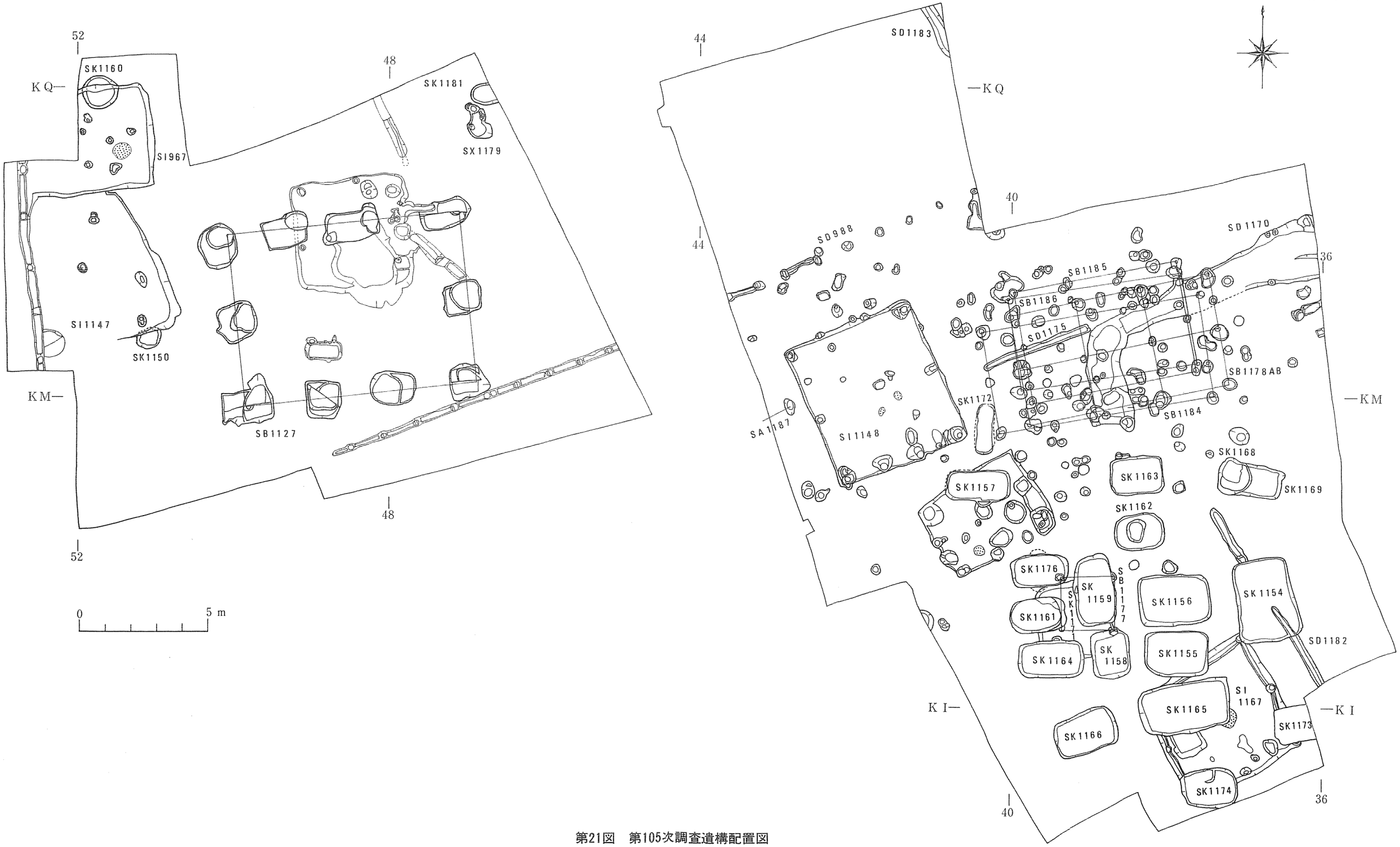
７月12日にテント設営、機材の運搬を行って調査を開始した。ＳＢ1127は桁行５間と推定していたが、３間であることが判明し、その西に新たな竪穴住居跡も検出した。24日、東側調査区の表土剝ぎを終了し、北から遺構の検出作業を始めた。７月31日、ＳＢ1127とその付近の竪穴住居跡の写真撮影を行って、実測を開始した。

８月10日、東側調査区のＳＩ1148竪穴住居跡から「官　小勝」の墨書のある土器が出土した。この後、土坑が次々に検出されたが、当初その検出を目指したＳＢ1127・ＳＢ937に対応する建物は存在しないことが明確となった。28日、長雨のため調査区の南斜面が崩落。29日、ＳＩ1167より漆紙文書の細片が出土。９月１日、土坑群の写真撮影を行い、実測を開始した。

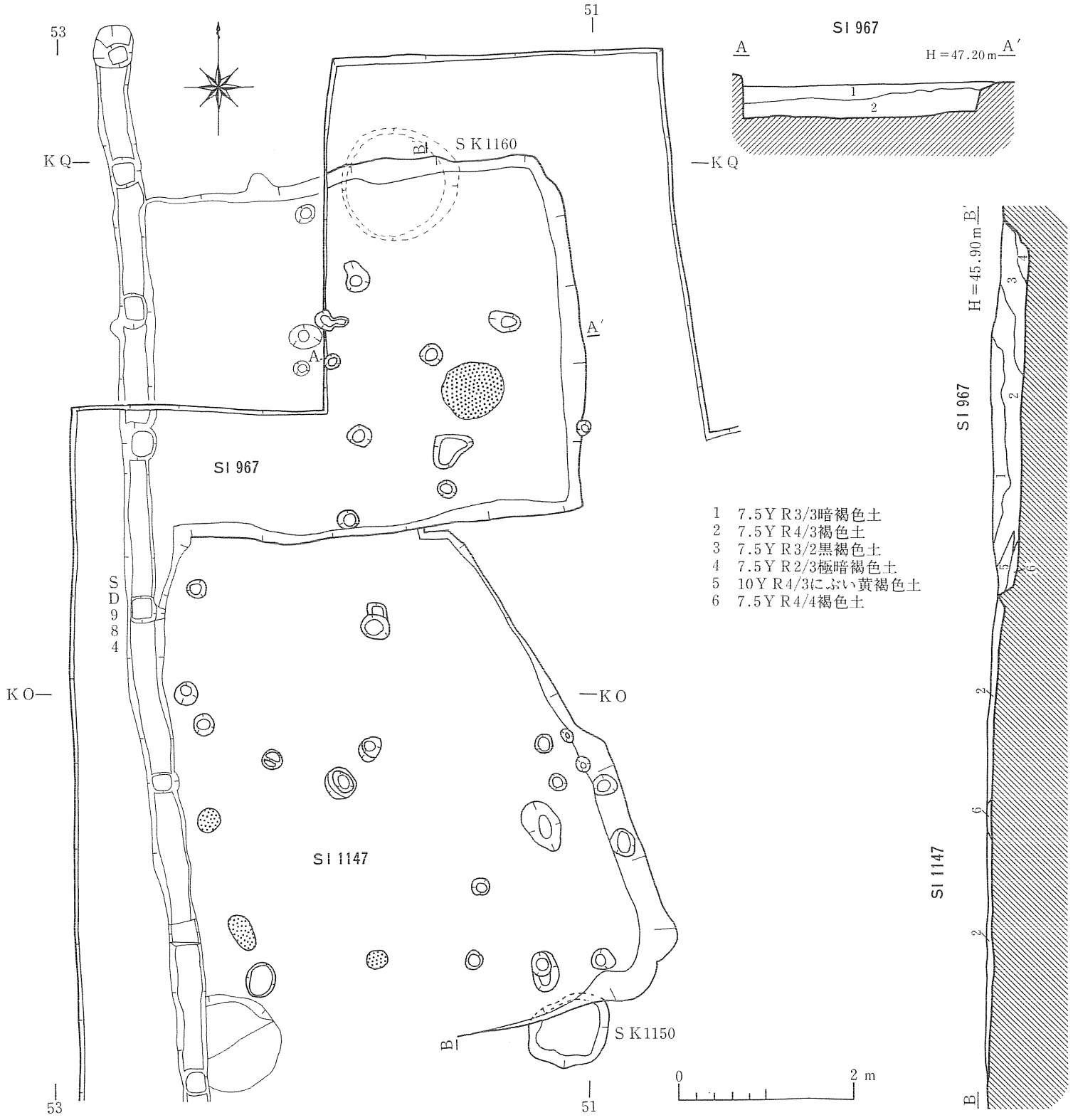
この後、新たな土坑も検出。13日、小規模な掘立柱建物跡のあることに気付き、柱穴を掘り



第20図　政庁と調査区



第21図　第105次調査遺構配置図



第22図　ＳＩ967・1147

下げ、20日、重複する４棟の掘立柱建物跡を検出。22日、東側調査区の全景写真の撮影を行って、28日には実測を終了した。

10月９日には第41回顧問会議を開催し、調査研究の顧問である国立歴史民俗博物館情報資料研究部長岡田茂弘教授に対し、第103次・104次調査も含めて調査成果の概要を報告するとともに、現地でも御指導いただいた。12日には報道関係者に対し調査成果を発表、14日には現地説明会を開催したところ、約110名の参加者があった。17日から遺構細部の埋め戻しを開始、19日に調査を終了した。

第２節　検出遺構と遺物

１　遺構と遺物　（第19～21図，図版９）

調査地は、北部はほぼ平坦であるが、東側調査区は南に緩やかに傾斜している。標高は東側の北端で48.40ｍ、南端で46.0ｍである。基本土層は、第１層：黒褐色シルトの表土、第２層：暗褐色シルト、第３層：黒褐色シルトで、第３層から遺構が掘り込まれる。調査の結果、これまで一部を検出していた４遺構を含め、40遺構を検出した。内訳は古代の竪穴住居跡５、掘立柱建物跡６、柱列１、土坑22（縄文時代の土坑１）、溝４、板塀１、その他の遺構１である。

（１）　竪穴住居跡

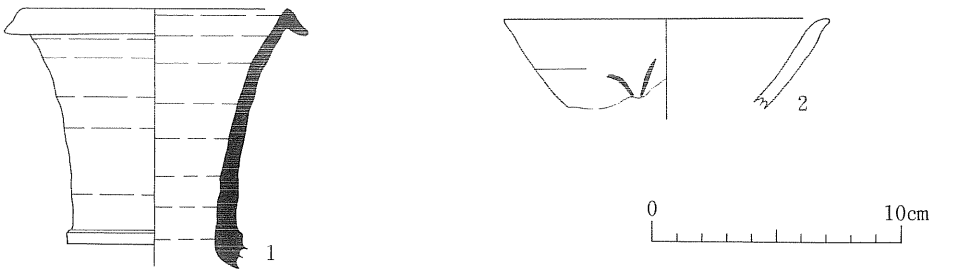
①　**ＳＩ967**　（第22図，図版10）

調査区北西部にあり、第90次調査で西半部のみを調査していたが、今回その東半部を調査して全容を検出した。第90次調査で検出した南辺の位置には誤りがあることがわかり、その南に明確な壁のあることが判明した。

東西5.1ｍ、南北4.15ｍ、面積19.3㎡である。南にＳＩ1147、西にＳＤ984板塀が接するが、重複関係はいずれも不明である。南西隅はＳＤ984板塀を掘る際の掘り過ぎがあり、住居の壁は定かでない。北辺は高さ10～24㎝、東辺は27～36㎝で、北辺中央部で縄文時代のＳＫ1160を切っている。壁溝はない。床面は全体に平坦で、硬化面はない。カマドは付設されていないが、住居南東部に直径70㎝の円形の炉がある。

柱穴は第90次調査報告では北辺中央部のピットがそれと記したが、それはその下に縄文時代のＳＫ1160があるための誤認で、明確な柱穴は存在しない。第90次調査では覆土中央部に火山灰の堆積が見られ、火山灰降下よりは明らかに古い年代の遺構である。

遺物には須恵器長頸壷（第23図１）、体部に逆位に墨書のある土師器杯（２）がある。他に破片資料として須恵器壷と甕の体部、回転ヘラ切り痕のある土師器杯が出土した。



番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版
1	須恵器	長頸壺	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	12.0						
2	土師器	杯	外面：ロクロナデ、体部に墨書「□」　内面：ロクロナデ	13.0						21－6

第23図　ＳＩ967出土遺物

②　**ＳＩ1147**　（第22図，図版10）

ＳＩ967の南にあり、東辺の壁のほかは残存しないが、一辺がおおよそ5.5ｍほどの規模かと推定される。ＳＩ967とごくわずかに接しているが、切り合いは不明である。また、ＳＤ984板塀とも重複し、本住居の床土がＳＤ984を覆っていないことから、ＳＤ984に切られていると判断される。南辺はＳＫ1150を切っている。

東辺は10cm前後の高さがあり、殊にその南部が緩やかに傾斜して立ち上がる。壁溝はない。床面は全体に平坦で、硬化面はない。カマド、炉は存在しない。深さ10～16cmほどのピットがあるが、その位置や規模から柱穴とは考えられない。

遺物は破片資料であるが、回転ヘラ切り痕のある須恵器杯の底部、回転ヘラ切り痕・回転糸切り痕のある土師器杯底部、内面黒色処理を施した土師器杯が出土した。

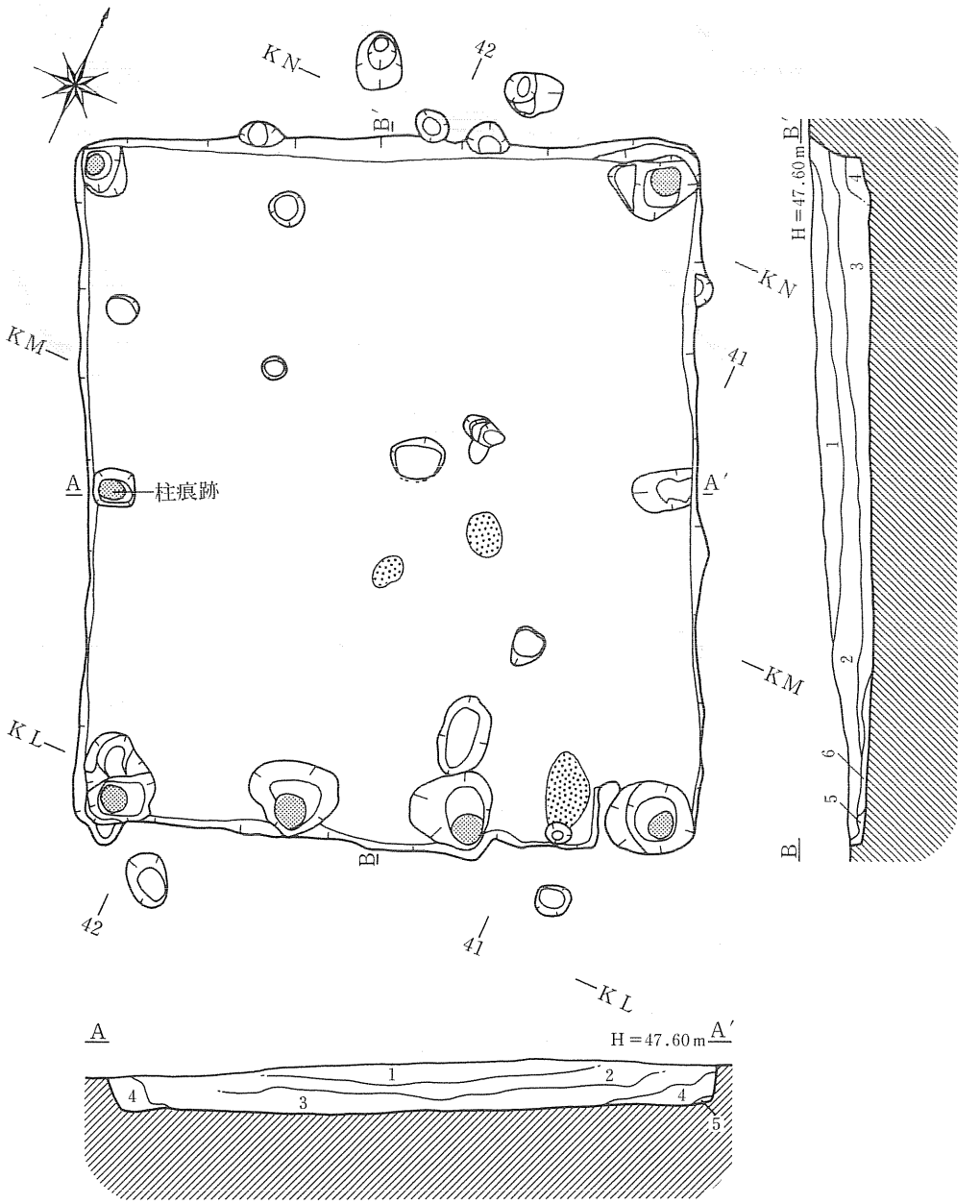
③　**ＳＩ1148**　（第24図，図版10・11）

調査区の中央部にあり、東西5.2ｍ、南北6.0ｍ、面積30.5㎡である。他の遺構との重複はない。壁は４辺とも直線的で、残存状態は良好であるが、周辺が南に緩やかに傾斜しているため、北辺では40～45cm、南辺では約15cmの高さで、ほぼ垂直かわずかに外方に傾斜して立ち上がる。壁溝は存在しない。床面は全体に平坦で、硬化面はない。

カマドは南辺の東寄りの位置にあるが、残存状態は悪く、燃焼部の焼面と、東側のソデがわずかに残るだけである。床面中央部に長軸32～38cmの炉が２箇所ある。

柱は東西両辺に３本、北辺には２本、南辺は４本で、直径20～25cmの柱痕跡がある。覆土中に火山灰の小ブロックがあり、火山灰降下よりも古い時期の住居である。

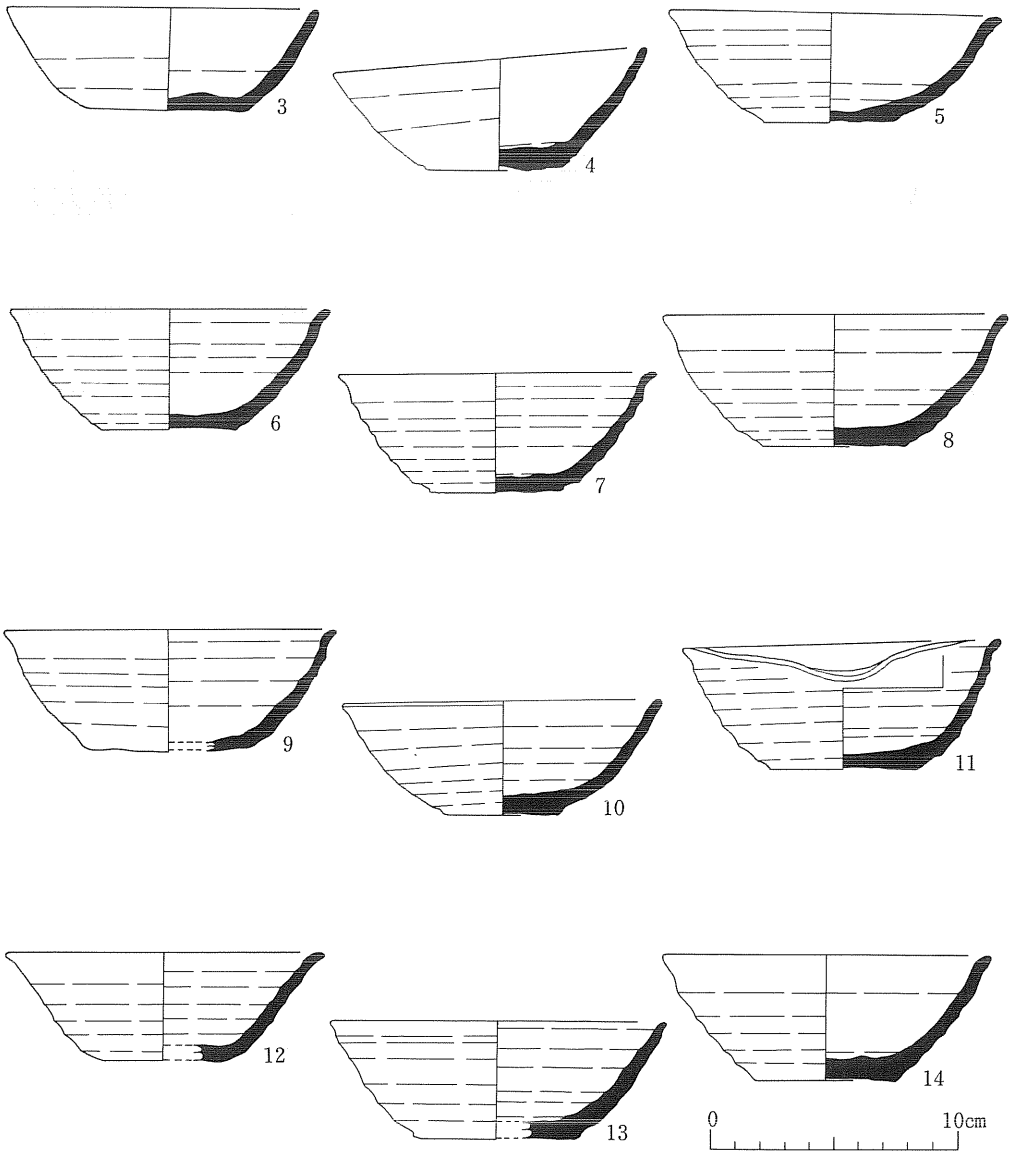
第25図３～15は須恵器杯である。３・４は体部が椀状に丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が外反しない。５～13はわずかに外反する。11は意図的に片口に造っている。16・17・20は高台杯である。17・18・20は器高が深く、体部が直線的に立ち上がる。色調は３～11・19・21・22



1　7.5ＹＲ3/2黒褐色土
2　10ＹＲ3/2黒褐色土、火山灰小ブロック少し混入
3　10ＹＲ2/2黒褐色土
4　7.5ＹＲ2/1黒褐色土に7.5ＹＲ4/6褐色地山土混入
5　7.5ＹＲ4/6褐色地山土
6　7.5ＹＲ3/3暗褐色土に炭火物多く含む

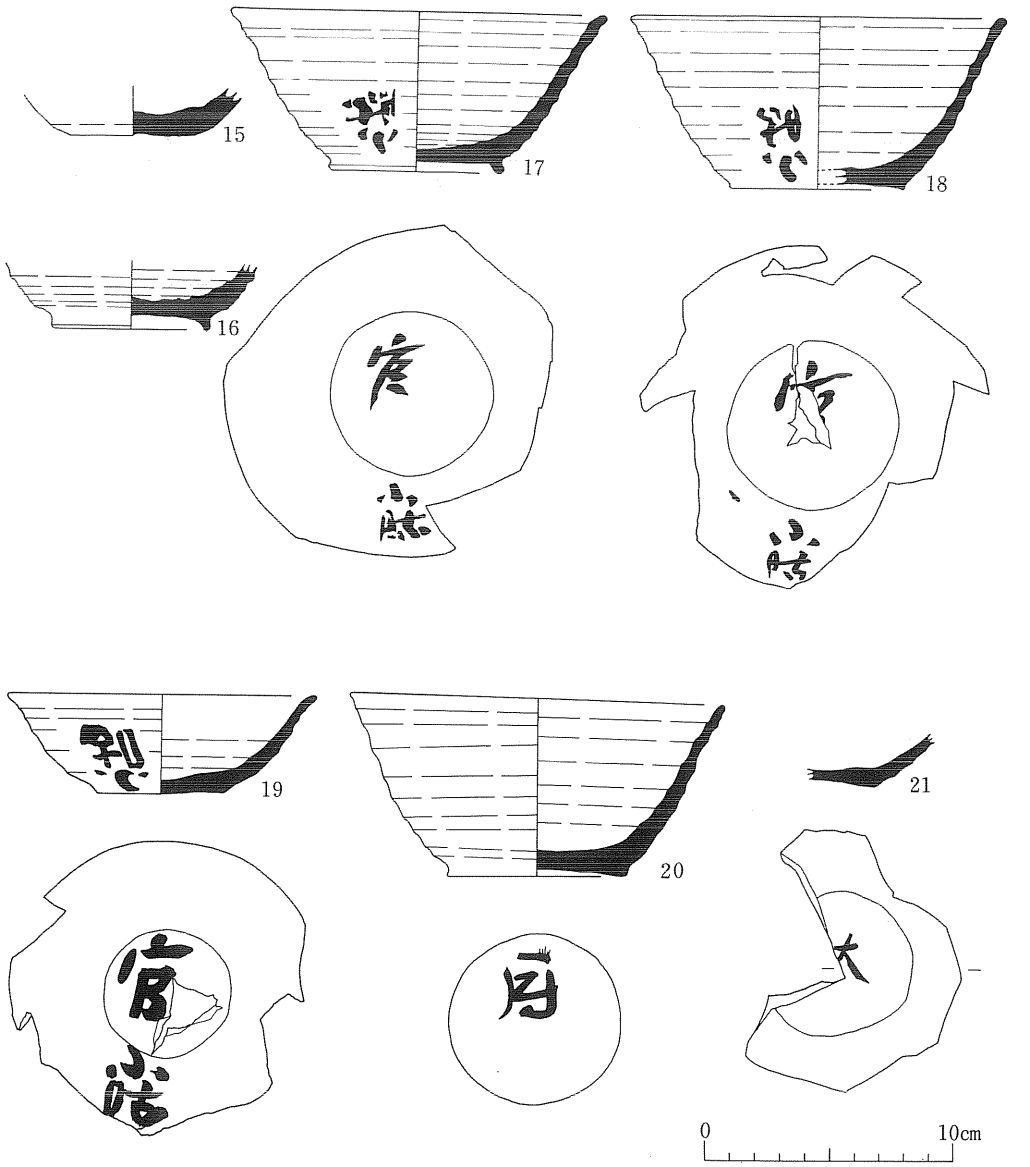
0　2 m

第24図　ＳＩ1148



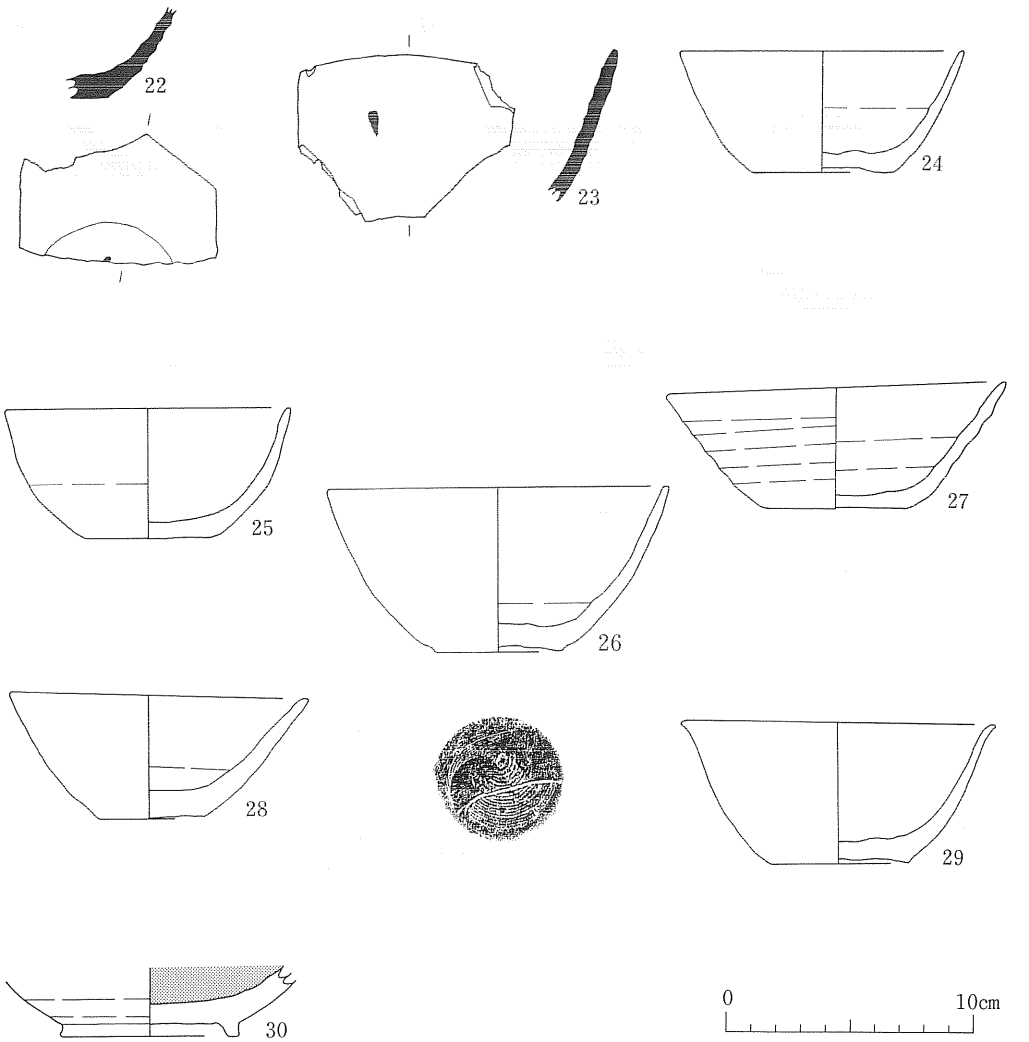
番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
3	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.5	6.4	4.2	0.50	33.0	28°	22－1
4	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.5	5.6	5.0	0.50	40.0	30°	22－2
5	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.3	5.8	4.5	0.40	33.0	32°	22－3
6	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.4	4.8	0.40	37.5	30°	
7	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.2	4.8	0.40	37.5	30°	22－4
8	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.8	5.6	5.3	0.40	38.4	29°	22－5
9	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.4	6.0	4.9	0.40	36.0	28°	22－6
10	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	4.4	4.7	0.34	36.7	29°	
11	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ　片口	12.8	5.8	5.2	0.50	40.0	23°	22－7
12	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	4.6	4.3	0.40	33.6	35°	
13	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.4	6.2	4.7	0.50	35.1	30°	
14	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	5.4	5.0	0.40	37.0	31°	22－8

第25図　ＳＩ1148出土遺物（１）



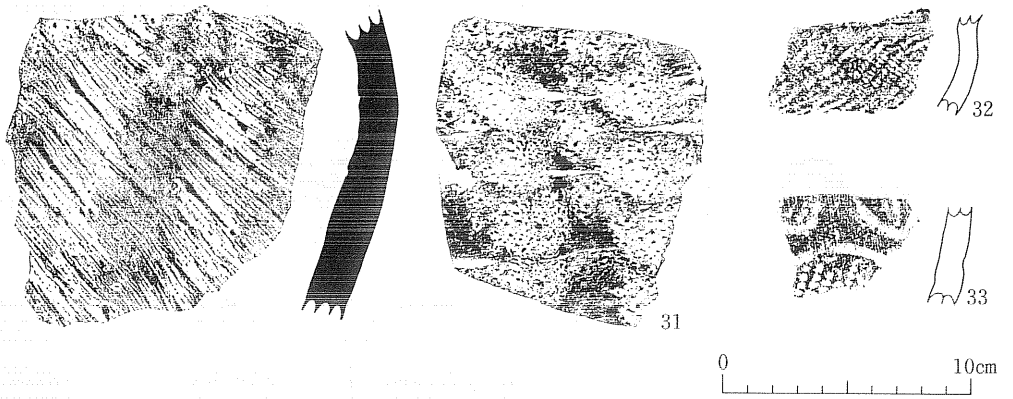
番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
15	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ		5.2					
16	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ		高台径 5.0	高台高 0.5				
17	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に「官」、体部に「小勝」の墨書 内面：ロクロナデ	15.0	高台径 6.6	6.4		42.0		23－1
18	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に「官」、体部に「小勝」の墨書 内面：ロクロナデ	15.0	6.8	6.9	0.5	46.0	25°	23－2
19	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に「官」、体部に「小勝」の墨書 内面：ロクロナデ	12.4	5.2	4.0	0.4	32.3	35°	23－3
20	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に墨書「厨」 内面：ロクロナデ	15.0	7.0	7.4	0.5	49.0	23°	24－1
21	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に墨書「□」 内面：ロクロナデ							24－2

第26図　ＳＩ1148出土遺物（２）



番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
22	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に墨書「□」 内面：ロクロナデ							
23	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　体部に墨書「□」 内面：ロクロナデ							
24	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.4	5.6	4.9	0.5	42.0	23°	24－3
25	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り→軽くナデか 内面：ロクロナデ	11.4	5.0	5.2	0.4	45.6	18°	
26	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.6	5.0	6.6	0.4	48.0	23°	24－4
27	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.6	5.7	5.1	0.4	37.0	33°	24－5
28	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ　口縁部に煤付着	12.0	4.2	5.2	0.4	43.0	26°	24－6
29	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.6	5.6	5.8	0.4	46.0	24°	24－7
30	土師器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ヘラミガキ、黒色処理		高台径 6.6	高台高 0.5				

第27図　ＳＩ1148出土遺物（３）



番号	種　別	器形	特　　徴	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	図　版
31	珠洲系陶器	甕	外面：平行叩き目　内面：アテ具痕	13.1	12.6	1.7	
32	縄文土器	鉢	体部に斜行縄文。	4.6	6.6	0.7	
33	縄文土器	深鉢	曲線文、斜行縄文。	4.7	5.0	1.1	

第28図　ＳＩ1148出土遺物（４）

・23は灰色で硬く、他は橙色ないし浅黄橙色であるが硬い。17～19は底面から体部に「官小勝」、20は底面に「厨」、21は底面に墨書があるが文字は不明である。第27図22・23にも墨痕が見られる。底部切り離しは15のみが回転ヘラ切りで、他は回転糸切りによる。

第27図24～30は橙色の土師器である。24～26は丸みのある体部で、口縁部は外反しない。27は直線的に立ち上がる。28は口縁部に煤状の物質が付着している。30は内面に黒色処理を施す。底部切り離しは全て回転糸切りによる。第28図31は珠洲系陶器で覆土の上面から出土した。32・33は縄文土器である。

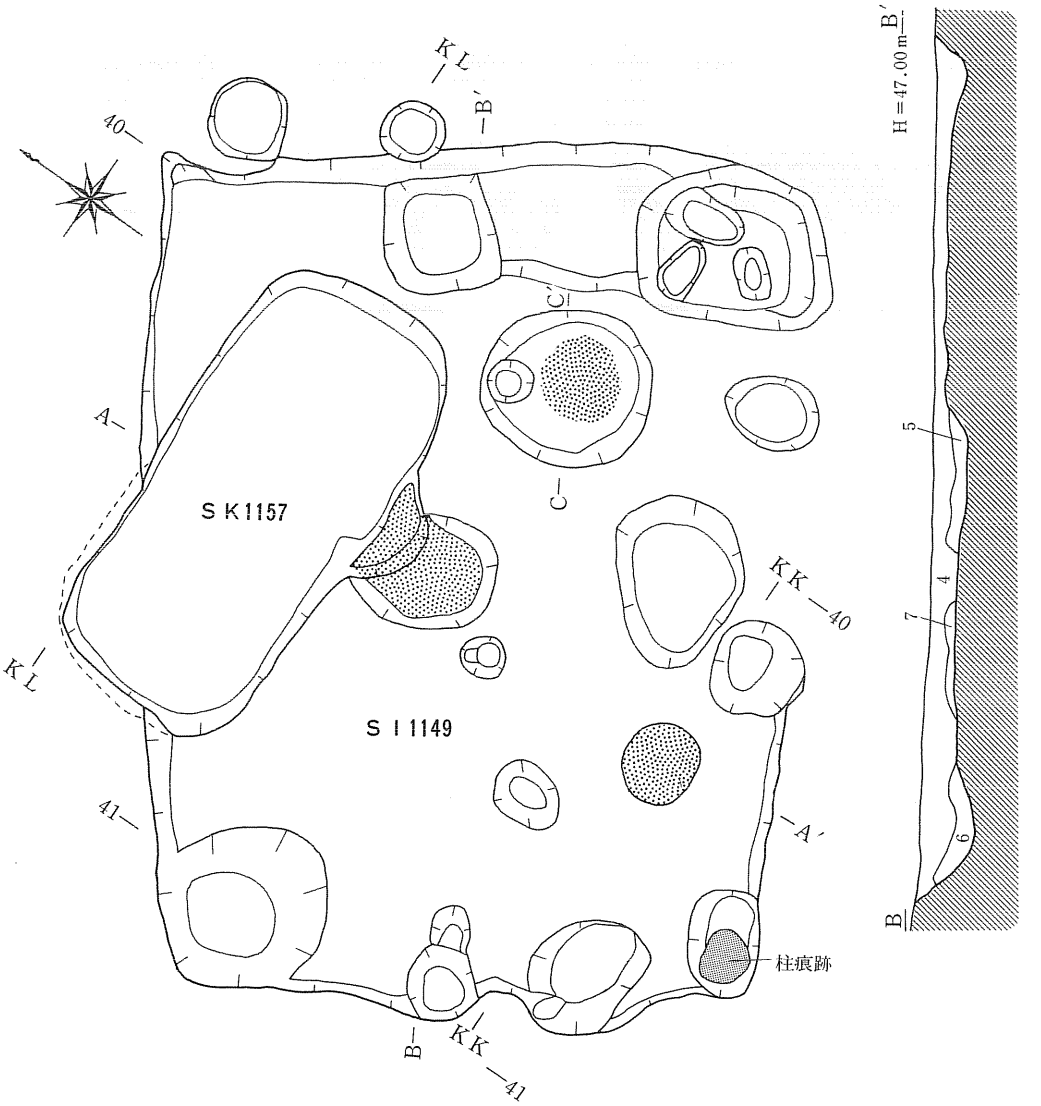
破片資料として、床面や覆土の下方から、底部切り離しが回転糸切り、回転ヘラ切りによる須恵器・土師器の杯、須恵器甕の体部、内外両面に叩き目のある土師器甕の体部が出土した。

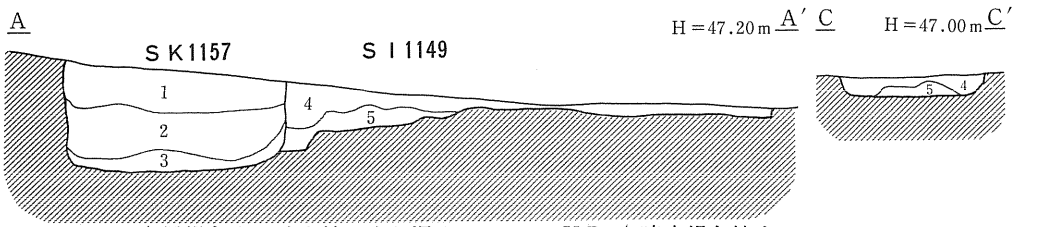
④　**ＳＩ1149**　（第29図，図版11）

ＳＩ1148の南東にあり、東西4.5ｍ、南北3.4ｍ、面積15.3㎡である。ＳＫ1157に切られている。南に緩やかに傾斜しているため、壁は南ほど低く、北辺では30～33cmの高さがあるが、南辺はその西側に５cmの高さでわずかに残っているだけである。壁溝は存在しない。

床面は平坦で全体が硬化している。カマドはなく、住居南西部に長径44cm、短径38cmの範囲の炉がある。柱穴として確実なものは住居南西隅のみで、長軸55cmの柱穴の中に直径25～30cmの柱痕跡がある。しかし、他の柱穴は定かでない。

その他、床や壁ぎわに深さ10～20cmほどの円形の凹みが多くある。南東隅のそれは長軸100cm、短軸80cmあり、東辺に沿って浅く緩やかに凹んでいる。住居中央部とその東にある凹みは、中に焼土粒を多く含み、土器片もやや多い。これらは、埋土の状況から本住居に付随したものと考えられる。

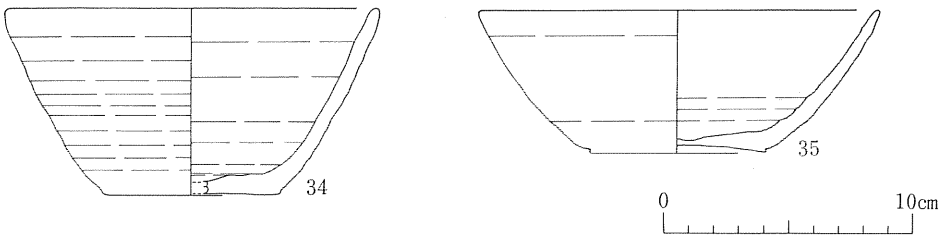




1　10YR2/3黒褐色土に地山粒子少し混入
2　7.5YR3/2黒褐色土に地山粒子多く混入
3　10YR3/2黒褐色土に地山粒子少し混入
4　10YR2/2黒褐色土
5　5YR3/3暗赤褐色焼土
6　7.5YR2/2黒褐色土
7　7.5YR3/3暗褐色土

0　1 m

第29図　SI1149、SK1157



番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
34	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	15.0	7.0	7.5	0.50	50.0	22°	
35	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	16.0	6.8	5.7	0.43	84.0	31°	25－1

第30図　ＳＩ1149出土遺物

第30図34は灰黄褐色を呈する土師器杯、35は浅黄橙色の土師器で、いずれも底部切り離しは回転糸切りによる。

このほか、破片資料として、須恵器杯の口縁部、底部切り離しが回転糸切りおよび回転ヘラ切りの杯底部、土師器甕の口縁部、体部などが出土した。

⑤　**ＳＩ1167**　（第31図，巻首図版３，図版12）

調査区南東部にあり、東西4.9ｍ、南北5.0ｍ、面積22.6㎡である。覆土上面からＳＫ1154・1155・1165・1173・1174が掘り込む。

遺構検出面から床面まで全体に深く、壁の高さは北辺では95㎝、東・西両辺では70～85㎝、南辺で40㎝である。南辺を除いて幅約20㎝、深さ５～10㎝の壁溝がある。

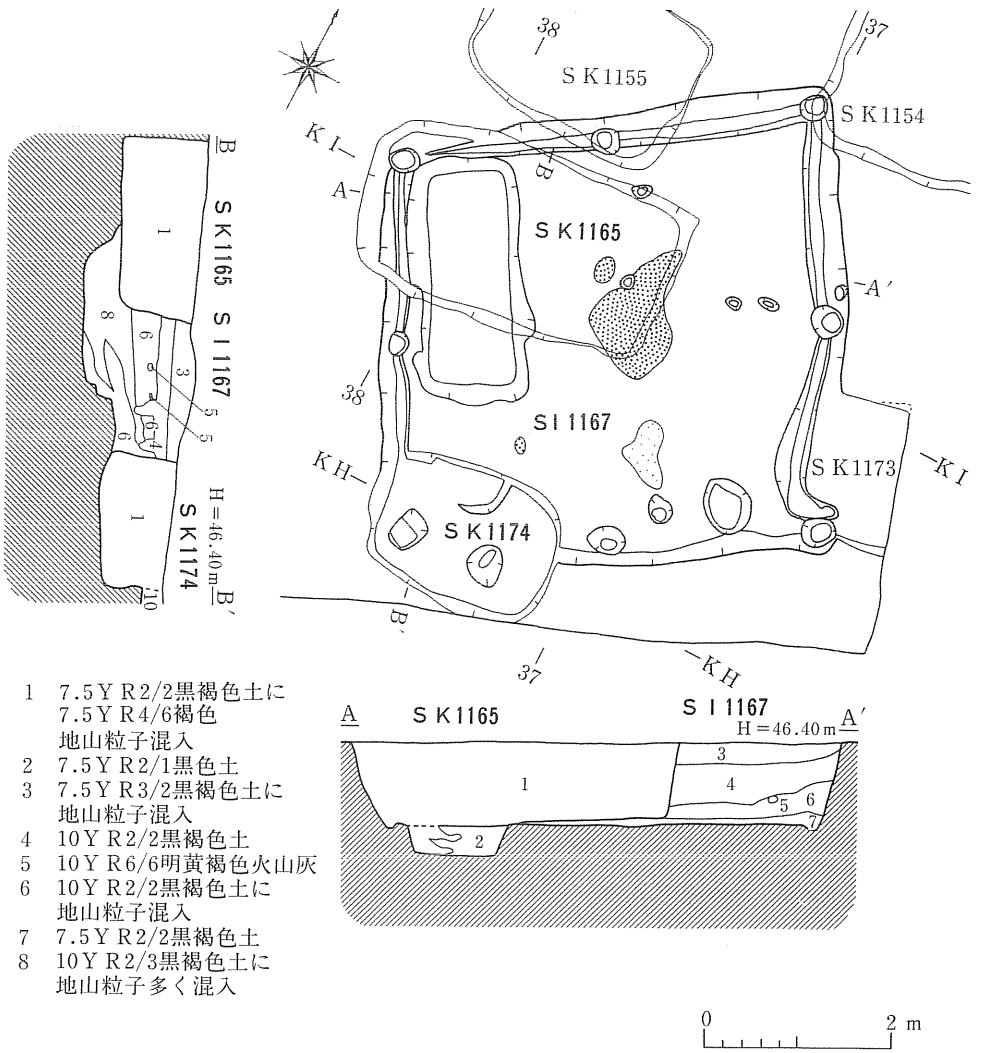
床面は平坦で、住居北東部を除き全体が硬化している。カマドはないがＳＫ1174によって切られ、残存しない可能性はある。床中央部に長軸1.5ｍ、短軸0.9ｍの範囲で炉があり、炉と南壁との間に炭化物が分布する。北西部に住居の西辺に沿う形で、南北2.6ｍ、東西１～1.2ｍ、深さ30～35㎝の掘り込みがあり、本住居に伴うものと考えられる。

柱は各辺に３本で、直径20～40㎝、床面からの深さ20～43㎝の柱穴があるが、柱痕跡は認められなかった。北東隅の柱が幾分北に偏する位置にあるため、住居の平面形が歪んでいる。覆土の中位に火山灰が含まれており、火山灰降下よりは古い年代の遺構である。

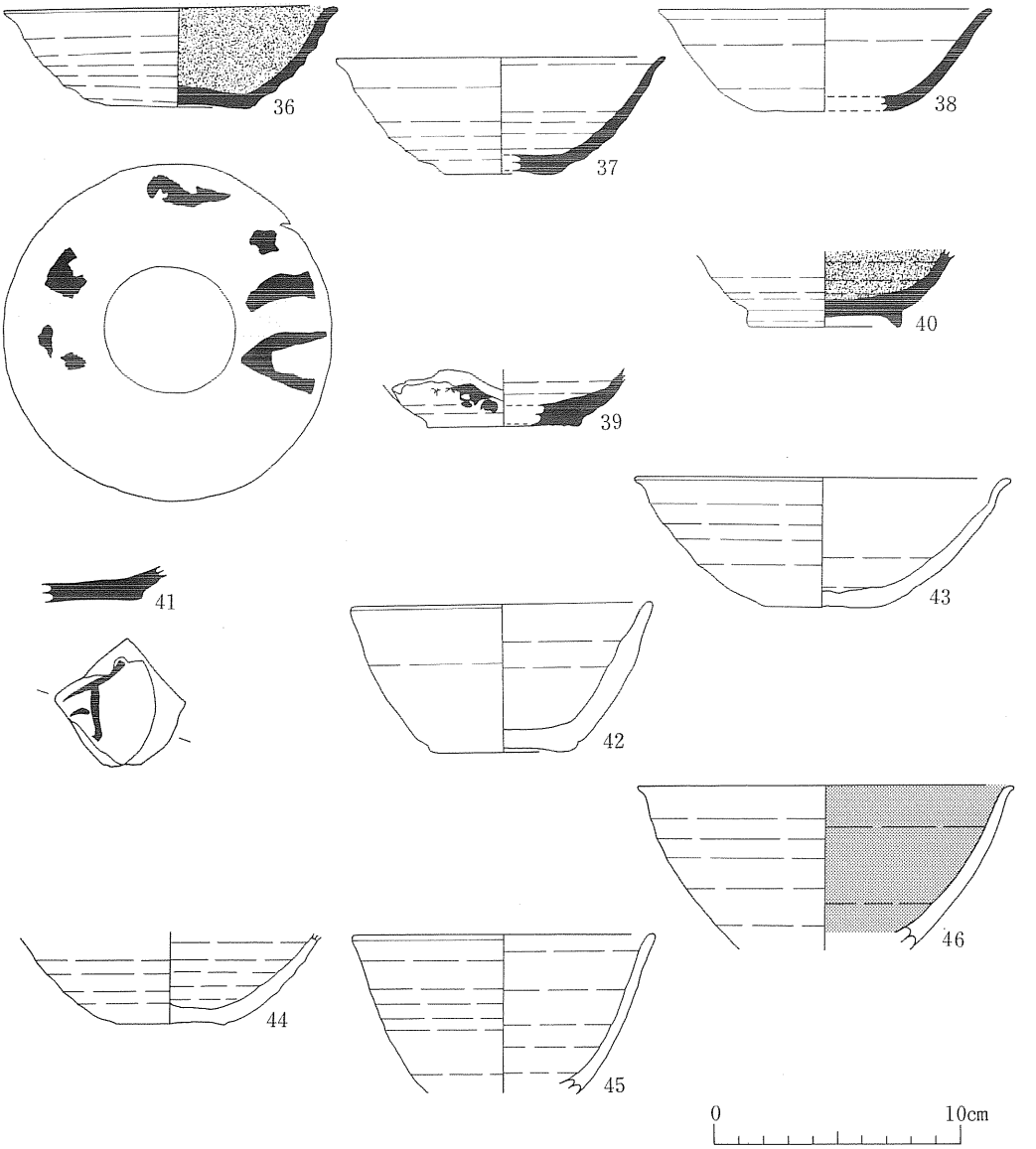
第32図36～39・41は灰色ないし灰白色の須恵器杯である。36は内面の全体と外面の一部に墨痕があり、さらに内面の全体に漆が付着している。墨を入れて使用した後、漆の液体を入れる容器として使用したことが推定される。住居西辺に沿う掘り込みから出土した。39の外面に墨痕、41の底面に墨書がある。40は高台付杯で、色調は橙色であるが硬く、内面に漆が付着する。42～46は土師器杯で、色調は橙色ないし黄橙色である。45の口縁部には、煤状の物質が付着している。46は内面に黒色処理を施す。第33図47は外面に墨書がある。48は土師器の甕で、橙色

を呈し、ロクロ成形で体部の下方にヘラケズリを施す。

他に破片資料として、床面や覆土の下方から、回転ヘラ切り痕のある須恵器杯と須恵器甕の体部が出土した。また、住居西辺に沿う長方形の掘り込み内から、須恵器杯の口縁部・体部、壷の口縁部、回転糸切り痕のある土師器杯のほか、漆紙文書の細片が出土したが、文字は認められなかった。

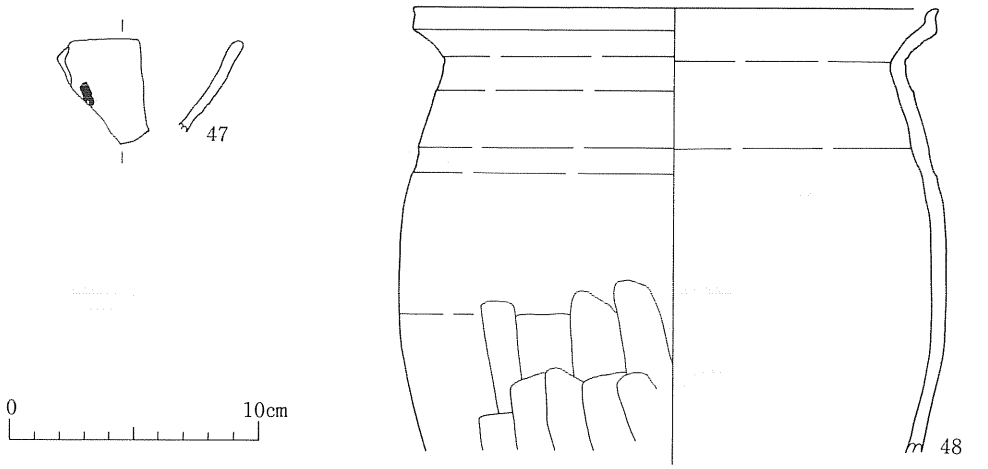


第31図　SI1167、SK1165・1174



番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
36	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　体部に墨痕 内面：ロクロナデ　墨、漆付着	13.5	5.4	4.2	0.4	31.0	33°	25－２
37	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.2	4.6	4.7	0.4	35.6	32°	
38	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	11.4	5.8	4.1	0.5	36.0	35°	
39	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　墨痕あり　内面：ロクロナデ		6.2					
40	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ　漆付着		高台径 6.2					
41	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に墨書「□」 内面：ロクロナデ							25－３
42	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.2	5.4	6.0	0.4	50.0	20°	25－４
43	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	15.2	4.4	5.2	0.3	34.2	35°	
44	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ		4.4					
45	土師器	杯	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ　口縁部に煤状物質付着	12.2						
46	土師器	杯	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ　黒色処理	15.2						

第32図　ＳＩ1167出土遺物（１）

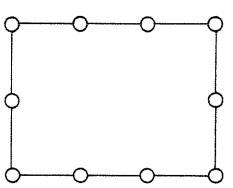


番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
47	土師器	杯	外面：ロクロナデ　墨書「□」　内面：ロクロナデ							
48	土師器	甕	外面：ロクロナデ→ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	11.0						

第33図　ＳＩ1167出土遺物（２）

（２）　掘立柱建物跡

①　ＳＢ1127　（第34図，巻首図版３，図版13・14）



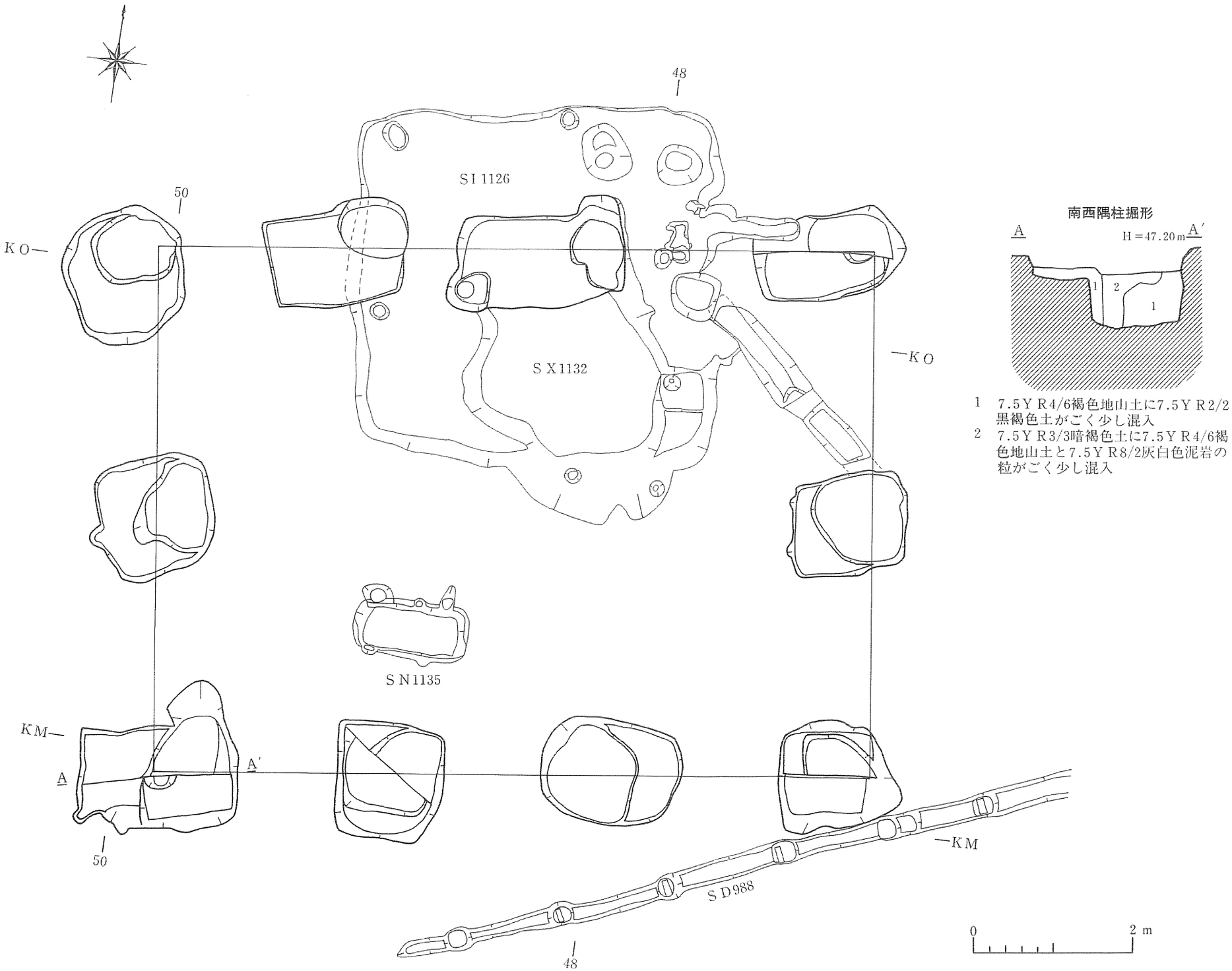
昨年の第100次調査で検出したが、その未調査部分を調査した。桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。

柱掘形は一辺1.1～1.5ｍや、1.1～1.8ｍの方形で、ほぼ垂直に掘り込まれ、深さ80～100cmである。10基の柱掘形のうち、１基は西に、他は東ないし北に柱を抜き取っていて楕円形の柱抜き取り痕がある。南西隅の柱掘形は北に柱を抜き取っているが、東西方向の土層断面には直径28cmほどの痕跡があり、柱の下の掘形底面はわずかに掘り凹めた形跡がある。埋土は地山の褐色土にごく少し黒褐色土が混じり、よごれは少なく、よく締まっている。

柱抜き取り痕の位置などから、建物の平面規模は桁行が総長9.0ｍで、柱間距離は3.0ｍ等間、梁行は総長6.6ｍで、柱間距離は3.3ｍ等間である。建物方位は南側柱列で見ると、調査南北基準線に対して北でおおよそ84°東に振れる。

南側柱列の方位を第90次調査で検出したＳＢ937掘立柱建物跡の北妻に揃える。掘形の形状、柱間距離、埋土の特徴、柱を全て抜き取っている点に共通性があり、両者は併存した建物と考えられる。

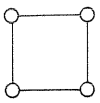
出土遺物については、第100次調査報告に記してあるが、報文に誤りがあり、その第43図68～70が柱抜き取り痕からの出土、71は掘形埋土からの出土なので訂正する。


48
SI 1126
50
KO
SX1132
KO
SN1135
KM
A
A′
50
KM
SD988
48
0
2 m
南西隅柱掘形
A
H＝47.20m
A′
1
2
1
1　7.5YR4/6褐色地山土に7.5YR2/2黒褐色土がごく少し混入
2　7.5YR3/3暗褐色土に7.5YR4/6褐色地山土と7.5YR8/2灰白色泥岩の粒がごく少し混入

第34図　ＳＢ1127

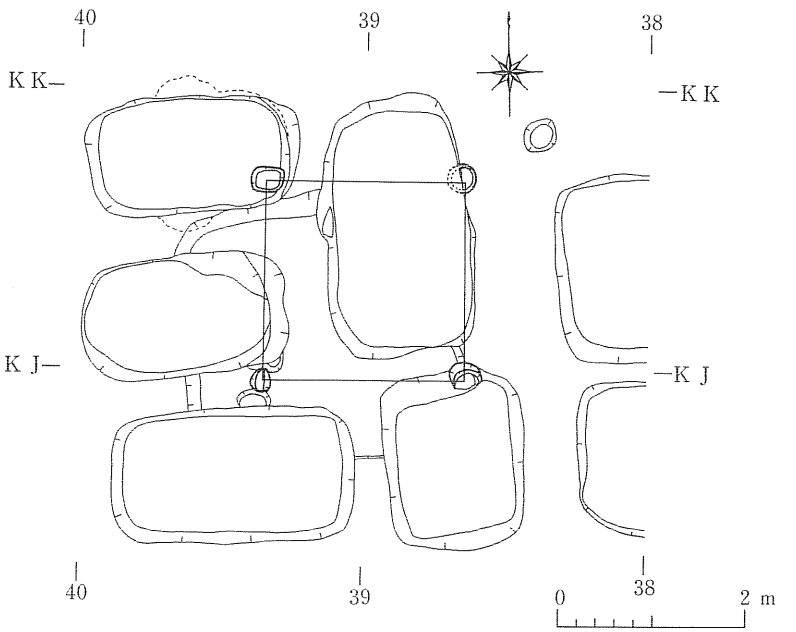
遺構の重複関係と、柱抜き取り痕からの出土遺物、および本建物を切るＳＩ1126竪穴住居跡の出土遺物から、本建物とＳＢ937は、９世紀初頭の、この地域で最初の建物であると考えられる。

② **ＳＢ1177**　（第35図）



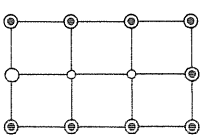
桁行１間、梁行１間の掘立柱建物跡である。柱穴は径30cmほどあり、北西の柱穴は66cm、南東のそれは47cmの深さがあるが、柱痕跡は認められない。柱穴から推定される建物の平面規模は、北側および東側で2.1ｍである。

土坑群と重複しており、北西の柱はＳＫ1176の埋土の中に検出され、確実にこれよりも新しい。他の３本については土坑との新旧関係を明確には把握できなかったが、本建物と重複するＳＫ1158・1159・1161は、ＳＫ1176と方位が同じでほぼ同時に構築されたと考えられるので、これらの土坑よりも本建物の方が新しいと考えられる。建物方位は東側で見ると調査南北基準線に対して北で１°西に振れる。



第35図　ＳＢ1177

③ **ＳＢ1178Ａ・Ｂ**　（第36図，図版14）

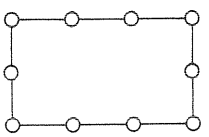


桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡で、総柱である。Ａ・Ｂ２時期あり、Ｂ期建物の柱掘形は直径40～50cmの円形で、直径20～25cmの柱痕跡があるが、棟通り中２本の柱掘形は、直径20cmほどで、柱痕跡はない。

Ｂ期建物はＡ期に比べ北東隅柱は北へ、南西隅柱は西へそれぞれ移動している。Ｂ期建物の平面規模は桁行が北側柱列で見ると、総長が7.70ｍ、柱間距離は東から2.60ｍ、2.50ｍ、2.60ｍ、梁行は東妻で総長4.40ｍ、柱間距離は2.20ｍ等間である。建物方位は北側柱列で見ると、調査南北基準線に対し、北で77°東に振れる。ＳＤ1170・1175や、他の重複する掘立柱建物との新旧関係は定かでない。

南西隅柱のＡ期柱掘形から須恵器杯の破片が出土した。底部切り離しは回転糸切りである。

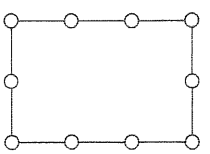
④　**ＳＢ1184**　（第36図）



桁行４間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。柱掘形は直径30～50cmの円形で、北側は52～77cmの深さがあるが、棟柱は10～20cmの深さである。柱痕跡はなく、柱掘形から推定される建物の平面規模は、桁行は北側で見ると総長8.50ｍ、柱間距離は東から2.1ｍ、2.1ｍ、2.05ｍ、2.25ｍで、７尺等間と推定される。梁行は西妻で見ると総長4.0ｍ、柱間距離は２ｍ等間である。建物方位は北側柱列で見ると、調査南北基準線に対し、北が79°東へ振れる。

ＳＤ1170・1175および他の重複する掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

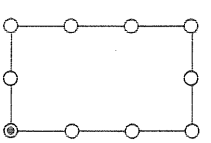
⑤　**ＳＢ1185**　（第36図）



桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。柱掘形は直径20～40cmほどの円形で、33～71cmの深さがあるが、棟柱は10～20cmと浅い。柱痕跡はなく、柱掘形から推定される建物の平面規模は、桁行は北側で見ると総長6.4ｍ、柱間距離は東から2.15ｍ、2.15ｍ、2.1ｍである。梁行は東妻で見ると総長4.3ｍ、柱間距離は北から2.2ｍ、2.1ｍで、柱間は桁行・梁行ともに７尺を計画したものと考えられる。建物方位は北側柱列で見ると、調査南北基準線に対し、79°東へ振れる。

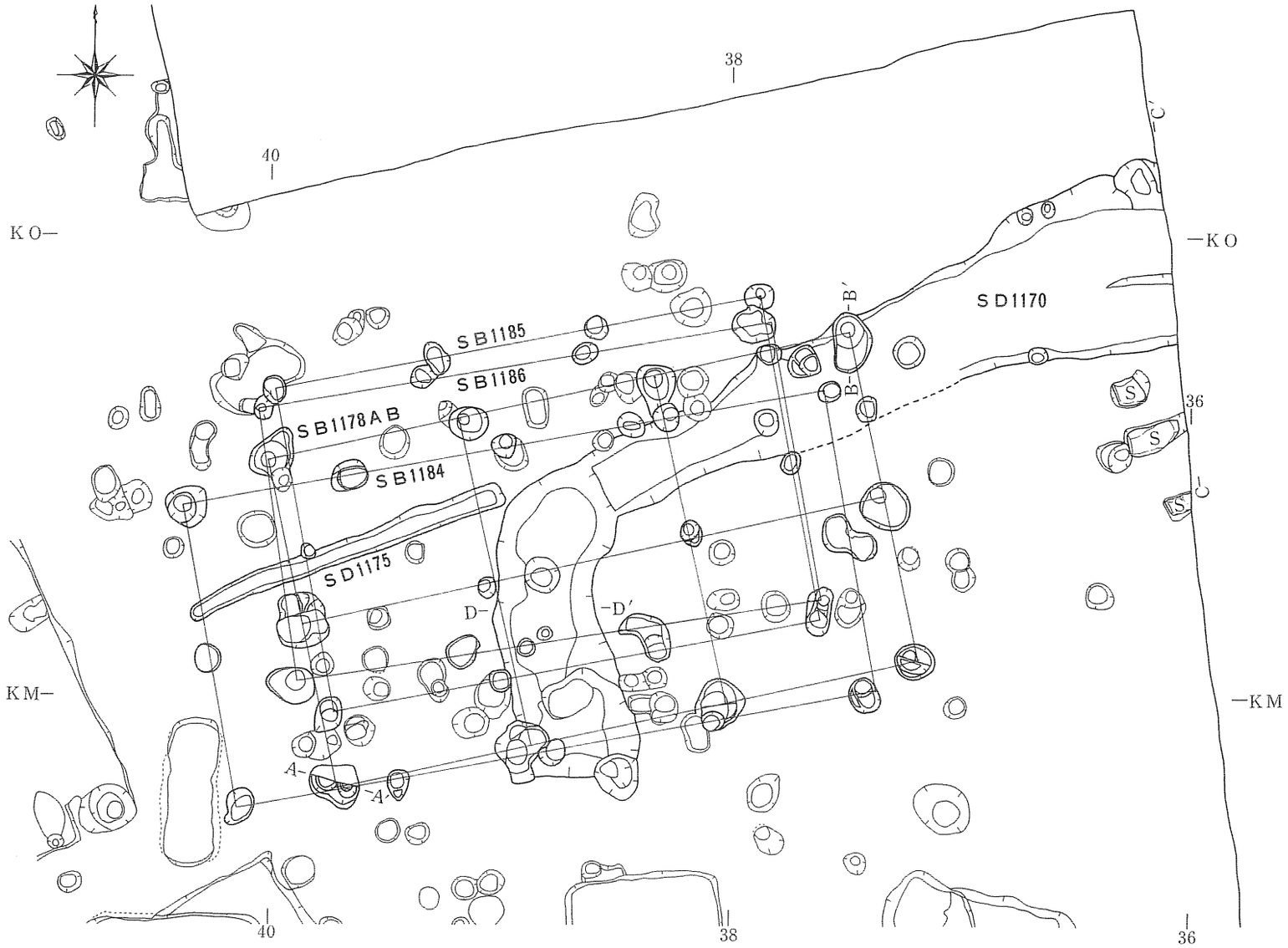
ＳＤ1170・1175および他の重複する掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

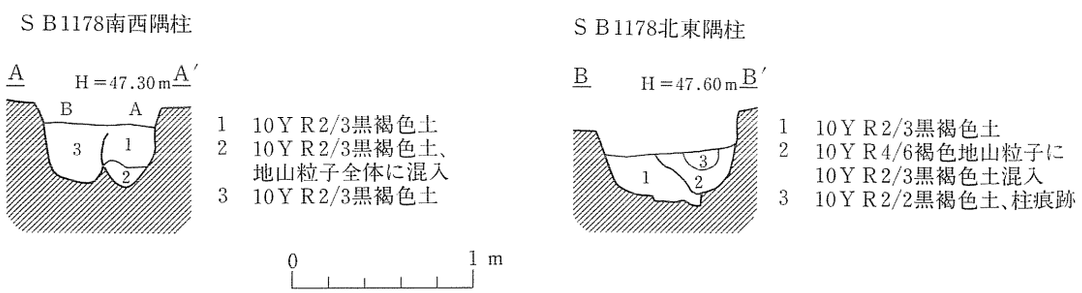
⑥　**ＳＢ1186**　（第36図）



桁行３間、梁行２間の東西棟掘立柱建物跡である。柱掘形は、径25～40cmほどの円形や、長軸65cm、短軸48cmの楕円形などで、深さは北側柱列で20～55cmある。棟柱は検出されない。南西隅柱のみ直径25cmの柱痕跡があり、柱掘形と柱痕跡から推定される建物の平面規模は、桁行を北側柱列で見ると、総長6.4ｍで、柱間距離は東から2.2ｍ、2.1ｍ、2.1ｍで７尺等間、梁行は西妻で見ると、総長3.6ｍである。建物方位は北側柱列で見ると、調査南北基準線に対し、北で80°東へ振れる。

ＳＤ1170・1175および他の重複する掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。





1　10YR2/3黒褐色土
2　10YR2/3黒褐色土、地山粒子全体に混入
3　10YR2/3黒褐色土

1　10YR2/3黒褐色土
2　10YR4/6褐色地山粒子に10YR2/3黒褐色土混入
3　10YR2/2黒褐色土、柱痕跡

第36図　SB1178AB・1184～1186、SD1170・1175

（３）　柱　列

① **ＳＡ1187**　（第21図）

ＳＩ1148の西にある東西筋２間の柱列である。西２本の柱掘形は第100次調査で検出した。柱掘形は径40～60cmの円形で、深さ24～33cmある。柱痕跡は認められなかったが、総長は2.70ｍで、1.35ｍ等間と推定される。柱列方位は調査南北基準線に対して、北で63°東に振れる。

（４）　溝

① **ＳＤ988**　（第21図）

ＳＩ1148の北に位置する東西方向の板塀で、長さ10.5ｍを検出した。この板塀は第90次調査と第100次調査でも検出しており、それらを含めると、長さ61.5ｍとなったが、なお東の未調査区へ延びている。幅12～20cm、深さ５cmほどで、ごく一部が残るほかは消失している。

柱穴は９個あり一辺30～35cmの方形や、径20～30cmの楕円形で、このうち７個に柱痕跡が認められる。柱痕跡は長さ16～23cm、厚さ６～８cmの板状をなし、板塀の走向に対して柱の長辺が直角方向となるように建てる。

柱痕跡を基にした柱間距離は、1.15～1.40ｍまでの変異があるが、平均では1.30ｍである。方位は調査南北基準線に対し、北で67°東へ振れる。

② **ＳＤ1170**　（第36・37図）

調査区東部にあり、Ｌ字状に曲折する溝である。東西方向部分は、長さ約９ｍで東の未調査区に延び、幅90cm～2.4ｍ、深さは北側で10～35cmである。南北方向部分は、長さ約４ｍ、幅1.2～1.5ｍ、深さ20～35cmである。

底面は丸みを帯びているが、中央部分は平坦で浅く、南側の壁が消失している。埋土は主に黒褐色土である。ＳＢ1178など４棟の掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は定かでない。

破片資料であるが、糸切り痕のある須恵器と土師器の杯、および須恵器甕の体部が出土した。

③ **ＳＤ1175**　（第36図）

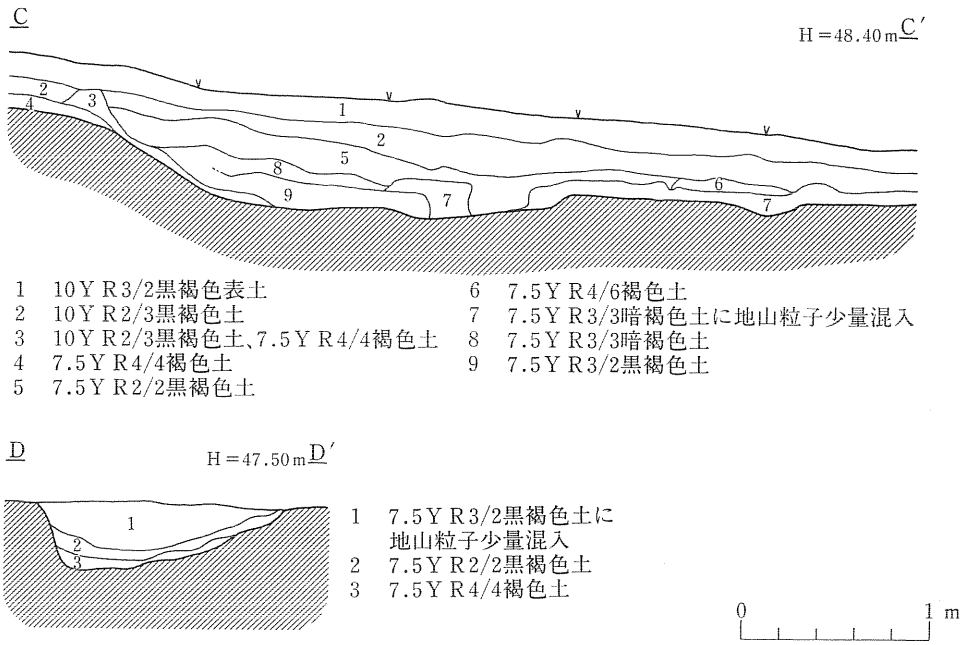
ＳＩ1148の東にある東西方向の溝で、長さ4.4ｍ、幅22～37cm、深さ５cmほどである。方位は調査南北基準線に対し北で68°東に振れる。重複する４棟の掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

④ **ＳＤ1182**　（第38・39図）

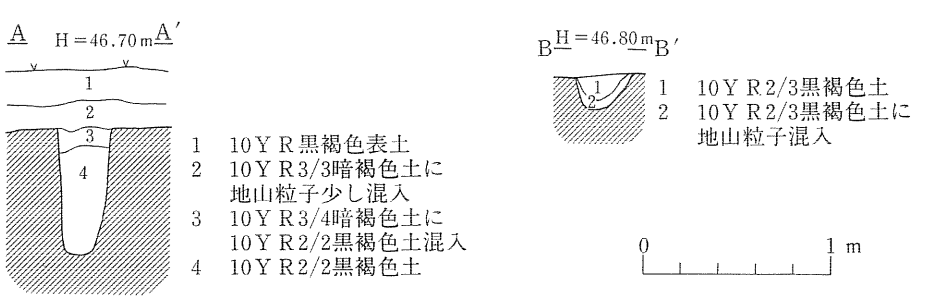
調査区南東部に検出した南北方向の溝である。長さ8.3ｍで、南の未調査区へ延びており、ＳＫ1154によって切られている。幅20～38cmあり、深さはＳＫ1154の北部分は20cmほどであるが、南ほど深く、南端では68cmである。溝底にピット等は見られない。方位は調査南北基準線に対し、北でおおよそ31°西へ振れる。

⑤　**ＳＤ1183**　（第21図）

調査区北部に一部を検出した溝である。長さ2.2ｍを検出したが、南北に延びている。幅45～50cm、深さ約10cm、方位は調査南北基準線に対し、北で32°西へ振れる。



第37図　ＳＤ1170土層断面図

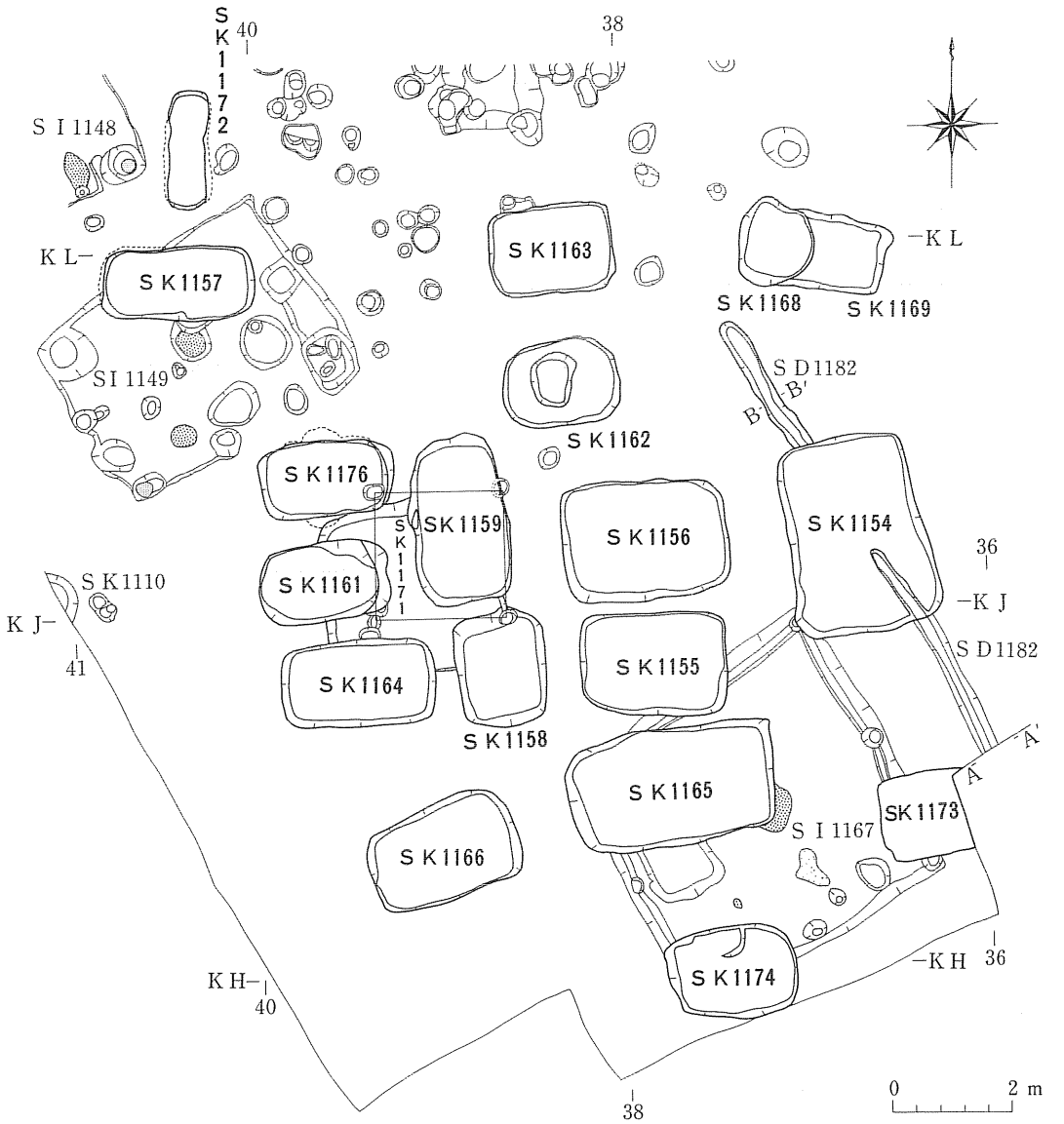


第38図　ＳＤ1182土層断面図

（5）　土　　坑　（第31・39・40・45・48図，図版15）

①　**ＳＫ1150**　（第40図）

長軸103cm、短軸78cmの楕円形で、深さ約10cmあり、底面は丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。炭化物を少し含む褐色土が堆積する。ＳＩ1147の南辺によって切られている。

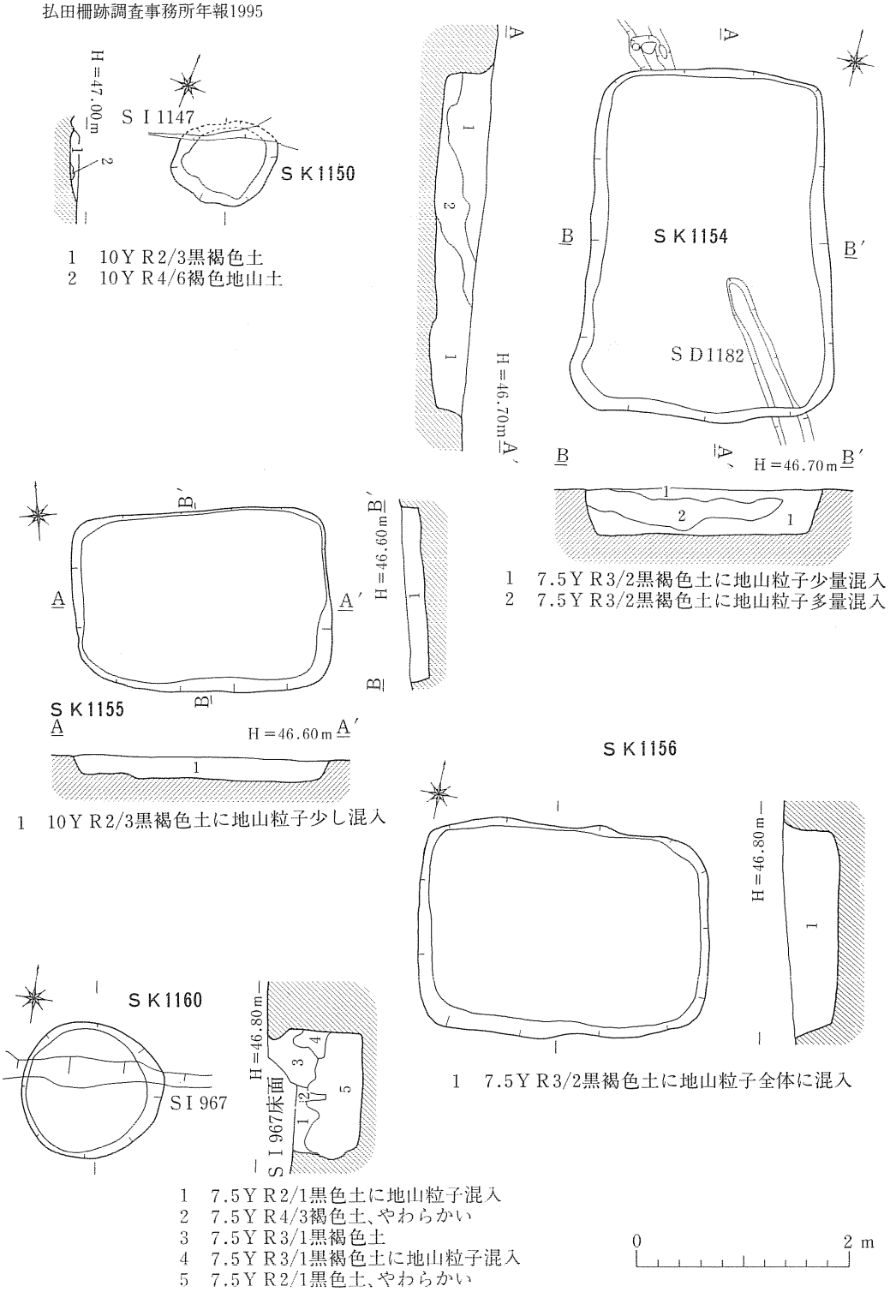


第39図　調査区東方の土坑群

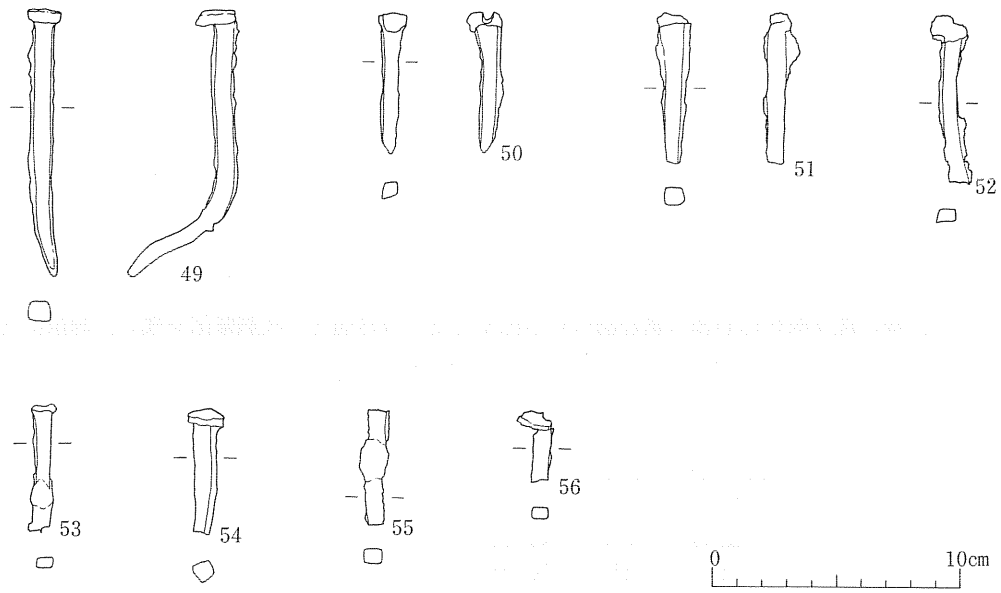
② **ＳＫ1154**　（第40図）

調査区東端部にあり、長軸3.3ｍ、短軸2.48ｍで、南北方向に長軸がある。南西隅でＳＩ1167を切り、ＳＤ1182をも切る。深さは北側から中央部にかけて45cmほどであるが、南側は25cm前後である。底面は南側の一部がごく少しくぼむほかは全体に平坦で、壁はわずかに外方に傾斜して立ち上がる。埋土は黒褐色土を主体として、地山の粒子が多く混入する。

鉄製釘（第41図49～56）が出土した。全長を知り得るものは２点だけで、49は約12.5cm、50は5.7cmである。他は頭部や先端部を欠く。断面はいずれも方形である。土器は破片であるが、



第40図　SK1150・1154・1155・1156・1160



番号	種　別	特　　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図　版
49	鉄　釘	頭部平坦。先端湾曲。	12.5	1.4	0.8	25－５
50	鉄　釘	頭部平坦。	5.7	1.1	0.7	25－６
51	鉄　釘	頭部平坦。先端欠く。	6.0	1.5	0.7	25－７
52	鉄　釘	頭部平坦。先端欠く。	6.7	1.8	0.4	25－８
53	鉄　釘	頭部平坦。先端欠く。	5.2	1.1	0.9	25－９
54	鉄　釘	頭部平坦。先端欠く。	6.1	1.5	0.6	25－10
55	鉄　釘	頭部・先端欠く。	4.6	1.2	0.6	25－11
56	鉄　釘	頭部平坦。先端欠く。	2.9	1.5	0.5	25－12

第41図　ＳＫ1154出土遺物

底部切り離しが回転ヘラ切りによる須恵器杯の底部と、回転糸切りによる土師器杯底部が出土した。

③　**ＳＫ1155**　（第40図，図版16）

ＳＫ1154の南西にあり、長軸2.40ｍ、短軸1.73ｍ、東西方向に長軸のある長方形で、深さ約20cmである。ＳＩ1167を切っている。底面は南にわずかに傾斜し、壁は幾分外方に傾斜して立ち上がる。黒褐色土が全体に均一に堆積する。

遺物は破片であるが、底部切り離しが回転ヘラ切りによる須恵器杯の底部と口縁部、回転糸切りによる土師器杯の口縁部が出土した。

④　**ＳＫ1156**　（第40図，図版16）

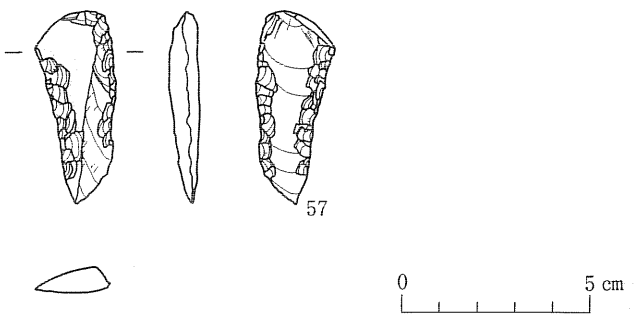
ＳＫ1155のすぐ北にあり、長軸2.72ｍ、短軸2.0ｍ、東西方向に長軸のある長方形で、深さは北側で48cm、南側で35～40cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。黒褐色土が全体に均一に堆積している。

遺物は破片であるが、須恵器・土師器杯の口縁部、両面に叩き目のある土師器甕の体部が出土した。

⑤ **ＳＫ1157** （第29図，図版11）

ＳＫ1172の南にあり、長軸2.50ｍ、短軸1.30ｍで、東西方向に長軸のある長方形である。ＳＩ1149を切っている。深さは北側で63cmある。底面は平坦で、埋土には地山粒を多く含む黒褐色土が堆積する。壁は垂直に立ち上がり、ごく部分的に内側に入り込んでいる。

遺物には、破片であるが底部切り離しが回転糸切りによる土師器杯の底部と、甕の体部が出土した。他に縄文時代の石器（第42図57）が出土した。自然面と一次剥離面を残し、側縁に両面から二次調整を施している。先端部には二次調整はないが鋭く尖る。



番号	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図版
57	石器	一面に自然面。側縁に二次調整。	5.1	2.2	0.8	26－1

第42図　ＳＫ1157出土遺物

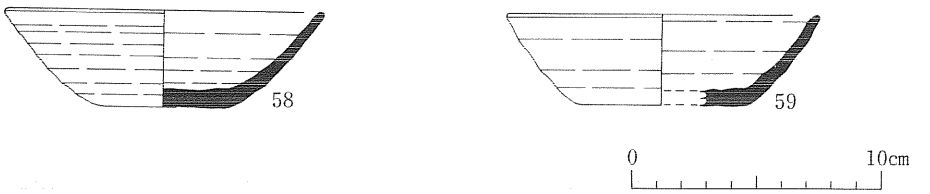
⑥ **ＳＫ1158** （第45図）

ＳＫ1155の西にあり、長軸1.90ｍ、短軸1.50ｍの南北方向に長軸のある長方形で、ＳＫ1171を切っている。ＳＢ1177との新旧関係は明確でないが、ＳＫ1176はＳＢ1177よりも確実に古く、ＳＫ1176と本遺構は方位の同一性から同時期の構築と考えられるので、本遺構の方がＳＢ1177よりも古いと推定される。深さは北東部で60cm、南側で50cmである。底面は平坦で、壁は殊に北側が外方に大きく傾斜して立ち上がる。埋土は地山の褐色土や、その粒子が多く混じる黒褐色土である。

須恵器杯（第43図58・59）が出土した。58は本土坑とＳＫ1159・1171から個別に出土したものが接合したもので、灰白色を呈し、底部切り離しは回転糸切りである。59は灰白色でもろく、底部切り離しは回転ヘラ切りである。他に破片資料として、須恵器蓋、土師器甕の口縁部と体部、鞴の羽口が出土した。

⑦ **ＳＫ1159** （第45図）

ＳＫ1158の北にあり、長軸2.75ｍ、短軸1.60ｍで、南北方向に長軸のある長方形である。

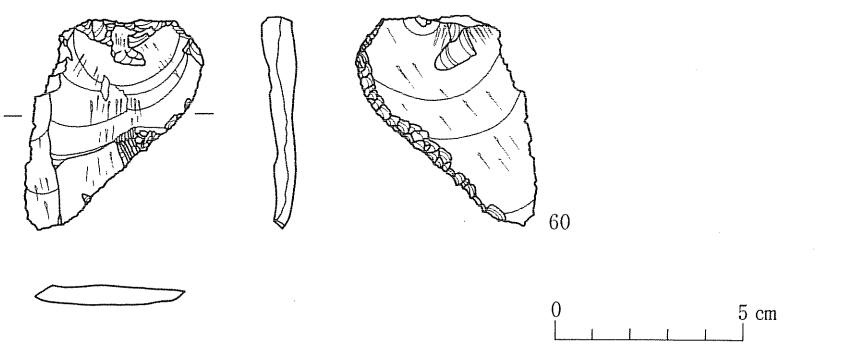


番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
58	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.8	5.5	3.9	0.4	30.5	36°	
59	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	12.6	7.0	3.7	0.6	29.4	31°	

第43図　ＳＫ1158出土遺物

ＳＫ1171を切っているがＳＢ1177との新旧関係は明確に把えることができなかったが、ＳＫ1176とＳＢ1177との新旧関係およびＳＫ1158との同時性から、本遺構もＳＫ1158・1176と同様に、ＳＢ1177よりも古いと考えられる。深さは北側で90cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。地山の粒子が多く混じる黒褐色土や、地山の褐色土がほぼ水平に堆積している。

須恵器杯の破片がＳＫ1158・1171から出土した破片と接合した（第43図58）。破片資料として土師器の杯口縁部、低い高台の付く杯、両面に叩き目のある甕が出土した。他に鞴の羽口、縄文時代の石器（第44図60）が出土した。



番号	種　別	特　　徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図　版
60	石　器	一側縁に二次調整。	5.6	4.8	0.9	26－2

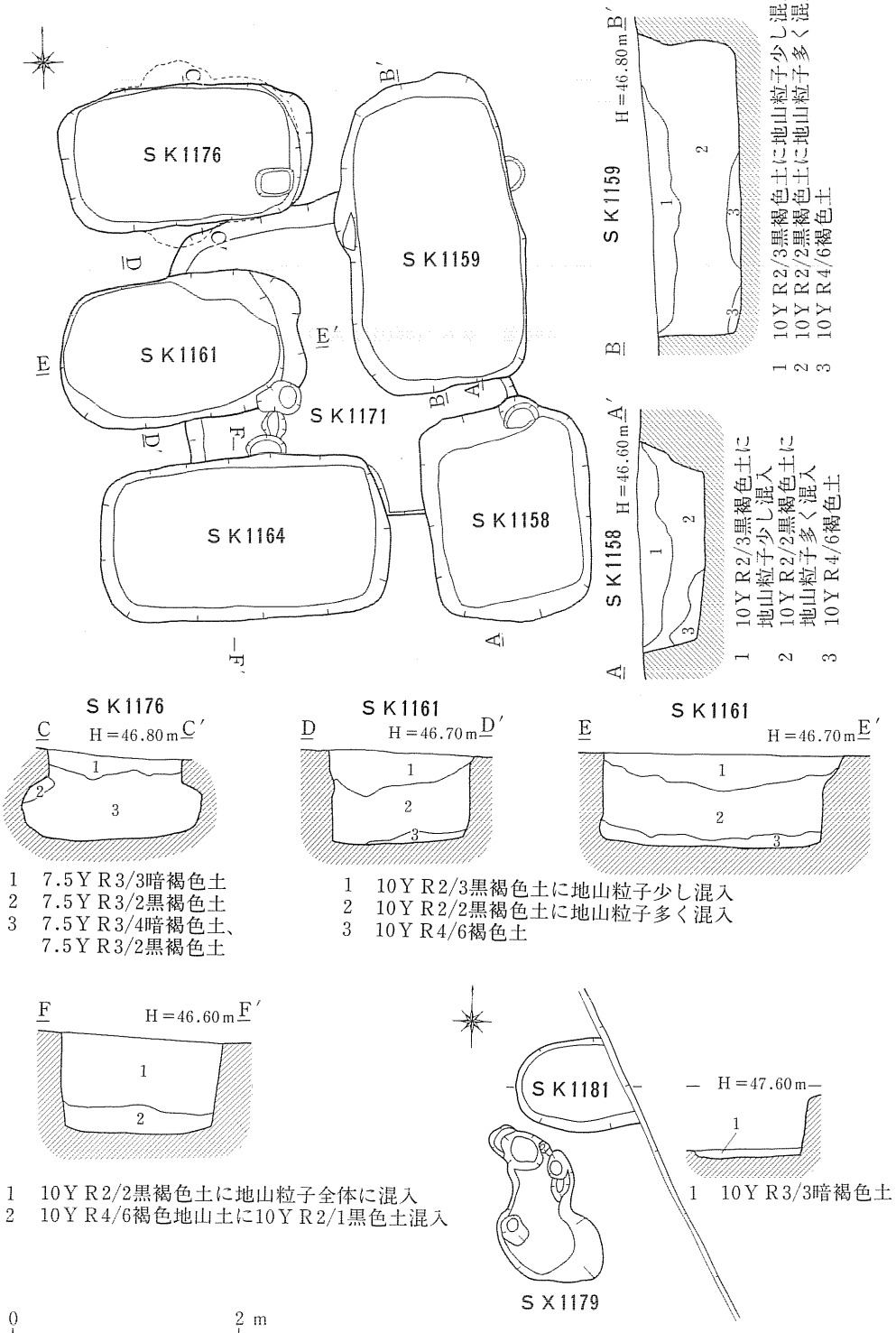
第44図　ＳＫ1159出土遺物

⑧　**ＳＫ1160**　（第40図）

調査区北西端にあり、ＳＩ967の北辺と床に切られている。円形で、検出面での口径は110～135cm、底径105～116cm、ＳＩ967の北辺からの深さは90cmある。底面は平坦で、底部からの立ち上がりはほぼ垂直であるが、ごく部分的にわずかに外方へ張り出すところもある。埋土は軟らかな黒色土が主体で、縄文時代の遺構である。

⑨　**ＳＫ1161**　（第45図）

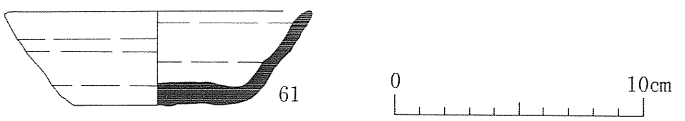
ＳＫ1159の西にあり、長軸2.18ｍ、短軸1.30ｍで、東西方向に長軸のある長方形である。Ｓ



第45図　SK1158・1159・1161・1164・1171・1176・1181、SX1179

Ｋ1171を切り、ＳＢ1177との新旧関係は直接には不明であるが、ＳＫ1176と同時期と考えられることから本遺構の方が古いと考えられる。深さは82cmある。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がるが、東側はその上部で急激に外方に開く。地山の粒子が多く混じる黒褐色土や、地山の褐色土が水平に堆積する。

須恵器杯（第46図61）が出土した。灰白色を呈し、底部切り離しは回転ヘラ切りで、体部は直線的に立ち上がる。ＳＫ1163・1176から出土した破片がこれに接合した。他に回転糸切り痕のある土師器杯の底部、甕の口縁部、鞴の羽口の小破片が出土した。



番号	種　別	器形	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
61	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	12.2	7.0	3.8	0.6	31.0	30°	26－3

第46図　ＳＫ1161出土遺物

⑩　**ＳＫ1162**　（第48図）

ＳＫ1163のすぐ南に位置し、長軸1.95ｍ、短軸1.45ｍで、東西方向に長軸のある楕円形である。深さは北側で70cm、南側で60cmある。底面中央部が楕円形に約10cmくぼみ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。内面が黒色処理された土師器高台付杯と、鞴の羽口の小破片が出土した。

⑪　**ＳＫ1163**　（第48図）

ＳＫ1162のすぐ北にあり、長軸2.06ｍ、短軸1.45ｍで東西方向に長軸のある長方形である。深さは北側で36cmある。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は地山の粒子を多く含む黒褐色土などが水平に堆積する。

須恵器杯の破片が、ＳＫ1161・1176から出土したものと接合した（第46図61）。他に回転糸切り痕のある土師器杯の底部と口縁部が出土した。

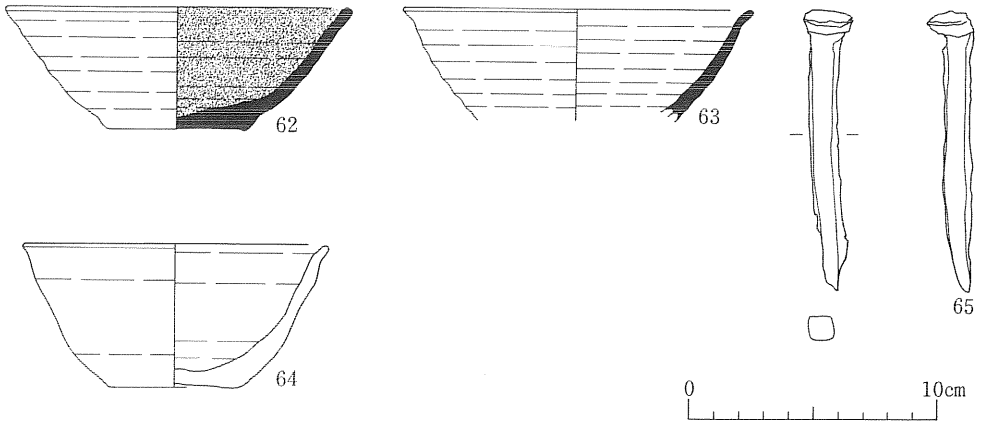
⑫　**ＳＫ1164**　（第45図，図版17）

ＳＫ1161の南にあり、長軸2.56ｍ、短軸1.46ｍで、東西方向に長軸のある長方形である。ＳＫ1171を切る。深さは79cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は下方に地山の褐色土主体の土層、その上に黒褐色土である。

遺物は破片であるが、土師器杯の口縁部や糸切り痕のある底部、両面に叩き目のある甕、鞴の羽口が出土した。

⑬　**ＳＫ1165**　（第31図）

ＳＫ1155の南にあり、長軸3.50ｍ、短軸1.95ｍ、東西方向に長軸のある長方形である。ＳＩ1167の埋土を掘り込み、深さは北側で約90cmで、底面はＳＩ1167の埋土内にあり、軟らかい。



番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版
62	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ　内面に漆付着	13.8	5.5	4.9	0.4	35.5	33°	
63	須恵器	杯	外面：ロクロナデ　内面：ロクロナデ	14.0						
64	土師器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	12.2	5.2	5.7	0.4	46.7	23°	

番号	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	図版
65	鉄釘	頭部平坦。	11.3	2.0	1.0	26－4

第47図　ＳＫ1165出土遺物

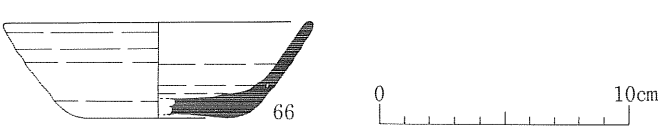
壁は北側はほぼ垂直であるが、他は外方に傾斜して立ち上がる。地山の粒子が全体に混じる黒褐色土が均一な状態で堆積している。

須恵器杯（第47図62・63）、土師器杯（64）、鉄製の釘（65）が出土した。62は内面全体に漆が付着している。64は橙色ないし淡黄色を呈する。釘は断面が方形である。破片資料として、須恵器壷の肩部、土師器甕の口縁部が出土した。

⑭　**ＳＫ1166**　（第48図）

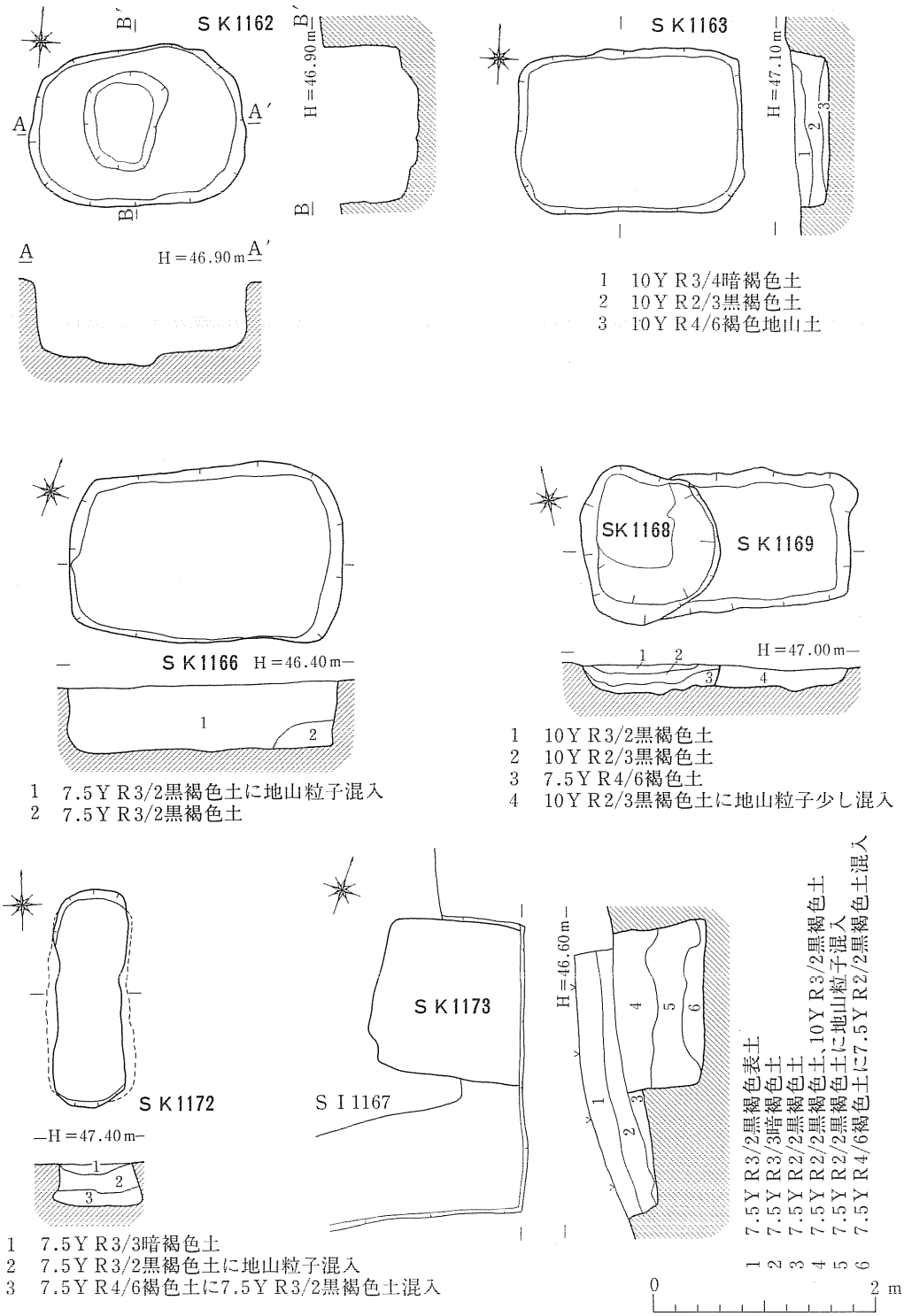
ＳＫ1165の西にあり、長軸2.48ｍ、短軸1.60ｍで、東西方向に長軸のある長方形で、深さは北側で67cmである。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は地山の粒子が全体に混じる黒褐色土がほぼ均一な状態で堆積する。

須恵器杯（第49図66）が出土した。灰白色でもろく、底部切り離しは回転ヘラ切りである。破片資料として、須恵器杯の口縁部や回転ヘラ切り痕、回転糸切り痕のある底部が出土した。



番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版
66	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	12.4	7.2	4.8	0.6	38.7	29°	

第48図　ＳＫ1166出土遺物



第49図　ＳＫ1162・1163・1166・1168・1169・1172・1173

⑮　**ＳＫ1168**　（第48図）

調査区東部にあり、ＳＫ1154の北にある。直径約1.4ｍの円形で、ＳＫ1169を切っている。底面は中央部が低く、幾分丸みがあり、壁は東側が垂直に立ち上がるが、その他はなだらかな立ち上がりである。埋土は黒褐色土、地山の褐色土が水平に堆積している。

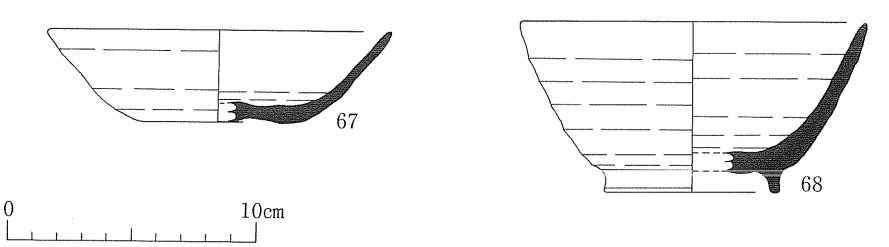
⑯　**ＳＫ1169**　（第48図）

調査区北部にあり、ＳＫ1154の北にある。東側をＳＫ1168によって切られているので全容は不明であるが、東西方向に長軸のある長方形と思われ、長軸の長さは少なくとも1.7ｍ、短軸は1.26ｍである。深さは北側で23cmあり、底面はおおよそ平坦で、壁は幾分外方に傾斜して立ち上がる。黒褐色土に地山の粒子が少し混じった全体に均一な埋土である。

⑰　**ＳＫ1171**　（第45図）

ＳＫ1155・1156の南にあり、東西2.95ｍ、南北2.90ｍのほぼ正方形をなす。ＳＫ1158・1159・1161・1164によって切られている。またＳＢ1177とも重複し、ＳＫ1176はＳＫ1161・1164と方位が同一で同時に構築されたと考えられ、そのＳＫ1176をＳＢ1177の柱穴が切っていることから、ここでの新旧関係はＳＫ1171→ＳＫ1161・1164・1176→ＳＢ1177となる。深さは北側で38cm、南側で20cmである。底面は全体にほぼ平坦で、壁は北と西が幾分外方に傾斜して立ち上がるが、わずかに残っている東・南壁はほぼ垂直である。

須恵器杯（第50図67）、高台付杯（68）が出土した。色調はいずれも淡黄色を呈する。他に須恵器杯の破片が、ＳＫ1158・1159から出土したものと接合した（第43図58）。破片資料として、回転糸切り痕のある土師器甕の底部、口縁部、鞴の羽口が出土した。

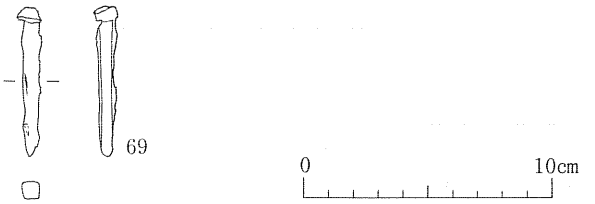


番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版
67	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ	13.8	6.4	3.7	0.5	26.8	38°	
68	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　内面：ロクロナデ	13.8	7.0	6.9	0.5	50.0		

第50図　ＳＫ1171出土遺物

⑱　**ＳＫ1172**　（第48図）

ＳＫ1157の北にあり、長軸1.96ｍ、短軸60cmで、南北方向に長軸のある長方形である。深さは北端で43cm、南端で30cmある。底面は平坦で、壁は東西両側の下部が外方へ張り出し、内側に傾斜して立ち上がる。埋土は暗褐色土や、黒褐色土がほぼ水平に堆積する。



番号	種　別	特　　徴	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	図　版
69	鉄　釘	頭部方形で平坦。	6.0	1.0	0.7	26－５

第51図　ＳＫ1172出土遺物

鉄製の釘（第51図69）が出土した。断面は方形で、全長6.0cmである。他に破片資料として土師器杯の口縁部と、甕の体部が出土した。

⑲　**ＳＫ1173**　（第48図）

調査区南東隅、ＳＫ1165の東にある。未調査区に入っており、全容は検出できないが、東西方向に長軸のある長方形と思われ、長軸は1.45ｍ以上、短軸は1.45ｍ、深さは北側で85cmある。ＳＩ1167の埋土を掘り込む。埋土は地山の粒子が多く混じる黒褐色土などが水平に堆積する。

⑳　**ＳＫ1174**　（第31図）

調査区南東部、ＳＫ1165の南にあり、長軸2.05ｍ、短軸1.55ｍの、東西方向に長軸のある長方形であるが、丸みを帯びていて楕円形に近い。ＳＩ1167の埋土を掘り込む。深さは約80cmである。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋土は地山の粒子が全体に混じる黒褐色土である。

遺物は、いずれも破片資料であるが、須恵器杯の口縁部、糸切り痕のある底部、壺口縁部、土師器杯の口縁部が出土した。

㉑　**ＳＫ1176**　（第45図，図版17）

ＳＫ1161の北にあり、長軸2.25ｍ、短軸1.26ｍで、東西方向に長軸のある長方形である。ＳＢ1177の北西隅柱が埋土を掘り込んでいて、これよりも古い。ＳＫ1171とは重複しないが、同時の構築と考えられるＳＫ1161はＳＫ1171を掘り込むことから、ＳＫ1171の方が古い。深さは北側で80cmである。壁は西側を除き外方に丸みを帯びて立ち上がり、さらに垂直に立ち上がっていて、殊に北壁、南壁の中央部は対応して丸く抉られたようになっている。埋土は主として暗褐色土に地山の粒子が全体に混じる。

須恵器杯の破片がＳＫ1161・1163出土の破片と接合した（第46図61）。他に糸切り痕のある須恵器と土師器の杯底部が出土した。

㉒　**ＳＫ1181**　（第45図）

ＳＢ1127の北東に検出した。長軸が東西方向にある楕円形で、東の未調査区へ入っており、長軸1.08ｍ以上、短軸84cmである。深さは検出面から10cmほどである。底面は全体に平坦で、

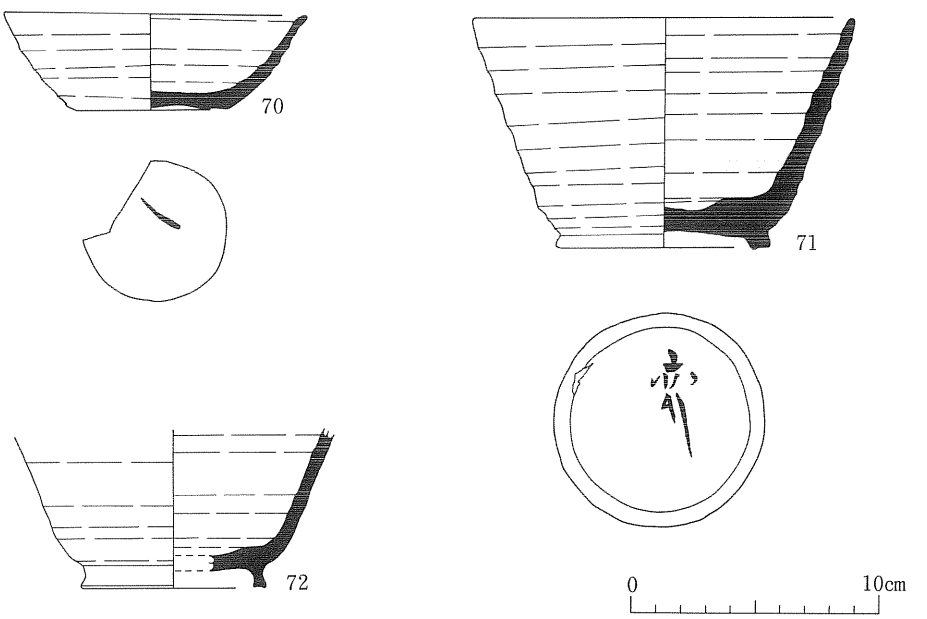
壁は緩やかに立ち上がる。土師器甕の体部破片が出土した。

（6） その他の遺構

① ＳＸ1179 （第45図）

ＳＢ1127の北東にあり、ＳＫ1181の南にすぐ隣接する。長軸1.58ｍ、短軸80cmの不整形で、深さ10cmほどである。底面は平坦であるが、その中に深さ12～15cmのピットが３個ある。壁の立ち上がりも整わない。埋土に焼土がわずかに含まれていた。

須恵器杯（第52図70）、高台付杯（71・72）が出土した。いずれも灰色で硬く、73・74の底部には墨書がある。



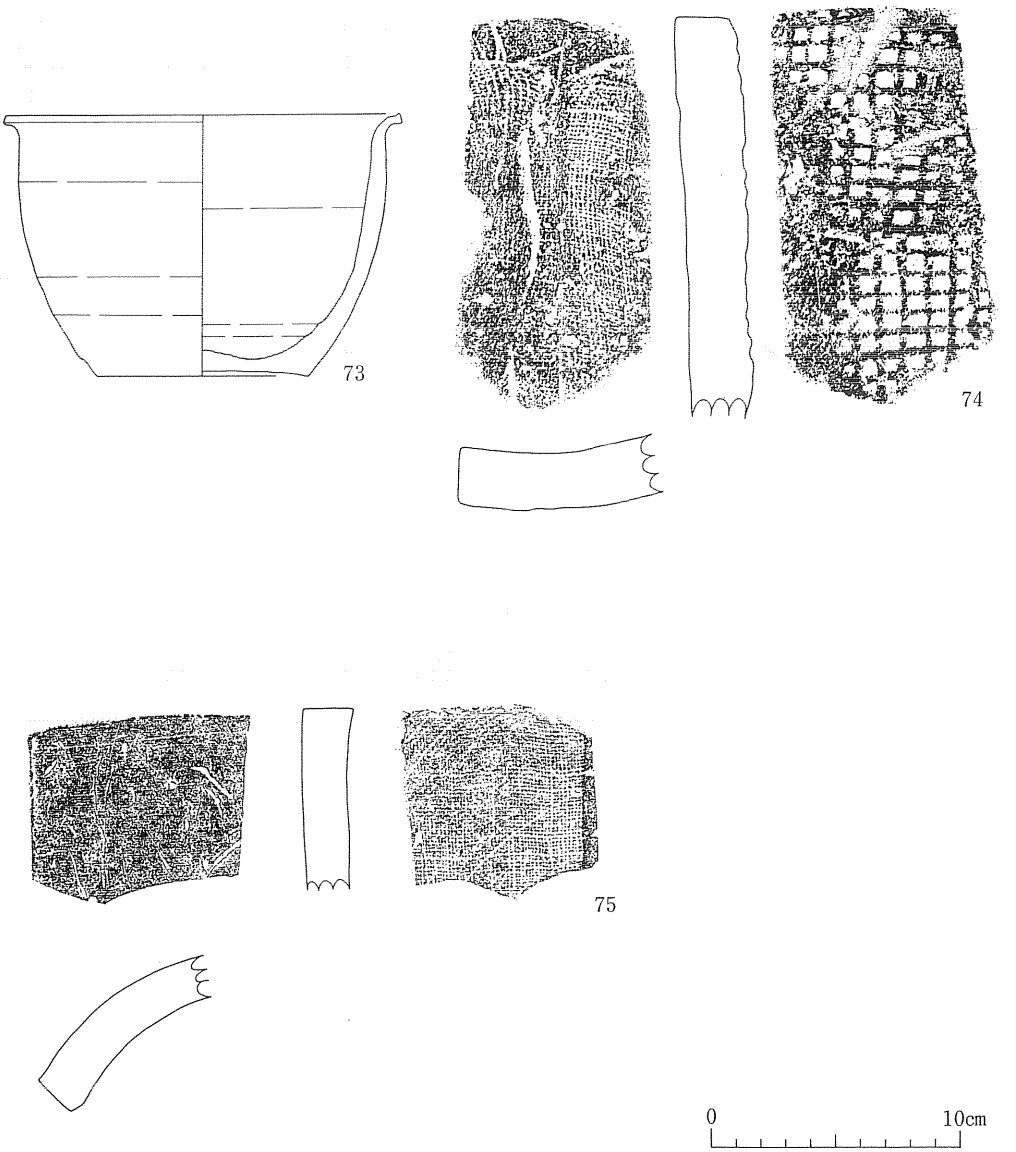
番号	種別	器形	特徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図版
70	須恵器	杯	外面：ロクロナデ→回転糸切り　底部に墨書「□」 内面：ロクロナデ	12.1	6.0	4.0	0.5	33.0	28.5°	26－6
71	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　底部に墨書「□」 内面：ロクロナデ	15.2		9.3		61.0		26－7
72	須恵器	高台付杯	外面：ロクロナデ→回転ヘラ切り　内面：ロクロナデ		7.4					

第52図　ＳＸ1179出土遺物

2　遺構外出土遺物

（1）土師器　第53図73はロクロ成形による土師器の甕である。底部切り離しは回転糸切りで、体部に再調整はない。

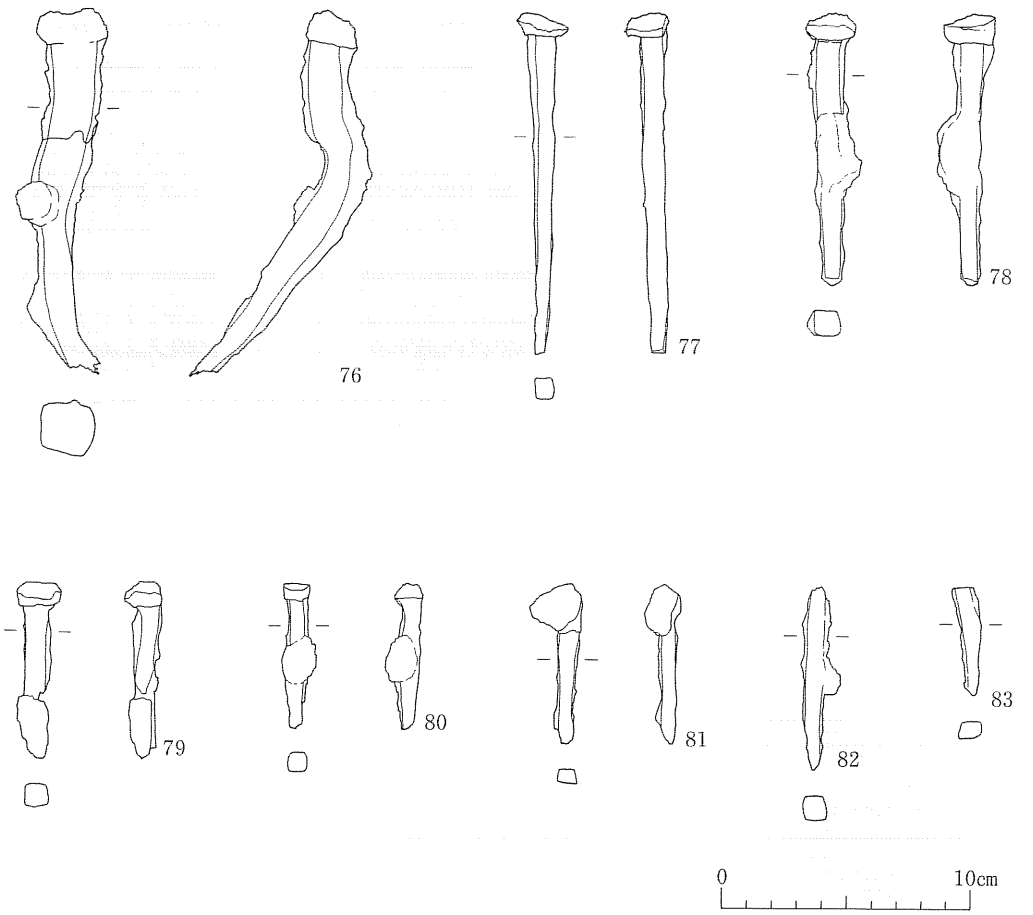
（2）　瓦　　74は凹面に布目痕、凸面に格子叩き目のある平瓦で、側面にはヘラケズリ痕がある。色調は浅黄色で軟質である。75は丸瓦で、凹面に布目痕があり、凸面は無文である。



番号	種　別	器形	出土地・層位	特　　徴	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	底径指数	高径指数	外傾度	図　版
73	土師器	小甕	ＫＪ39地山面	外面：ロクロナデ→回転糸切り 内面：ロクロナデ	16.0	8.4	10.5	0.5	65.6		27－1

番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
74	平　瓦	ＫＪ38・２層	凹面に布目痕、凸面に格子叩き目。	7.5	2.1	2.0	27－2
75	丸　瓦	ＫＩ35・２層	凹面に布目痕、凸面無文。	16.3	2.7	2.3	27－3

第53図　遺構外出土遺物（１）



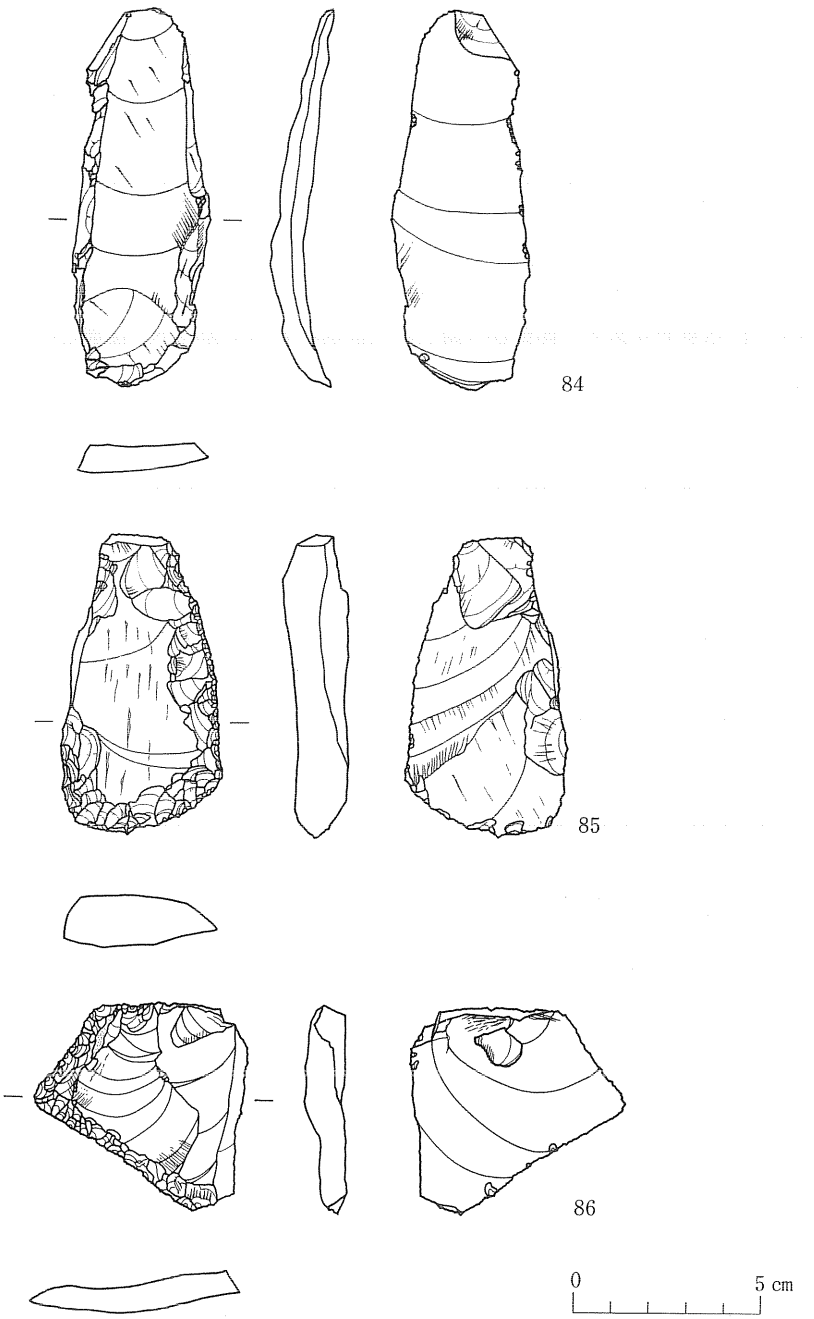
番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	図　版
76	鉄　釘	KN38・2層	中央部から湾曲。先端を欠く。	14.7	2.9	2.3	27－4
77	鉄　釘	KP40・2層	先端を欠く。	13.7	2.1	0.8	27－5
78	鉄　釘	KH37・2層	先端を欠く。	10.9	2.0	1.0	27－6
79	鉄　釘	KN36・2層	先端を欠く。	7.1	1.8	1.0	27－7
80	鉄　釘	KI38・地山面	先端を欠く。	6.8	1.4	1.8	28－1
81	鉄　釘	KL39・北東隅pit	頭部変形。	6.4	2.1	0.6	28－2
82	鉄　釘	KK38・地山面	頭部・先端を欠く。	7.4	1.5	1.0	28－3
83	鉄　釘	KK38・地山面	頭部・先端を欠く。	4.4	0.9	0.7	28－4

第54図　遺構外出土遺物(2)

木口面、側面および凹面の側縁にヘラケズリを施す。色調は灰色で硬い。

(3) 鉄製品　第54図76～83は釘である。頭部を有し、断面は方形で、先端は細く尖る。

(4) 旧石器時代・縄文時代の遺物　第55図84は旧石器時代の石刃である。85は縄文時代の石器で、縦長の剝片の側縁と下部に二次調整を加えて刃部を作り出す。86も縄文時代の石器で、2辺に二次調整を加え刃部を形成する。



番号	種　別	出土地・層位	特　　徴	縦 (cm)	横 (cm)	厚さ (cm)	図　版
84	石　刃	ＫＰ42・地山面		10.0	3.7	1.0	28－５
85	石　器	ＫＮ42・地山面	側縁と下部に二次調整。	8.0	4.3	2.7	28－６
86	石　器	ＫＭ42・２層	２辺に二次調整。	5.4	5.7	1.1	28－７

第55図　遺構外出土遺物（３）

第3節　小　　結

1　第105次調査の遺構について

第105次調査は、第90・95・100次調査に引き続き、政庁東方にある平坦地を対象に、その利用状況の解明を目的として実施した。その結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などの遺構を検出した。それらの年代について考察する。

まず、竪穴住居跡の年代であるが、ＳＩ1148からは比較的多くの土器が出土している。図示し得た杯には須恵器が多く、底部切り離しは回転糸切りが大部分で、体部にヘラケズリ調整のあるものはない。体部の立ち上がりは直線的なものが多く、口縁部の外反の度合いは少ない。嘉祥２（849）年銘木簡と共伴した土器よりは新しい様相であると考えられ、覆土中に火山灰の小ブロックが見られることからも、これまでの多くの竪穴住居跡と同様、９世紀後半頃と見なすことができる。ＳＩ1149・1167も土器や火山灰のあり方、住居の方位に共通性があり、ほぼこの頃の年代であろう。

掘立柱建物跡のうち、ＳＢ1127は昨年の調査での所見で９世紀初頭からの建物であることが明らかである。南側柱筋が第90次調査のＳＢ937の北妻と揃うことから、この２棟は同時存在で、ＳＢ1127を中心としてＳＢ937に対応する建物の存在が予想され、その検出を調査の主目的としたのであるが、存在しなかった。したがって、この東西棟のＳＢ1127と南北棟のＳＢ937の２棟の建物が、９世紀初頭からの、この地域では最初の建物であることが明確となった。

調査区東方のＳＢ1178ＡＢ・1184～1186は、ほぼ同一位置で、近似する規模・方向の建物の重複であり、継続する同一機能での５期にわたる建て替えと見なすことができるが、相互の新旧関係は不明と言わざるを得ない。遺物には唯一ＳＢ1178Ａ期の南西隅柱の柱穴内から出土した須恵器杯の破片があり、その年代は９世紀後半である。

しかし、隣接する９世紀後半のＳＩ1148・1149・1167竪穴住居跡とは建物方位が異なり、これらとは異なる年代であろう。これまでに検出された10世紀代と考えられる掘立柱建物跡と方位がほぼ同一であることや、５時期の変遷があることから、年代はおおよそ10世紀前半～中葉頃と推定される。

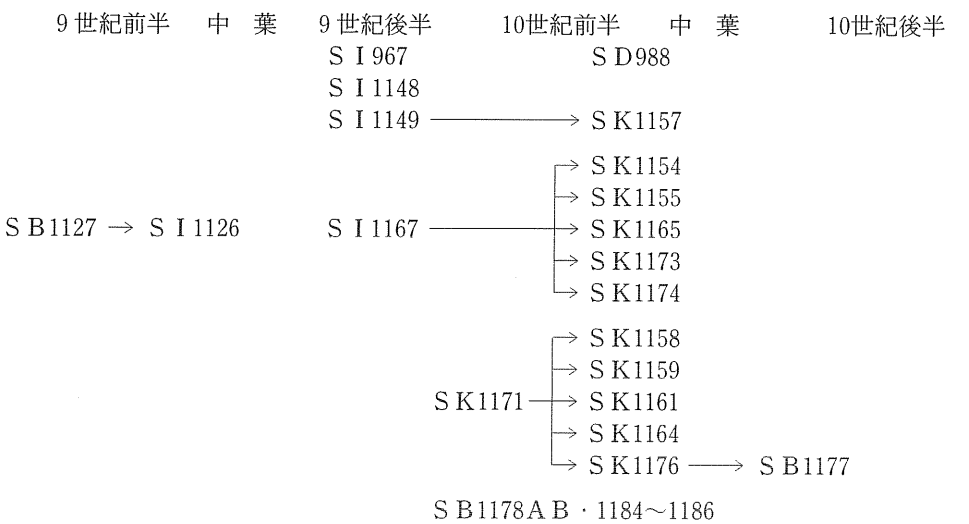
調査区東側の土坑群は、埋土の状態から人為的に埋めたものと考えられるが、その性格は不明である。まとまった土器の出土は全くなく、多くは埋める時に入り込んだ小破片で、直接に年代を決定する材料とは見なし難い。９世紀後半のＳＩ1167を埋土から明確に掘り込むものが５基、ＳＩ1149を掘り込むものが１基ある。形態は長方形が多く、その方位がごく一部を除いてよく揃っていて、土坑相互の重複も少なく、埋土の状態も共通し、近い年代の構築であることを窺わせる。

また、ＳＫ1158・1159・1171からと、ＳＫ1161・1163・1176の各々から、接合する同一個体の須恵器杯の破片が出土している。前者は切り合いがあって時間差はあるが、後者は重複がなく、これらは同時に埋めたものであろう。

こうしたことから土坑群の年代は相互に近く、かつ、ＳＫ1165は９世紀後半のＳＩ1167竪穴住居跡に堆積した十和田ａ火山灰を含む層を掘り込んでいることや、土坑を切るＳＢ1177掘立柱建物跡も存在すること、さらには、ＳＢ1178ＡＢ・1184～1186掘立柱建物跡と重複しないことなどから、それらの建物と同じ頃の、10世紀前半～中葉頃の構築と推定することができよう。

これら出土遺物と重複関係によって推定される遺構の年代観から、各遺構の新旧関係を整理すると、第３表のようになる。

第３表　遺構の重複関係



２　政庁東方平坦地の遺構の変遷

第90・95・100・105次の４次にわたって、政庁東方にある平坦地の調査を実施してきた。調査総面積は3,300㎡で、検出された遺構には竪穴住居跡・掘立柱建物跡・板塀・土坑などがある（第56図）。検出遺構の新旧関係や、おおよその変遷については、そのつど報告してきたが、一部訂正も含め、政庁東方平坦地の利用状態の変遷について触れたい。年代を推定し得る遺物の多くは竪穴住居跡から出土しているので、主として竪穴住居跡との重複関係から、各々の遺構の時期とその変遷について検討する。

（１）　竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区の全域から30軒が検出された。住居の方向の共通性からＡ、Ｂ－1、Ｂ－２類に分類される。Ａ類は、住居の東辺が調査南北基準線に対して、北で東へ30°～55°

振れるもので、ＳＩ934・935・965・966・1083が該当する。遺物は極めて少ない。

Ｂ類は、住居の東辺が調査南北基準線に対して、北で西へ10°～20°振れるもので、Ａ類を除く全ての竪穴住居跡が含まれる。このＢ類の竪穴住居跡にも、出土土器の年代が９世紀第２四半期頃と考えられるものに、ＳＩ1107・1116・1126の３軒があり、これをＢ－１類とする。

また、ＳＩ1075・1125・1148などは比較的土器を多く出土していて、その年代から、９世紀後半の遺構であることがわかる。また、覆土中に10世紀前半代に降下した十和田ａ火山灰を含む住居があって、それ以前に廃絶した住居であることもわかる。これをＢ－２類とする。

Ｂ－１類のＳＩ1126はＳＢ1127を切っていることから、ＳＢ1127は９世紀第１四半期ぐらいがその存続期間となろう。ＳＢ1127と同時に存在したＳＢ937は、Ａ類のＳＩ965を切っていることから、Ａ類の年代はＳＢ937・1127よりも古いと見なし得る。Ａ類は５軒のうち３軒が削平によって床土だけになっていることや、Ｂ類の方向性との明確な相違から、Ａ類はこの地域に平坦地を造成する以前の遺構で、整地後にＳＢ937・1127建物を造営したと考えられる。

したがって、

Ａ　類……ＳＩ934,935,965,966,1083……９世紀初頭直前

Ｂ－１類……ＳＩ1107,1116,1126……９世紀第２四半期頃

Ｂ－２類……ＳＩ1075,1125,1148など……９世紀後半

の年代が考えられる。

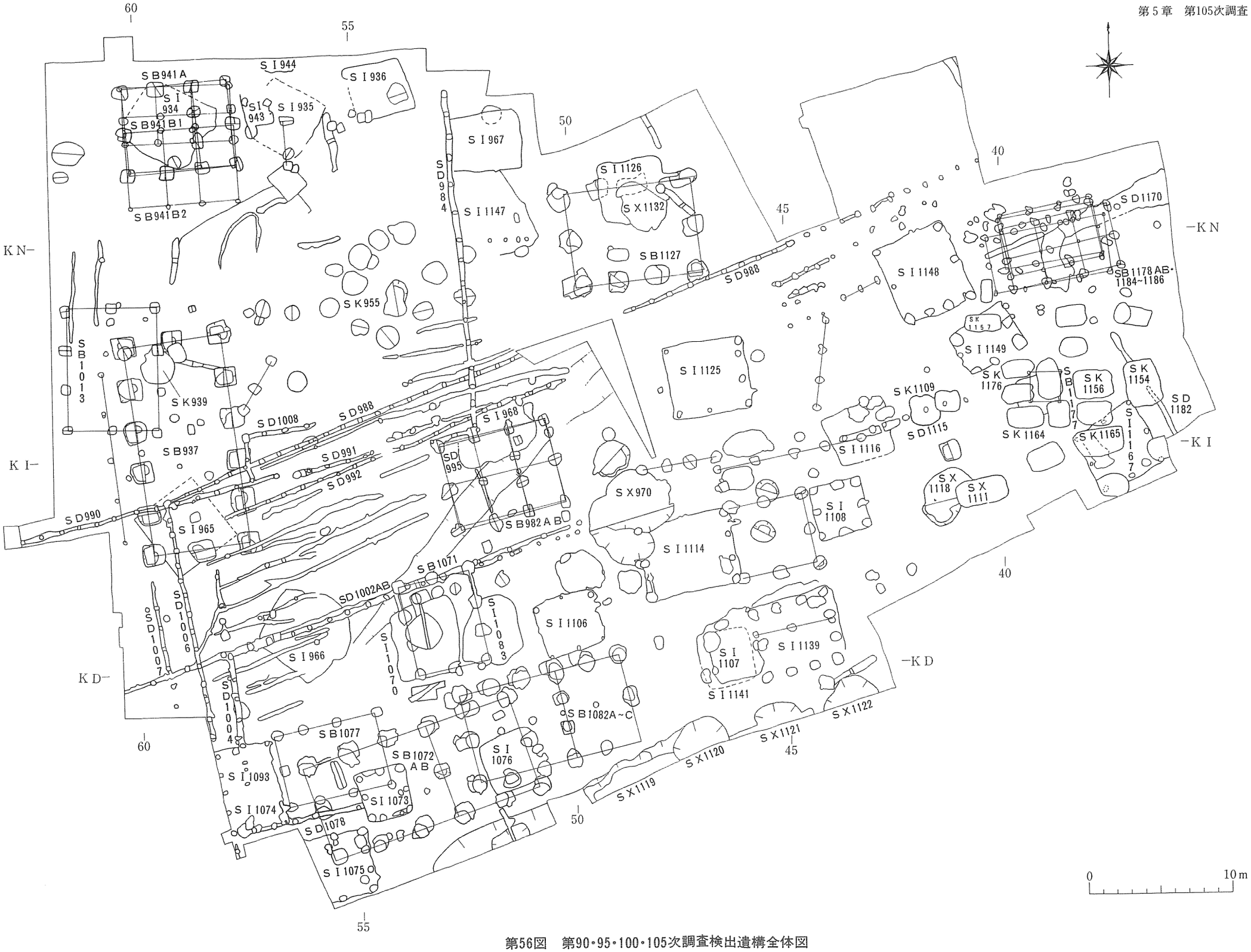
（２）　掘立柱建物跡・板塀

建物跡は16棟検出された。竪穴住居跡との重複状況、建物方位の同一性、板塀との関係などからその変遷を考えてみる。

前述のように、ＳＢ937とＳＢ1127は、同時に存在した建物と推定され、建て替えはなく、柱が抜き取られていて、一時期だけの造営である。この２棟がこの地域の最初の建物で、９世紀第１四半期の年代が推定される。明確にこの２棟に対応すると考えられる他の遺構はない。

板塀どうしが交差する形で重複する箇所で、新旧関係が判明しているところが２箇所あり、ＳＤ1002ＡＢ→ＳＤ988・1006→ＳＤ984の関係が把えられる。

９世紀後半代の竪穴住居跡（Ｂ－２類）と掘立柱建物跡との重複関係では、９世紀後半のＳＩ1075に切られる建物としてＳＢ1072ＡＢがある。この建物は北側柱列で見ると、方位が調査南北基準線に対して北が東へ81°振れている。これと方位が近似する建物は他にないが、ＳＤ1002ＡＢ・1115板塀が建物の桁行方位と合致し、殊に２時期あるＳＢ1072ＡＢの北側部分では板塀も明確に２時期あることから、建物、板塀ともに２時期あることになり、ＳＢ1072ＡＢとＳＤ1002ＡＢ・1115は伴うものと考えられる。ＳＤ1002ＡＢ・1115板塀は９世紀第２四半期頃のＳＩ1116を切り、10世紀前半～中葉頃のＳＢ1071に切られている。ＳＢ1072ＡＢは９世紀後



第56図　第90・95・100・105次調査検出遺構全体図

半代のＳＩ1075に切られることから、これらの建物と板塀の年代を９世紀中葉頃と見なすことができる。

次に９世紀後半代の竪穴住居跡を切る建物にＳＢ1077・ＳＢ1082Ａ～Ｃがあり、この建物と方位が近似する建物にＳＢ982ＡＢ・1071・1178ＡＢ・1184～1186がある。これらは建物方位の振れが相互に最大４°の範囲に収まっていて共通性がある。この中で、ＳＢ982は２期、ＳＢ1082は３期、ＳＢ1178ＡＢ・1184～1186は同一場所での５期にわたる造営がある。年代は10世紀前半～中葉頃と推定される。

これらの建物の南北方向の柱筋には３期の建て替えと考えられるＳＤ1004・1006・1007板塀の方位がおおよそ近似し、東西方向の柱筋には、一連となるＳＤ990・991・995板塀あるいはＳＤ1078板塀の方位がほぼ共通することから、これらの建物と板塀は伴うものと考えられる。

ただし、板塀には、東西・南北方向ともに少なくとも３期があり、建物にも建て替えがあることや、ＳＢ982ＡＢの北側の柱掘形とＳＤ995板塀は重複する位置にあって、これらは併存しないと考えられることもあり、掘立柱建物と板塀の組み合わせにも変遷がありそうである。

これらの掘立柱建物跡と、９世紀後半に位置付けたＢ－２類の竪穴住居跡の方位は近似しているので、それらに併存するものがないとは言い切れないが、両者が重複する場合はＳＢ1077がＳＩ1073を、ＳＢ1082がＳＩ1076をそれぞれ確実に切っている。掘立柱建物跡をＢ－２類の竪穴住居跡よりも新しく位置付けておく根拠はこの点である。

次に、ＳＢ1013とＳＢ1177は建物方位が調査基準線とほぼ一致している。ＳＢ1177は10世紀前半～中葉頃の土坑群を切って構築しているが、その方位は土坑の長軸・短軸の方位におおよそ合致していて、土坑に近い年代かと推定される。なお、ＳＢ1013は、９世紀後半のＳＫ939よりも古いとする調査時の所見があるが、ＳＢ1177との方位の同一性から、これを訂正し、両者とも10世紀代の建物としたい。

南北方向のＳＤ984板塀は、前述の板塀相互の重複関係から最も新しく位置付けられる。９世紀第１四半期のＳＢ937・1127建物には位置的に伴わないことが明らかである。また、９世紀中葉頃のＳＢ1072ＡＢ建物とＳＤ1002ＡＢ板塀の組み合わせにも伴わない。さらに10世紀前半～中葉の建物群や板塀とは、方位が全く異なることや、ＳＤ988・992板塀と交差してＳＤ988を切っていることから、これらとの併存も考えがたい。

ＳＤ984とＳＢ1013とは方位に４°ほどの違いがあるが、最も併存の可能性の高いものはＳＢ1013と考えることができ、その東方を区画する性格を推定したい。

以上の建物群のいずれとも方位が異なるものに、調査区北西にあるＳＢ941Ａ・941Ｂ１・941Ｂ２の３期にわたる建物がある。ＳＢ941Ａの柱掘形の埋土は、10世紀前半～中葉としたＳＢ982Ａによく似ており、ＳＢ941Ｂ１・Ｂ２のそれも同年代のＳＢ982ＢやＳＢ1178ＡＢ・

1184～1186に類似性がある。年代は相互に近いものと思われ、方位の相違は、板塀で仕切られる建物群と、そうでないものとの違いに基づくものかと考えられる。

以上から、

A　ＳＢ937，1127……９世紀前半

B　ＳＢ1072ＡＢ，ＳＤ1002ＡＢ・1115……９世紀中葉頃

C　ＳＢ941Ａ・Ｂ１・Ｂ２，982ＡＢ，1071，1077，1082Ａ～Ｃ，1178ＡＢ，1184～1186，ＳＤ990，991，995，1004，988・1006，1007……10世紀前半～中葉頃

D　ＳＢ1013，1177，ＳＤ984……10世紀中葉～後半頃

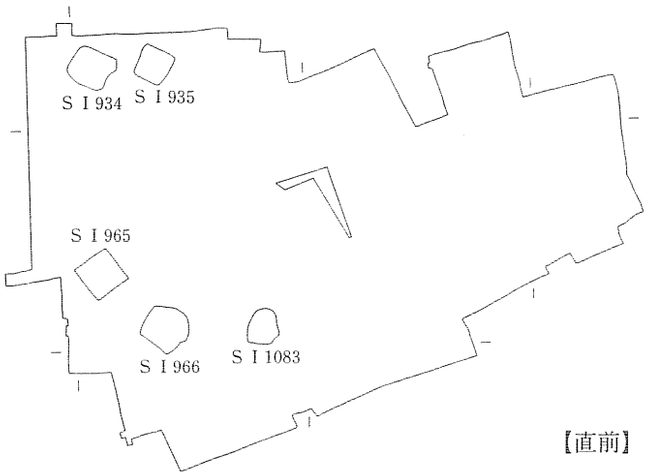
の変遷をたどることができる。

（３）　土坑・その他の遺構

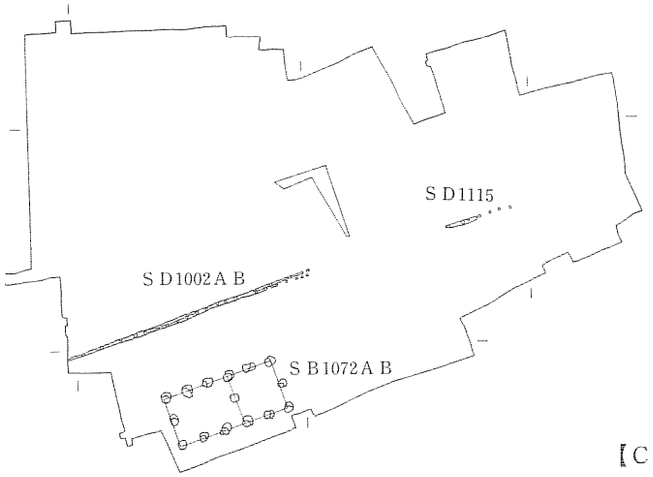
土坑およびその他の遺構は多数検出されているが、ＳＫ939・955・1109，ＳＸ1118からは、回転糸切り無調整の須恵器杯を主体とし、回転糸切り内黒の土師器杯などが出土していて、９世紀後半代に位置付けられる。ＳＸ970・1132・1119～1122は土取跡かと思われる不整形の凹

第４表　政庁東方の遺構期

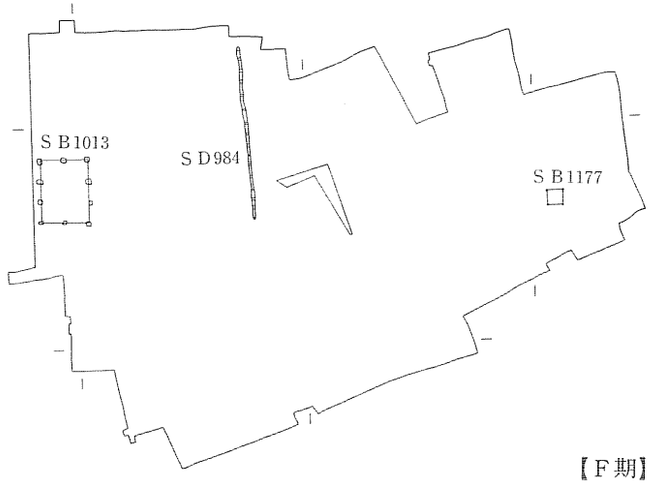
遺構期	主な遺構			年代	外郭線	政庁
	竪穴住居跡	掘立柱建物跡，板塀	土坑，その他の遺構			
直前	A類　ＳＩ934，935，965 ＳＩ966，1083					ＳＩ331，332 ＳＩ571
A期		A　ＳＢ937，1127		９世紀前半頃	A期	Ⅰ－A期
B期	B－１類　ＳＩ1107 ＳＩ1116，1126					Ⅰ－B期
C期		B　ＳＢ1072Ａ・Ｂ ＳＤ1002Ａ・Ｂ，1115		９世紀中葉頃		
D期	B－２類　ＳＩ1075，1125 ＳＩ1148など		ＳＫ939，955，1109 ＳＸ970，1118，1119	９世紀後半頃	B期	Ⅱ期
E期		C　ＳＢ941Ａ，Ｂ1，Ｂ２ ＳＢ982Ａ・Ｂ，1071 ＳＢ1077，1082Ａ～Ｃ ＳＢ1178ＡＢ ＳＢ1184～1186 ＳＤ990，988・1006	ＳＫ1111，1154，1164 ＳＫ1165，1176	10世紀前半～中葉頃	C期	Ⅲ期
						Ⅳ期
F期		D　ＳＢ1013，1177 ＳＤ984		10世紀中葉～後半頃	D期	Ⅴ期



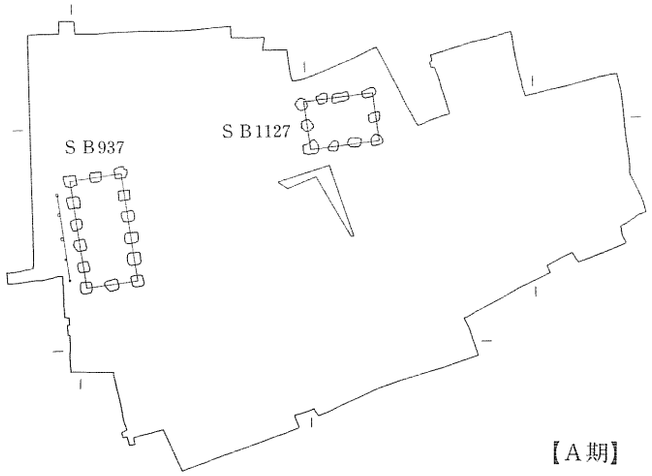
【直前】



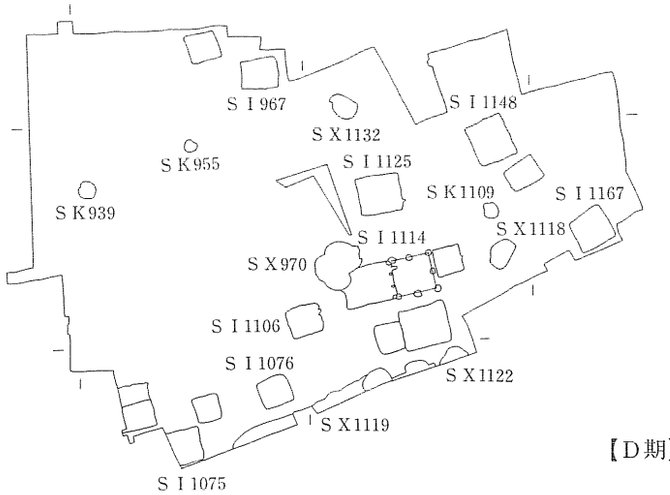
【C期】



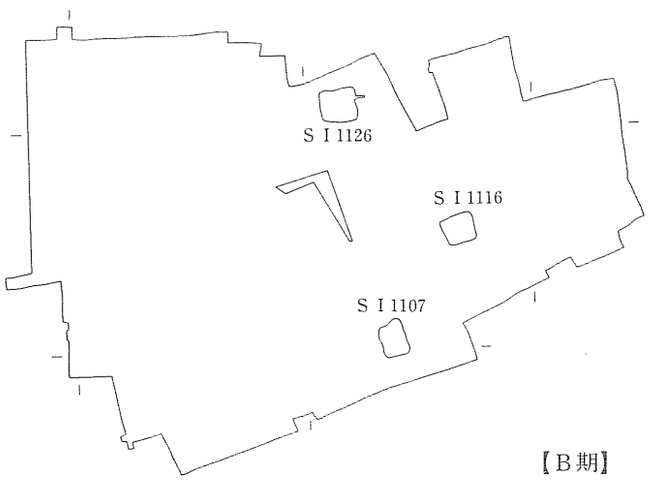
【F期】



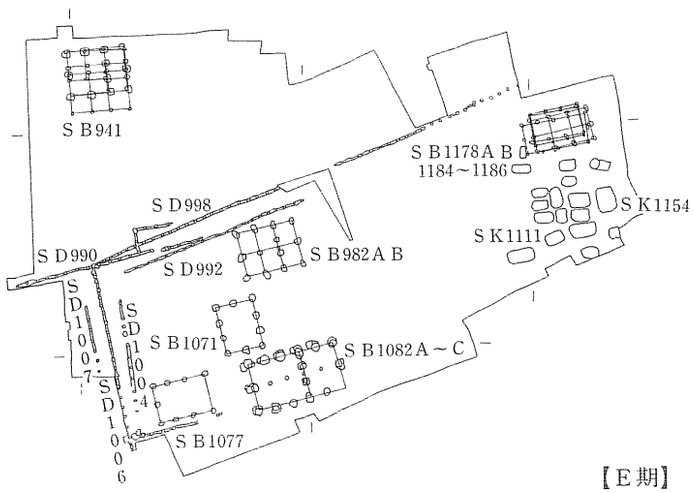
【A期】



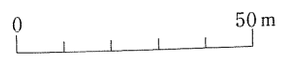
【D期】



【B期】



【E期】



第57図　政庁東方地区の遺構の変遷

みで、多くは自然堆積の様相を示し、火山灰層がレンズ状に見られる。十和田ａ火山灰が降下する前に掘られたもので、年代は９世紀後半代に見なすことができる。

調査区東方に第105次調査で検出されたＳＫ1154・1164・1176などの土坑群は人為的に埋めたものと考えられ、埋土中から、回転ヘラ切りの須恵器杯の破片も出土しているが、ＳＩ1167の十和田ａ火山灰を含む層を掘り込むＳＫ1165などと、形態と方位が類似することや、同時に埋めたと見られるものがあることなどから、10世紀中葉頃の年代と推定される。

以上に述べてきた竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板塀、土坑、その他の遺構の新旧関係から、それらの変遷についてまとめることにする（第４表・第57図）。

【Ａ期直前】

Ａ類とした竪穴住居跡で、ＳＩ934・935・965・966・1083の５軒が該当する。政庁にも３、４軒存在し、創建にあたっての盛土整地地業や政庁建物の造営工事に携わった工人のものかという理解である。

【Ａ期】

掘立柱建物跡２棟の組み合わせである。南北棟桁行５間、梁行２間のＳＢ937と、東西棟桁行３間、梁行２間のＳＢ1127で、柱間距離などに共通性があり、いずれも柱を抜き取って再利用している。年代は９世紀第１四半期で政庁Ｉ－Ａ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｂ期】

Ｂ－１類とした３軒の竪穴住居跡で、ＳＩ1107・1116・1126がある。年代は９世紀第２四半期で、Ａ期建物とＣ期建物の間の仮設的なものである。政庁Ｉ－Ｂ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｃ期】

Ａ期の２棟の建物が解体されて、その南に、東西棟桁行５間、梁行２間で間仕切のあるＳＢ1027ＡＢ掘立柱建物が建てられる。これに東西方向のＳＤ1002ＡＢ・1115板塀が伴い、それぞれ２期にわたって造営される。年代は９世紀中葉頃で、政庁Ｉ－Ｂ期、外郭線Ａ期に相当する。

【Ｄ期】

ＳＩ1075・1125・1148など17軒の竪穴住居跡が確認されている。この中で明確にカマドが付設されていないものにＳＩ1073・1108など５軒があるが竪穴住居に含めている。漆紙文書を出土したＳＩ1125・1167や、床面に焼面の拡がりがあるＳＩ1075・1167、竪穴部分と掘立柱建物部分が連続する構造となっているＳＩ1114などがあり、これらは漆塗作業や何らかの工房的な使い方を推測させる。ＳＩ1114・1148からは「小勝」「官　小勝」の墨書土器も出土した。

土器の年代や、覆土に火山灰を含むことから、これらの年代は９世紀後半であるが、全てが同時に存在したものではない。ＳＫ939・955・1109土坑、ＳＸ1118・1119～1122その他の遺構

もこの年代である。政庁Ⅱ期、外郭線Ｂ期に相当する。

【Ｅ期】

掘立柱建物が増加する時期で、６棟が確認される。東西・南北方向の板塀が伴い、それに区画された中に５棟の建物が並ぶ。建物には、東西棟で桁行５間、梁行２間で間仕切りのあるＳＢ1082Ａ～Ｃや、南北棟で桁行３間、梁行２間のＳＢ1071などがある。

板塀外にも３期にわたるＳＢ941Ａ、Ｂ1、Ｂ２がある。板塀に３期、建物に５期の造営があるものがあり、これらには最大５期の変遷が考えられる。

年代は10世紀前半～中葉頃で、政庁のⅢ～Ⅳ期、外郭線のＣ期に相当する。ＳＫ1111・1154・1164・1165・1176などの土坑群も、この時期に含まれる。

【Ｆ期】

調査区東方に桁行、梁行ともに１間のＳＢ1177掘立柱建物、西方に南北棟桁行３間、梁行２間のＳＢ1013掘立柱建物が建てられる。南北方向のＳＤ984板塀が伴い、年代は10世紀中葉～後半頃と考えられ、おおよそ政庁Ⅴ期、外郭線Ｄ期に位置付けられる。

第６章　第106次調査

電気探査による払田柵跡内の河川跡調査

秋田大学鉱山学部　西　谷　忠　師

１．はじめに

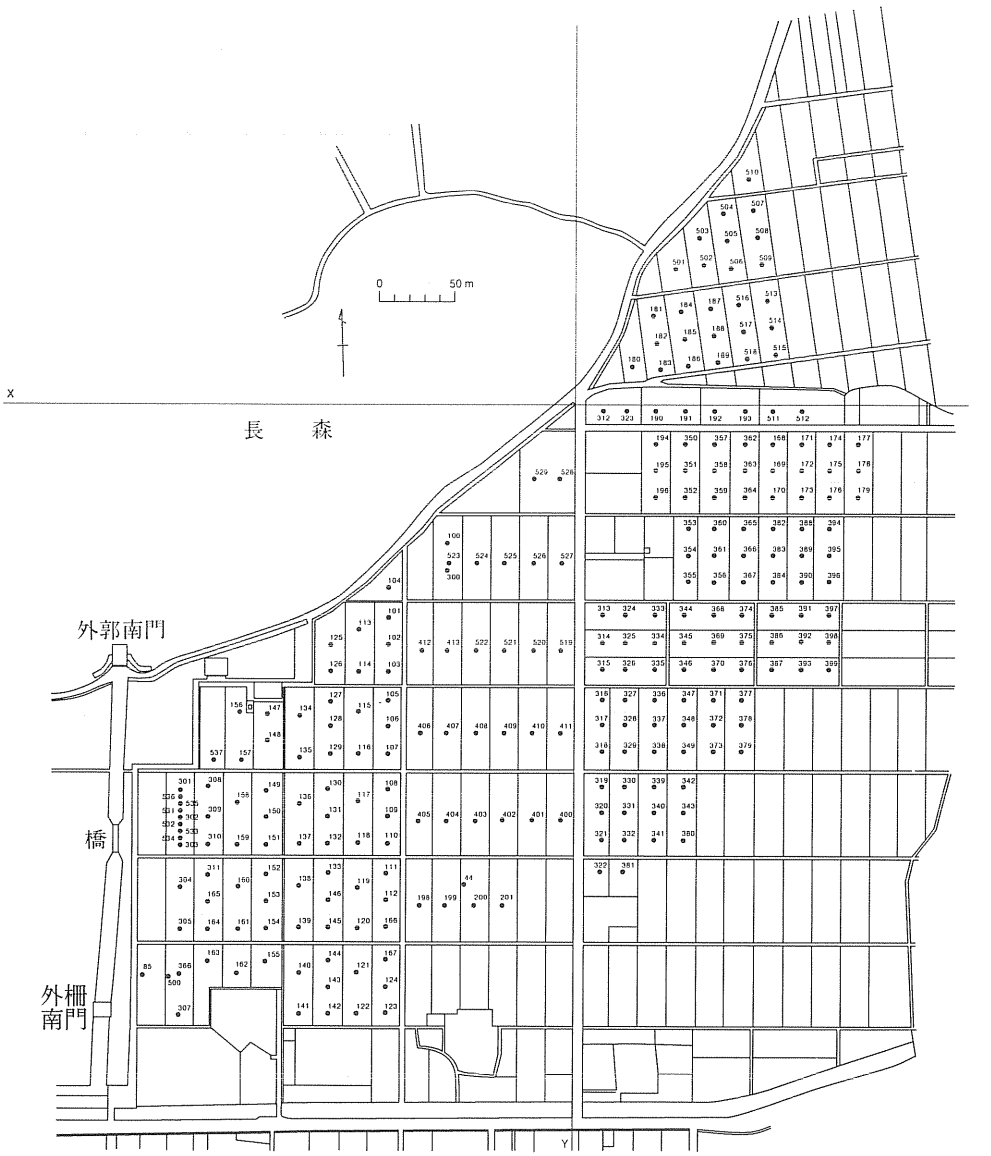
昨年度は電気探査の垂直および水平探査を用いて河川敷分布の概略を報告した。(註１) 本年度の調査では、昨年度の領域も含めて電気探査の垂直探査を行った。調査の目的は探査範囲内の河川敷の分布および最終段階の河川跡を推定することにある。

２．電気探査

調査は平成７年10月下旬から11月中旬にかけて行った。用いた手法は等間隔四極法あるいはウェンナー法と呼ばれる電気探査の手法で、地面に四本の電極を等間隔に打ち込み、両端の電極に電流を流し、内側の二本の電極で電圧を測定する。四本の電極間隔を少しづつ大きくしながら測定を行う。解析を行うことによって地表の浅い部分から深い部分までの比抵抗構造を知ることができる。測定点における地下の垂直方向の構造が得られることから垂直探査と呼ばれている。電極間隔は普通ａという文字で示し、単位はメートルである。実際にはａ＝0.1, 0.12, 0.14, 0.18, ... , 10, 12のように狭い電極間隔から広い電極間隔まで30通りに変化させて測定を行った。地表の浅い部分の状態をできるだけ正確に知るために、ａ＝0.1から1.2の測定時には塩ビのパイプに釘を打ち付けたものを用意し、これを地面に差し込んで測定を行った。

３．測定および解析

第58図に測定点を示す。黒丸で示した点が本年度に測定した電気探査・垂直探査の測定点で264点ある。昨年度に測定した92点の垂直探査データも総合して合計356点で解析を行った。実際の測定例を第59図に示す。この図は測点148の場合で黒丸が実測値である。横軸は電極間隔ａ（ｍ）縦軸は測定した電圧と流し込んだ電流から抵抗Ｒ（オーム）を求め、２πａＲによって得られる見かけ比抵抗の値（オーム・メートル）をプロットしてある。比抵抗は物質固有の値であり、今の場合測定電極間隔における平均的な値を示しており、地下構造を求めるための基礎データである。観測値を実現するモデルは種々存在するため一意的には定まらない。しかし、特定の層の比抵抗を知っていればそれだけ現実に近い推定モデルを得ることが可能となる。長森北方の第103次調査の発掘現場で粘土層の比抵抗を測定し、30オーム・メートルの値を得ている。モデル構造を求める場合、この値を粘土層の比抵抗と考え、理論計算を行った。上記

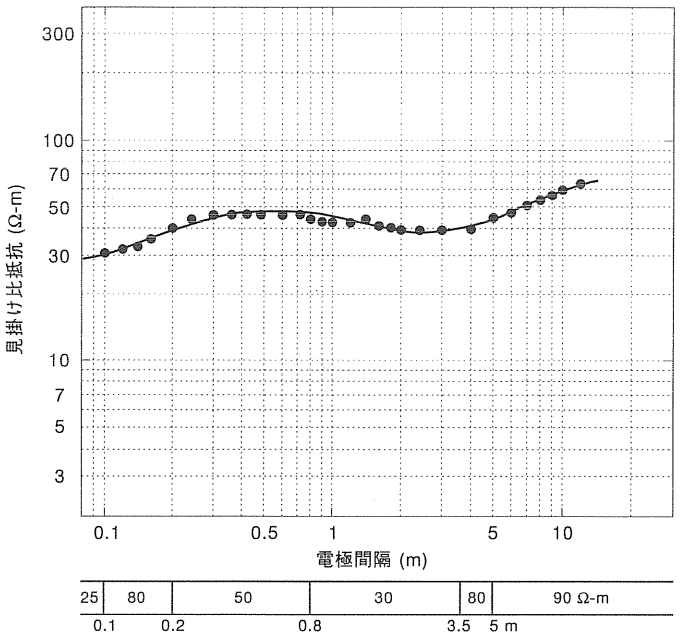


第58図　電気探査測点位置図

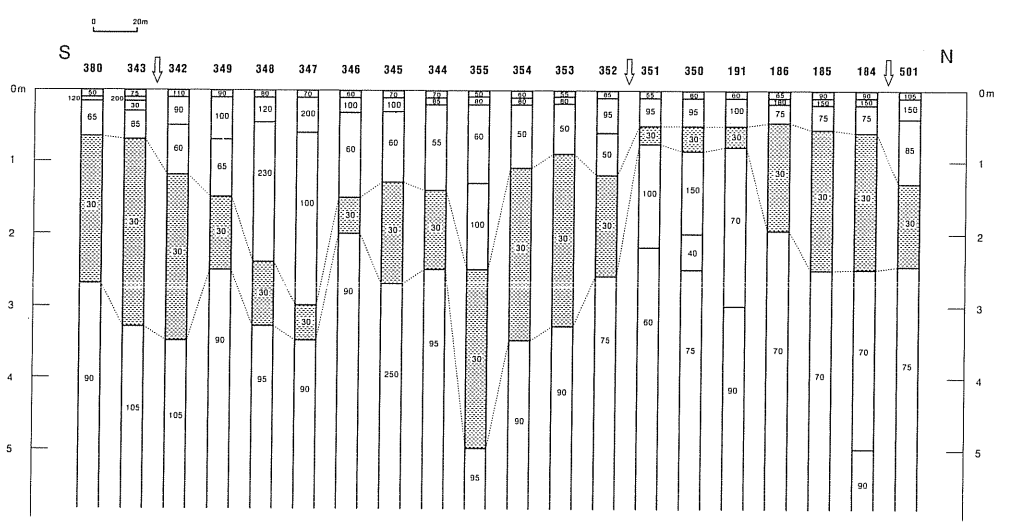
の手法を用いて求めたモデル構造が第59図の下部に示してある。柱状図を90度回転させた形で地下構造が示されており、右側が深度の深くなる方向である。すべての測定点で実測値を再現するモデル構造を求める。

4．河川敷の推定

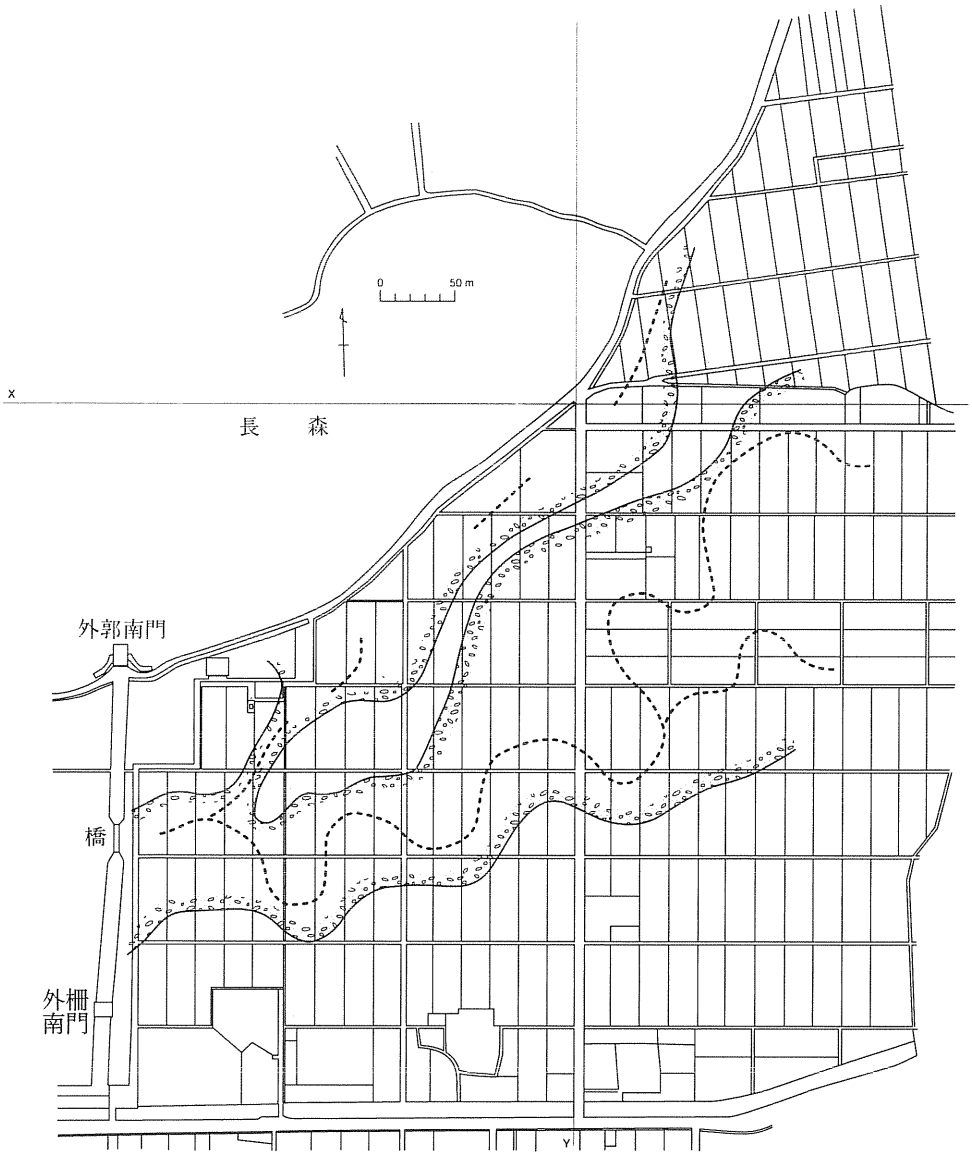
地表をゼロメートルとし、比抵抗構造がどのように変化するかを示したものが第60図である。



第59図　測点148の測定結果とモデル構造
黒丸は実測値・実線は下部に示したモデルの理論値である。



第60図　比抵抗断面図



第61図　河川敷および最終段階河川推定経路

この図は探査範囲内のほぼ中央を南北に走っている道路から東に約70メートルの位置での南北方向の地下構造を表している。左側が南、右側が北である。特に色を分けて表示してある30オーム・メートルの部分に注目する。この層は粘土層あるいは青灰色シルト層に対応していると考えられる。河川敷は地山である粘土層を削り込んでいると考えられ、粘土層の上面が0.5～0.7メートルから急激に下がる部分を探す。この条件に合う部分は測点番号343と342、352と351、184と501の間である。南北方向、東西方向で同様の操作を繰り返し、河川敷の範囲の推定を行

った結果が第61図である。河川の流れは大きく二つあり、政庁跡付近で合流し、一つになっていることが特徴である。政庁前に湧き水があるが、何らかの関係があるのかもしれない。昨年度の概報では広い河川敷を推定したが、分解能が悪く、二つの河川敷を分離できなかったためと思われる。本年度の追加測定では測点数も増え、推定精度は高まっているものと考えられる。この河川敷分布はハンドボーリングによる地山粘土分布の結果[(註２)]とよい一致を示す。

５．最終段階河川の推定

最終段階の河川は地山粘土層の上部の砂質土の上にあると予想できる。おそらく粘土質の物質が含まれているため比抵抗は低くなると思われる。砂質土との関係で地山の粘土層の比抵抗よりは高いが、周囲と比較すれば低めの比抵抗を示す部分が最終段階河川の候補である。地表から１メートル前後までの範囲で比抵抗が60オーム・メートルよりも低い部分を探す。この条件に合致する測点は第60図では354、353である。このような推定をすべての測線に対して行い、流路を推定したものを第61図に点線で示す。東側で流路が二つに別れているが、流路が同時に二つあったのか、流路が変化して移動したのかの区別は今回の測定からは区別できなかった。

註１　秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1994　払田柵跡－第98～101次調査概要』　秋田県文化財調査報告書第258集　1995（平成７）年

註２　秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所『払田柵跡調査事務所年報1990　払田柵跡－第84～87次調査概要』　秋田県文化財調査報告書第216集　1991（平成３）年

第７章　調査成果の普及と関連活動

1　現地説明会の開催

平成７年10月14日

第103次・105次調査について

2　諸団体主催行事への協力活動

政庁跡や発掘調査現場などにおいて、六郷町立六郷東根小学校、湯沢市中央公民館講座「ゆざわ歴史散歩」の会、本荘市文化財保護協会、秋田県総合教育センター「遺跡探訪」研修講座など各種団体主催の郷土学習会、遺跡見学会などに対し、払田柵跡の説明を行った。

3　払田柵跡環境整備審議会への出席

第１回　　平成７年７月18日

第２回　　平成８年２月27・28日

4　顧問会議の開催

第41回　　平成７年10月９日

第42回　　平成８年２月７日

5　報告

児玉　準「払田柵跡－第103・105次調査の概要－」『第22回古代城柵官衙遺跡検討会資料』

平成８年３月２・３日　場所：新潟市万代市民会館

児玉　準「払田柵跡（第103～106次調査）」『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』

平成８年３月９・10日　場所：大館市立中央公民館

報告書抄録

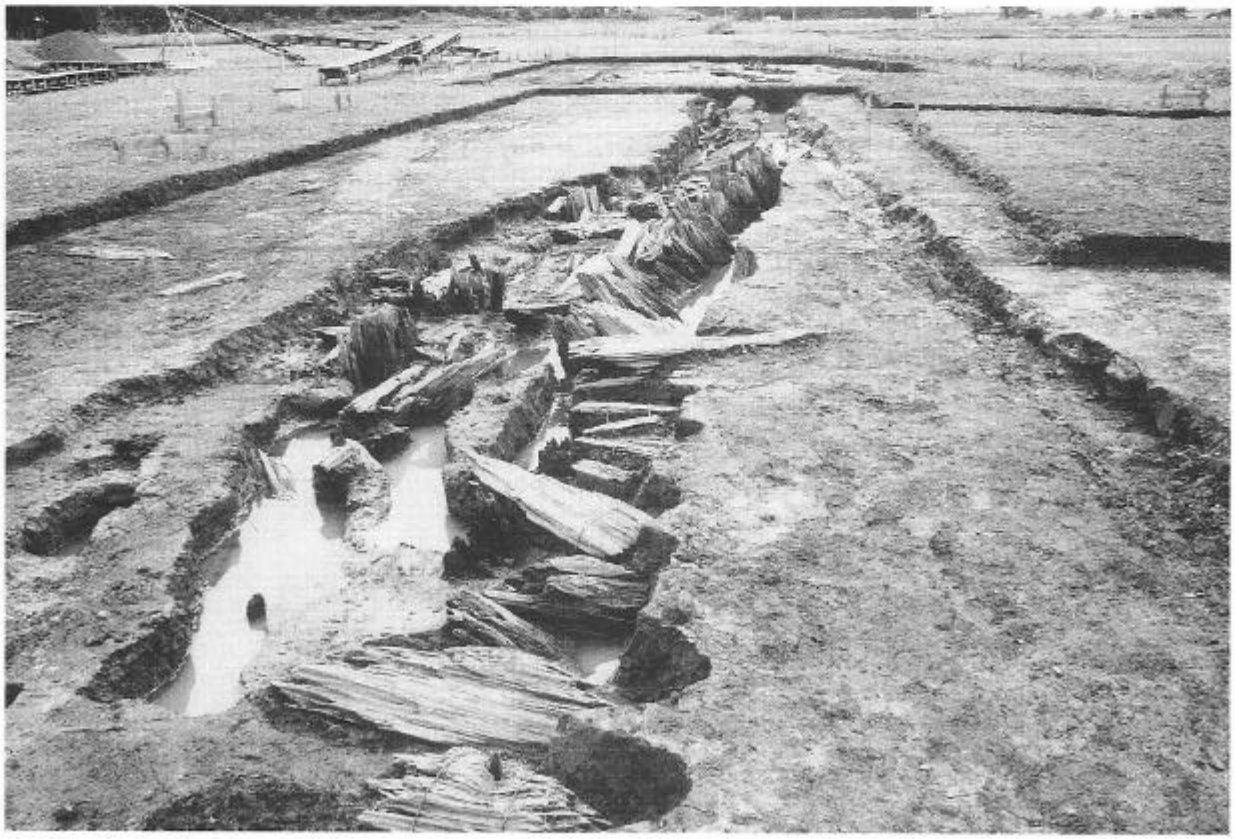
ふりがな	ほったのさくあと　だい 103 ～ 106 じちょうさがいよう
書名	払田柵跡－第103～106次調査概要－
副書名	
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第266集
編著者名	児玉　準
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地　TEL 0187-69-2442
発行年月日	1996年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
払田柵跡 （ほったのさくあと）	秋田県仙北郡 （あきたけんせんぼくぐん） 仙北町払田 （せんぼくまちほったた） 千畑町本堂城回 （せんはたまちほんどうしろまわり）	53429 53432		39度 27分 57秒	140度 33分 11秒	第103次 19950417～ 19950622 第104次 19950619～ 19950707 第105次 19950712～ 19951019 第106次 19951023～ 19951109	630 300 800 電探134,000	学術調査 学術調査 学術調査 学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第103次	城柵官衙	平安時代	外郭線角材列　1条 櫓状建物　1基 溝　1条	土師器、須恵器	外郭線角材列の北に東西方向の溝状遺構が初めて検出された。櫓状建物は昨年のそれの西106ｍの位置にある。
第104次	城柵官衙	平安時代	河川跡　1条	土師器、須恵器	ホイド清水の北には、建物等の遺構が存在しないことが判明した。
第105次	城柵官衙	平安時代	掘立柱建物　6棟 竪穴住居　5軒 板塀　1条 土坑　22基	土師器、須恵器 鉄製釘	政庁東方の平坦地の利用の仕方の変遷が判明。「官小勝」と記す墨書土器が3点出土。
第106次	城柵官衙	平安時代			電気探査により、外柵南東部の河川敷の位置を明らかにした。

図版１　第103次調査

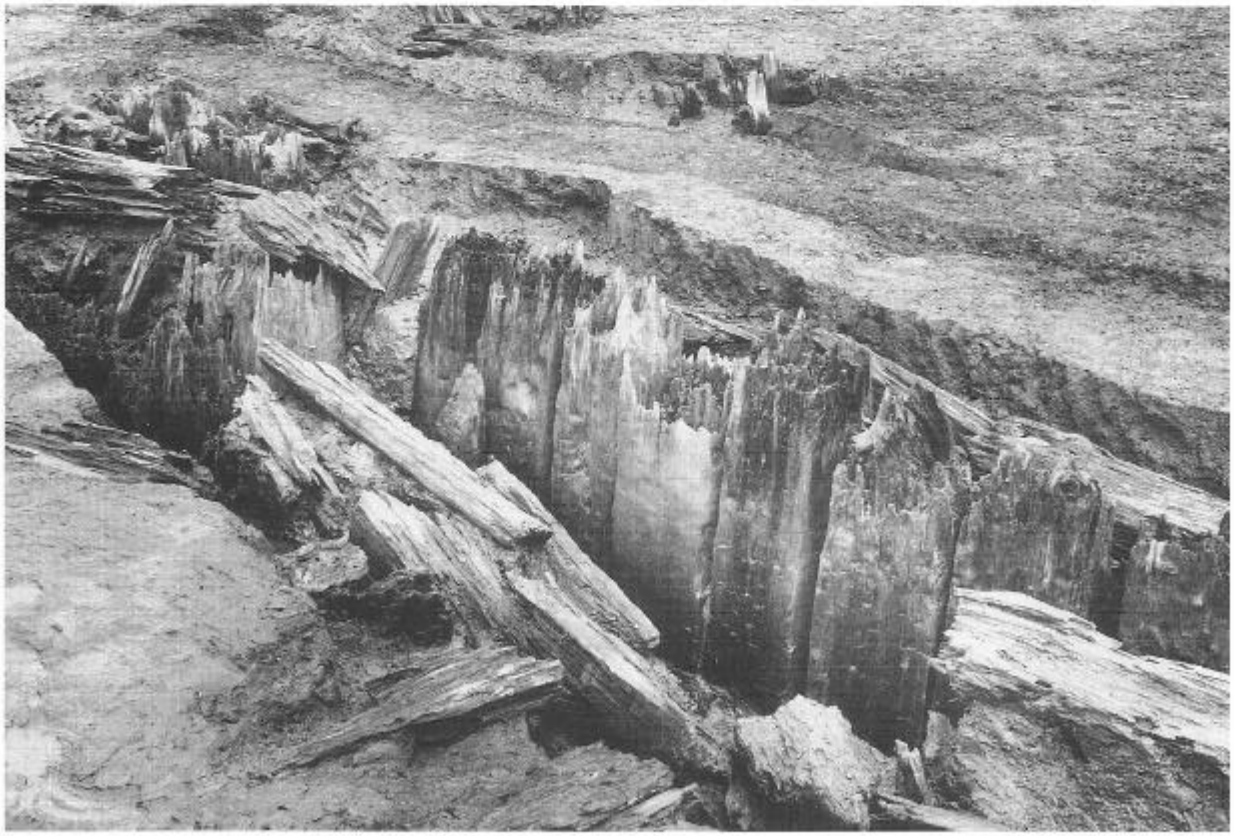
１　外郭線角材列（南東から）



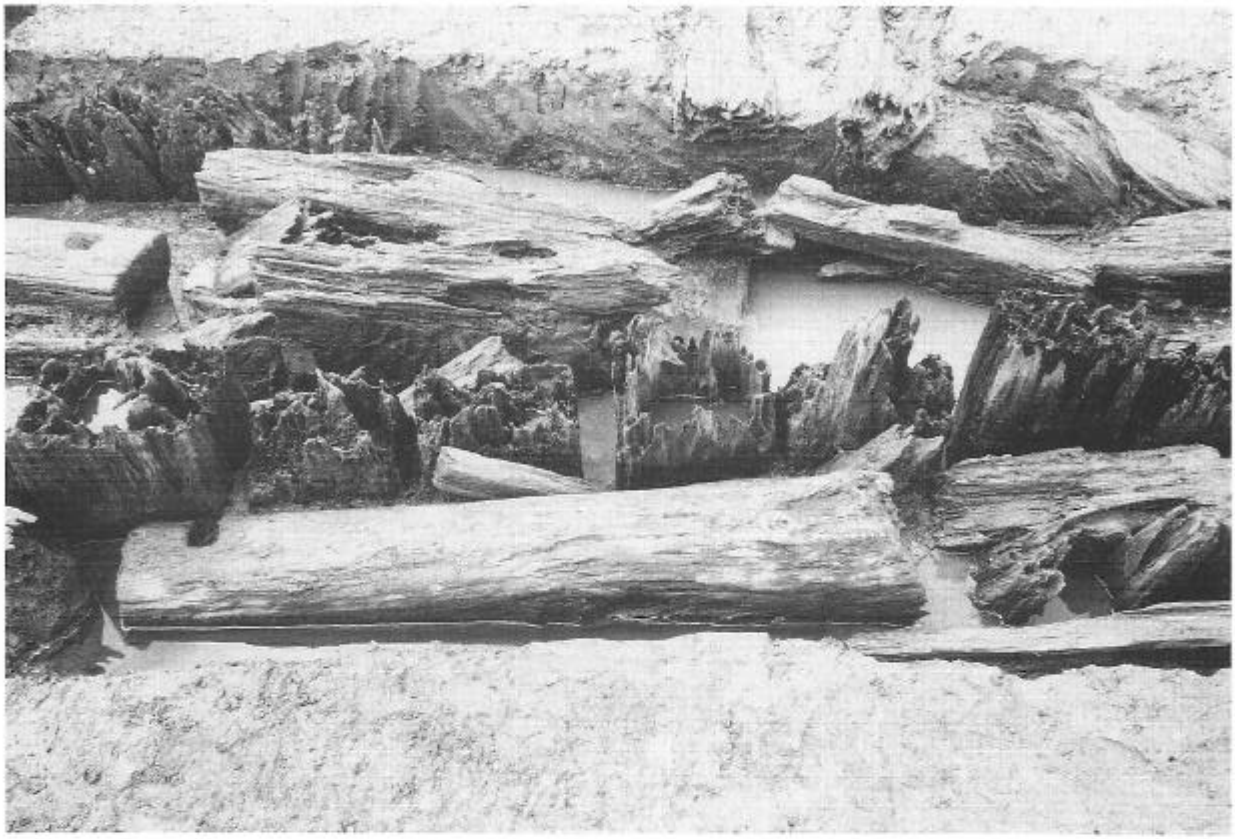
２　同　　上（東から）

図版 2　第103次調査

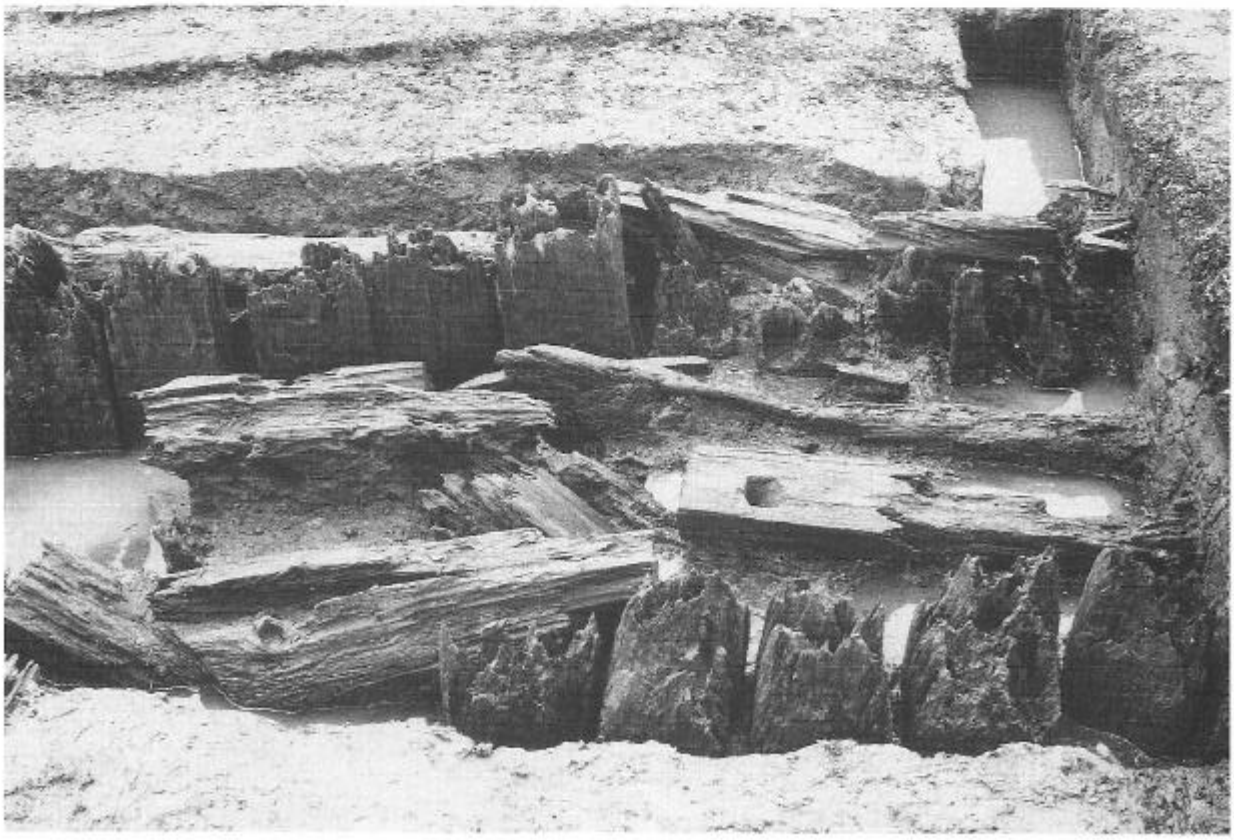
1　外郭線角材列（西から）



2　同　　上（北西から）



1　調査区西端の角材と丸柱（南から）



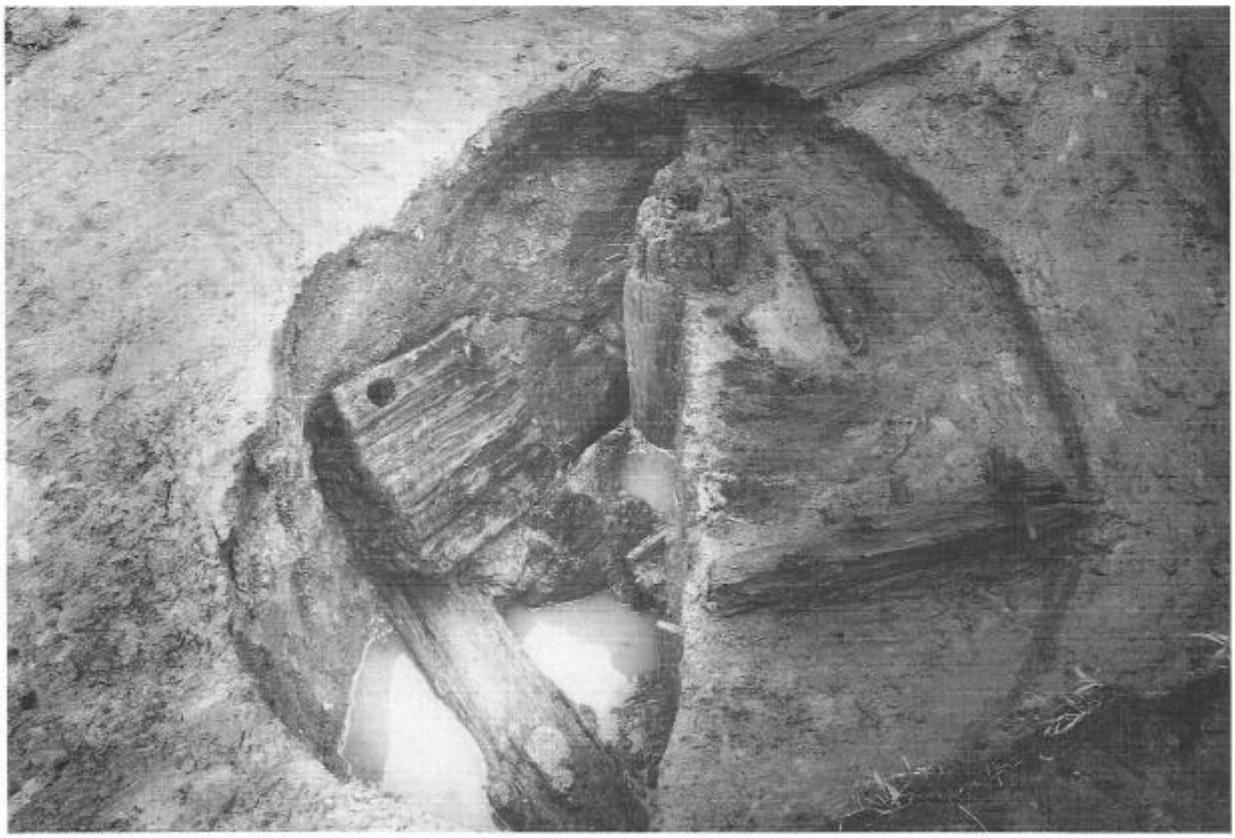
2　調査区西端の角材列（北から）

図版4　第103次調査

1　櫓状建物と角材列（南から）

2　同　　上（北から）

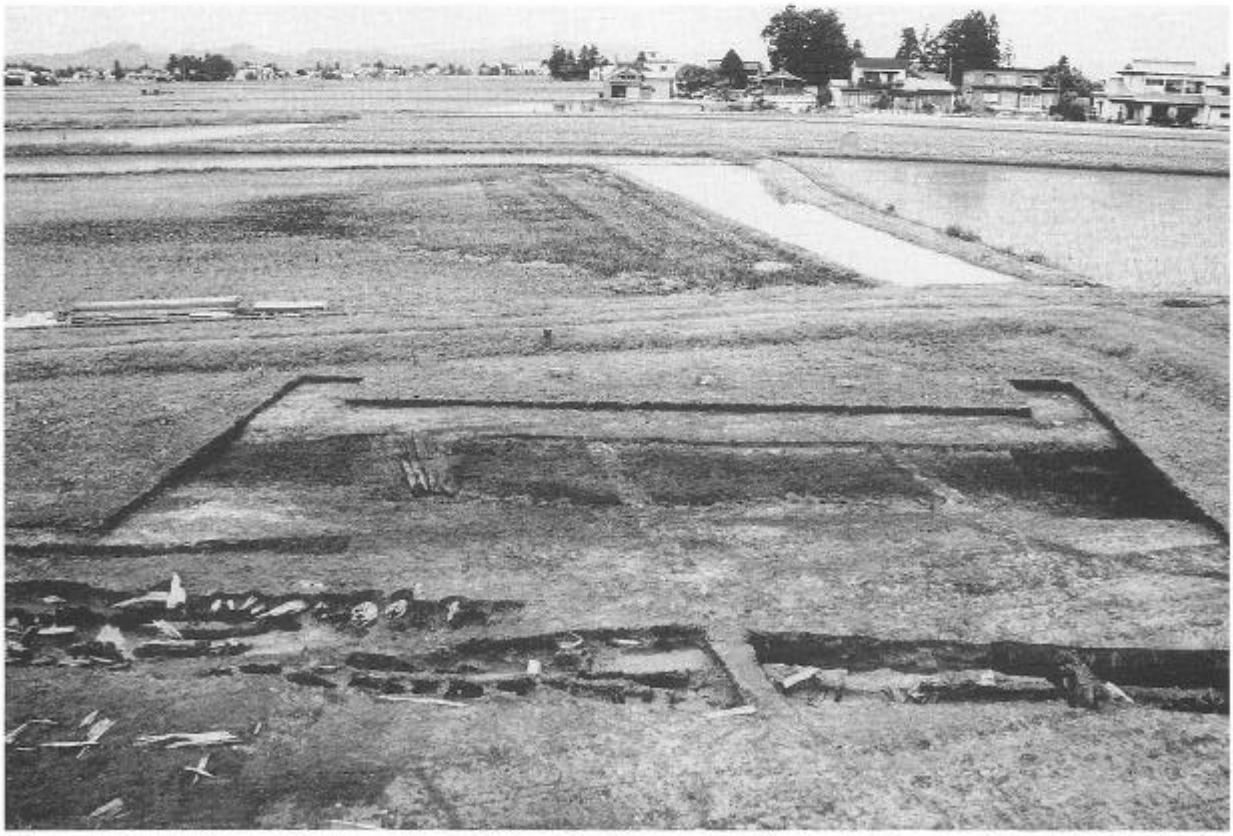
1　櫓状建物北西隅柱掘形（東から）



2　同　　上（北から）

図版 6　第103次調査

1　外郭線角材列と溝（東から）



2　同　　上（南から）

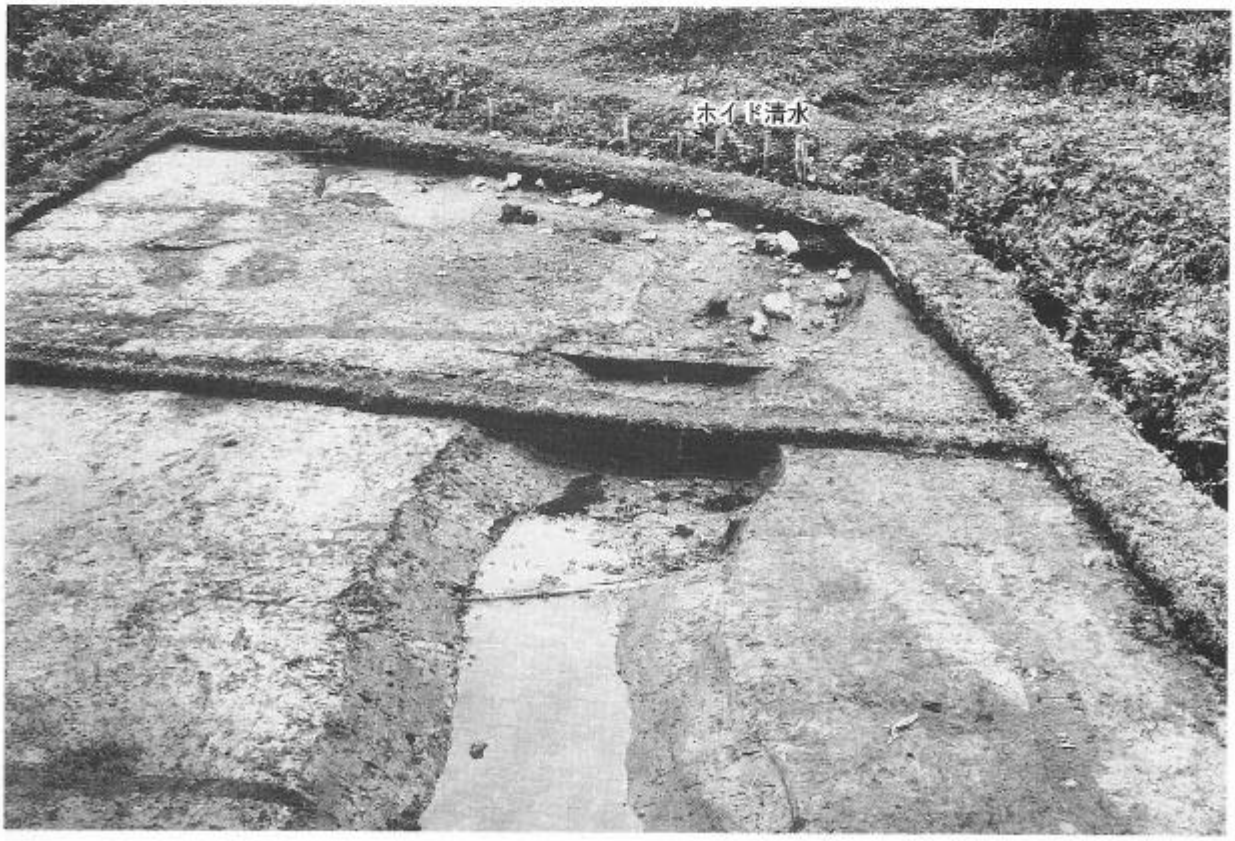
図版7　第103次調査

1　溝土層断面（西から）　白く見えるのが火山灰

2　同　　上（南東から）　白く見えるのが火山灰

図版 8　第104次調査

1　調査地全景（南から）



2　ＳＬ1146（北から）

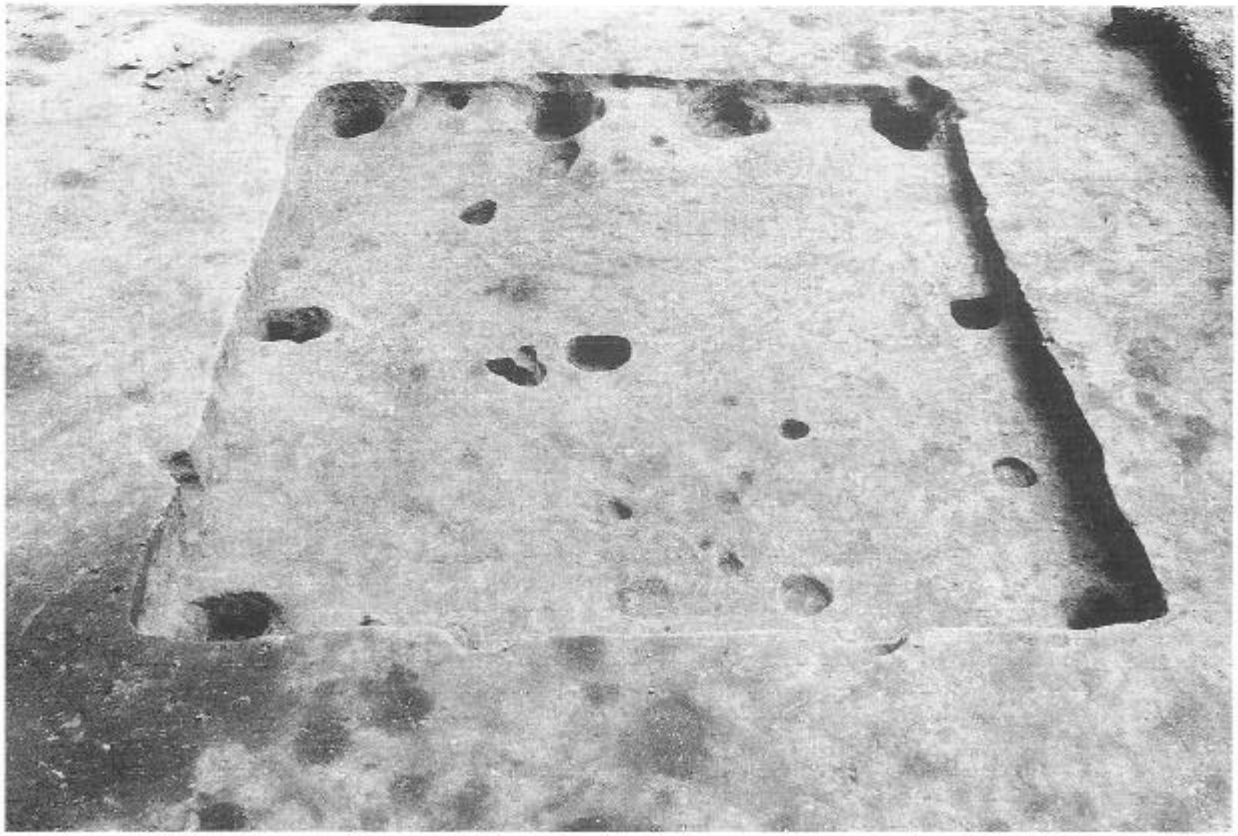
図版 9　第105次調査

1　調査地全景（東から）

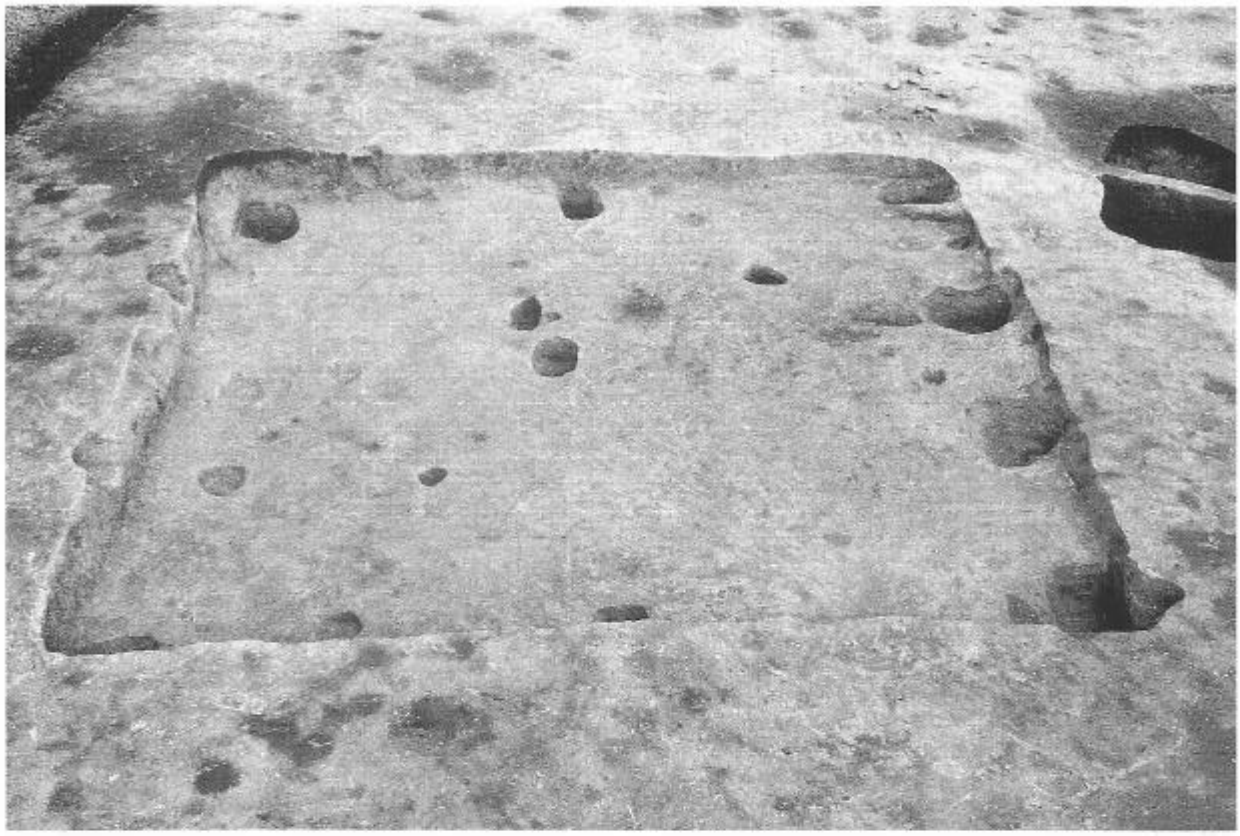
2　同　　上（西から）

図版10　第105次調査

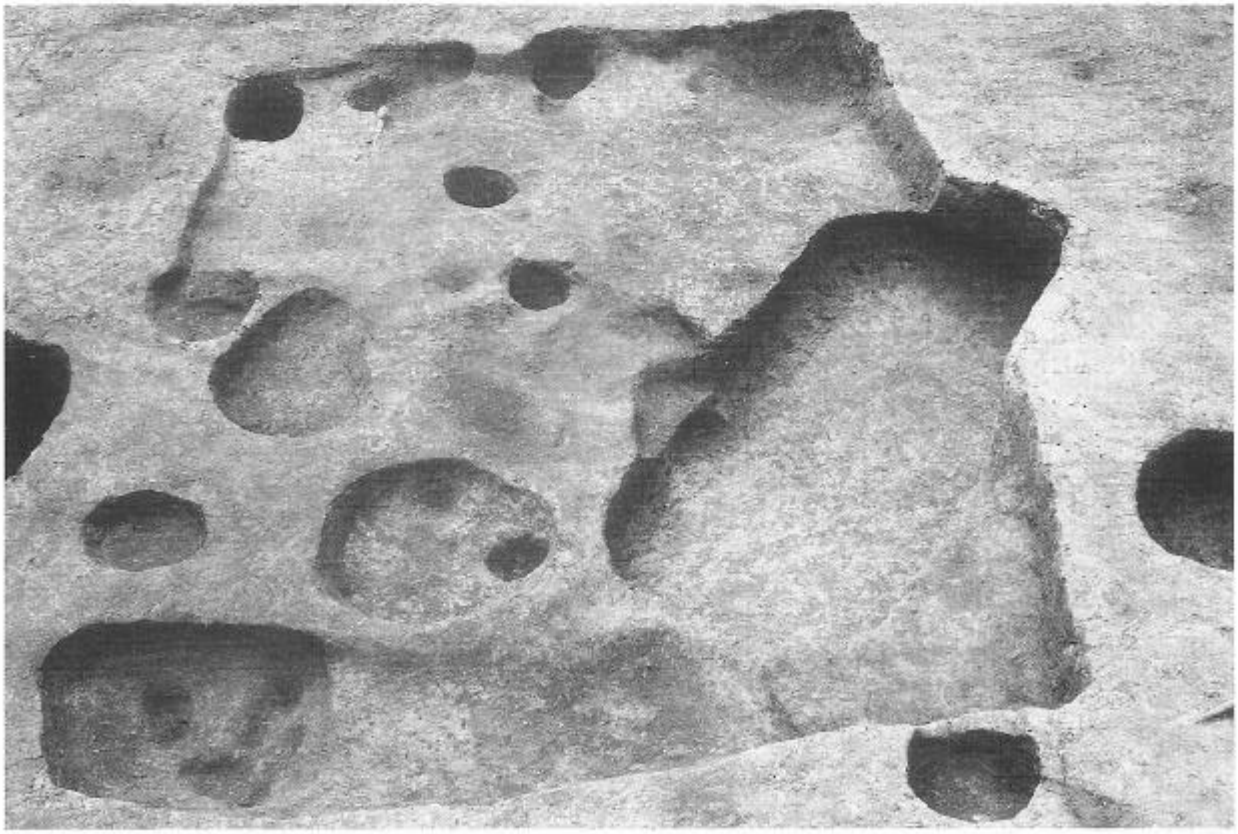
1　ＳＩ967・1147（南西から）



2　ＳＩ1148（北から）

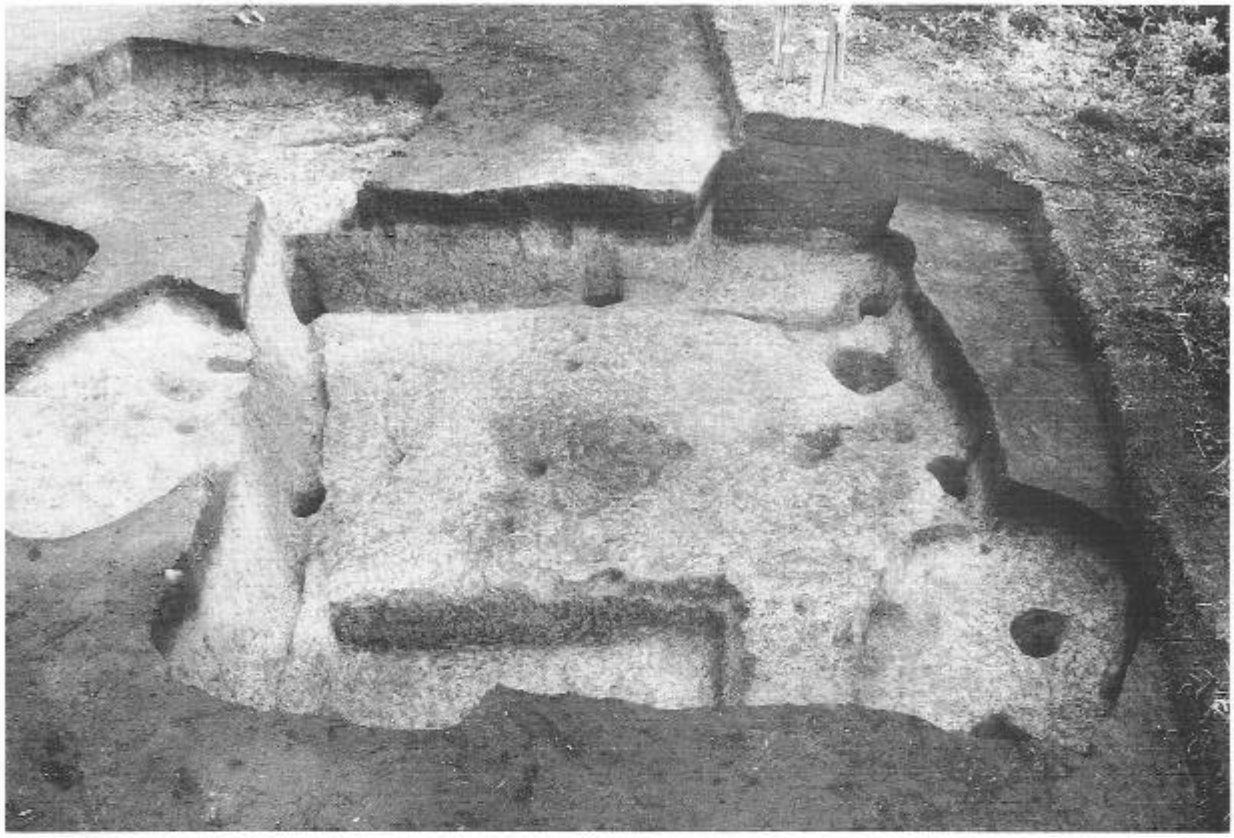


1　ＳＩ1148（西から）



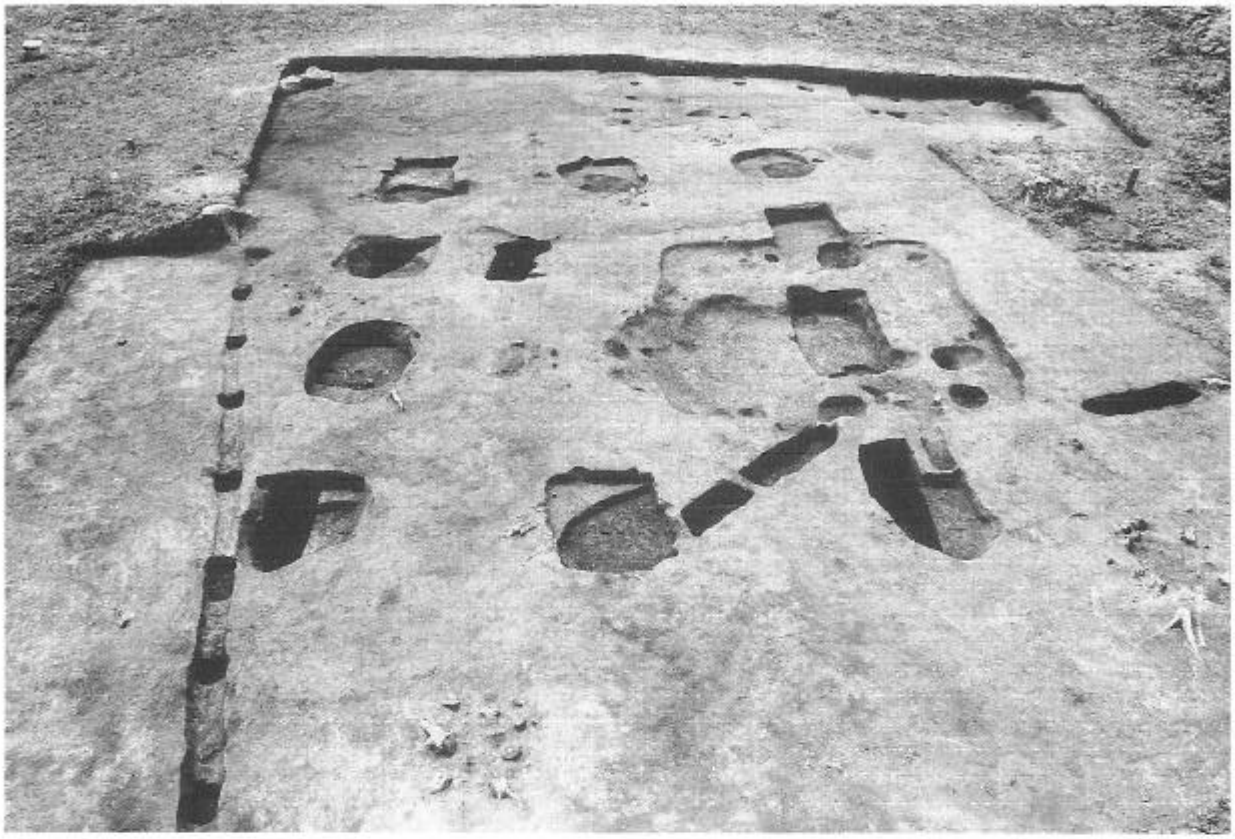
2　ＳＩ1149、ＳＫ1157（東から）

図版12　第105次調査



1　ＳＩ1167（西から）

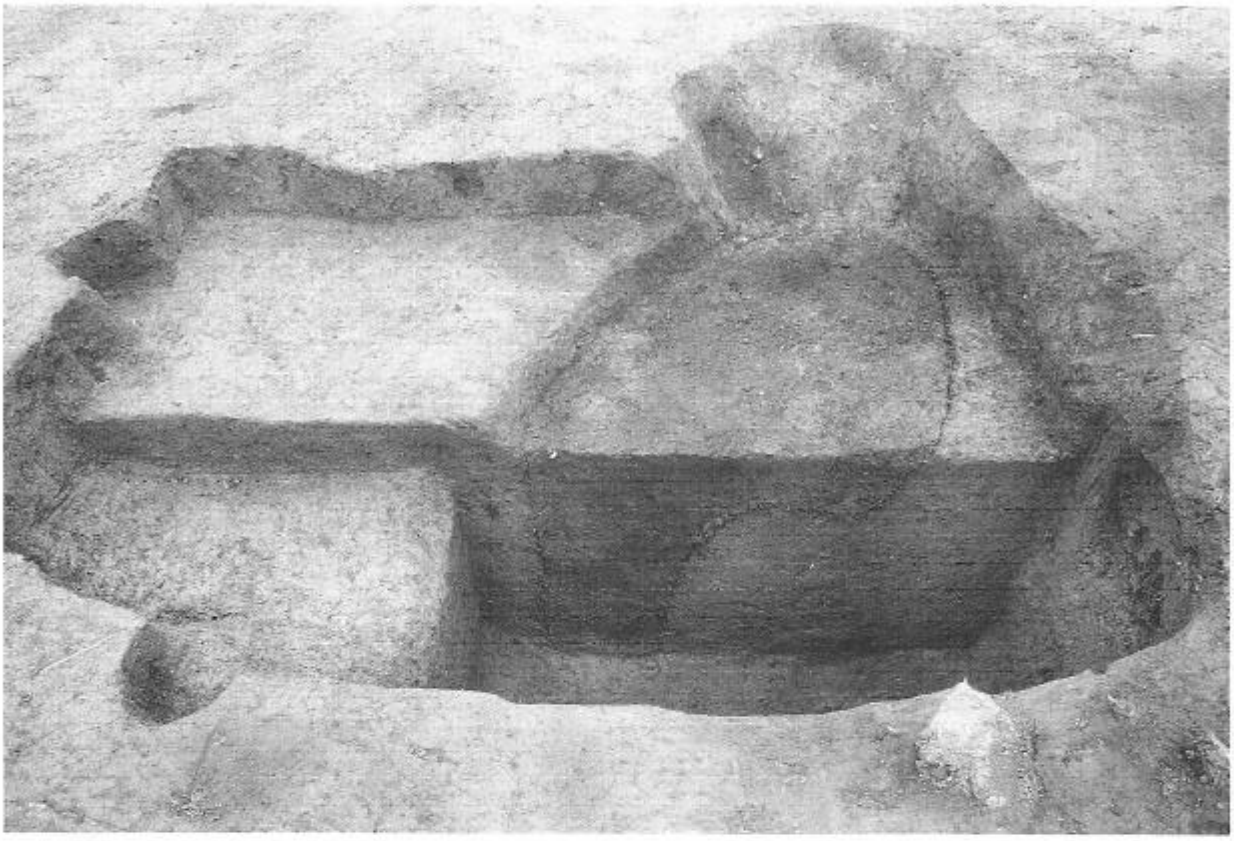
2　同　　上（東から）



1　ＳＢ1127（東から）

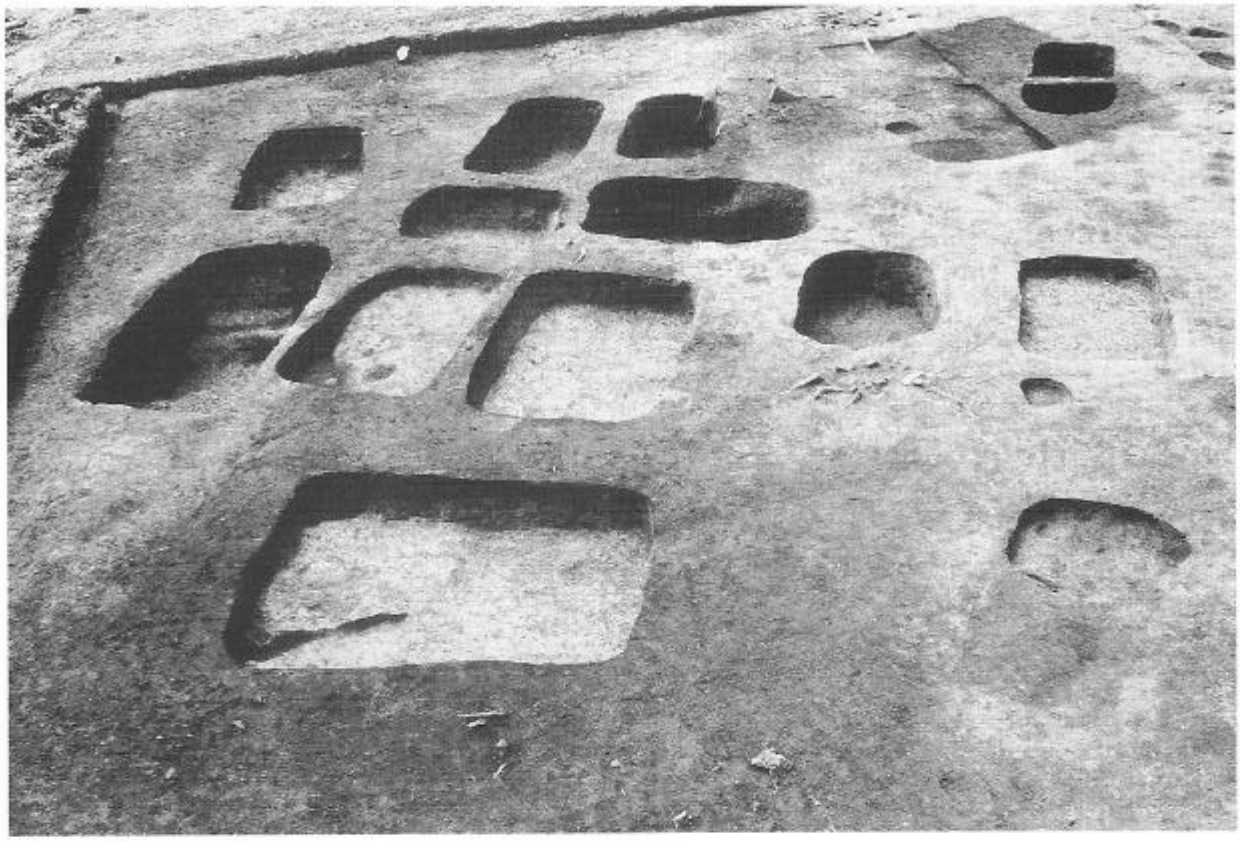
2　同　　上（西から）

図版14　第105次調査



1　ＳＢ1127南西隅柱掘形（南から）

2　ＳＩ1148・1149、ＳＢ1178（東から）

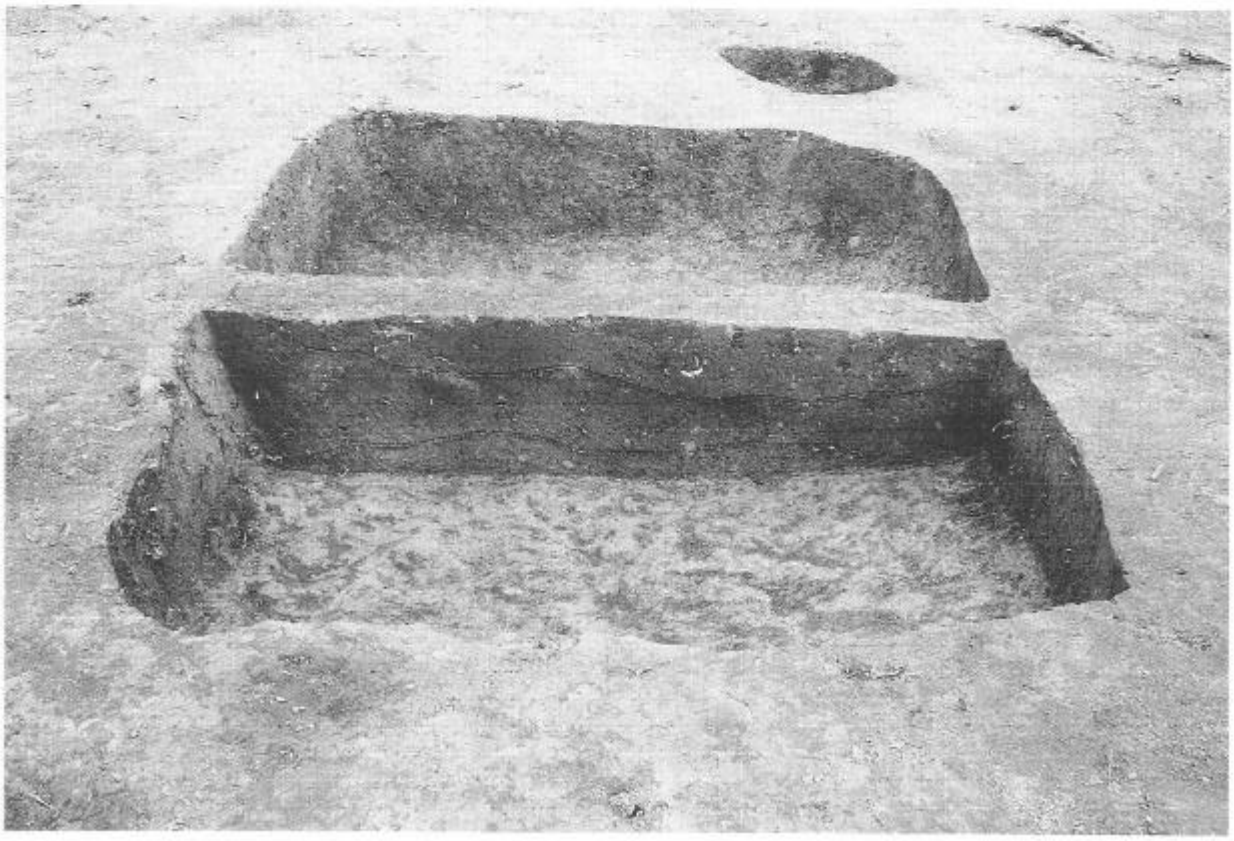


1　土坑群（東から）

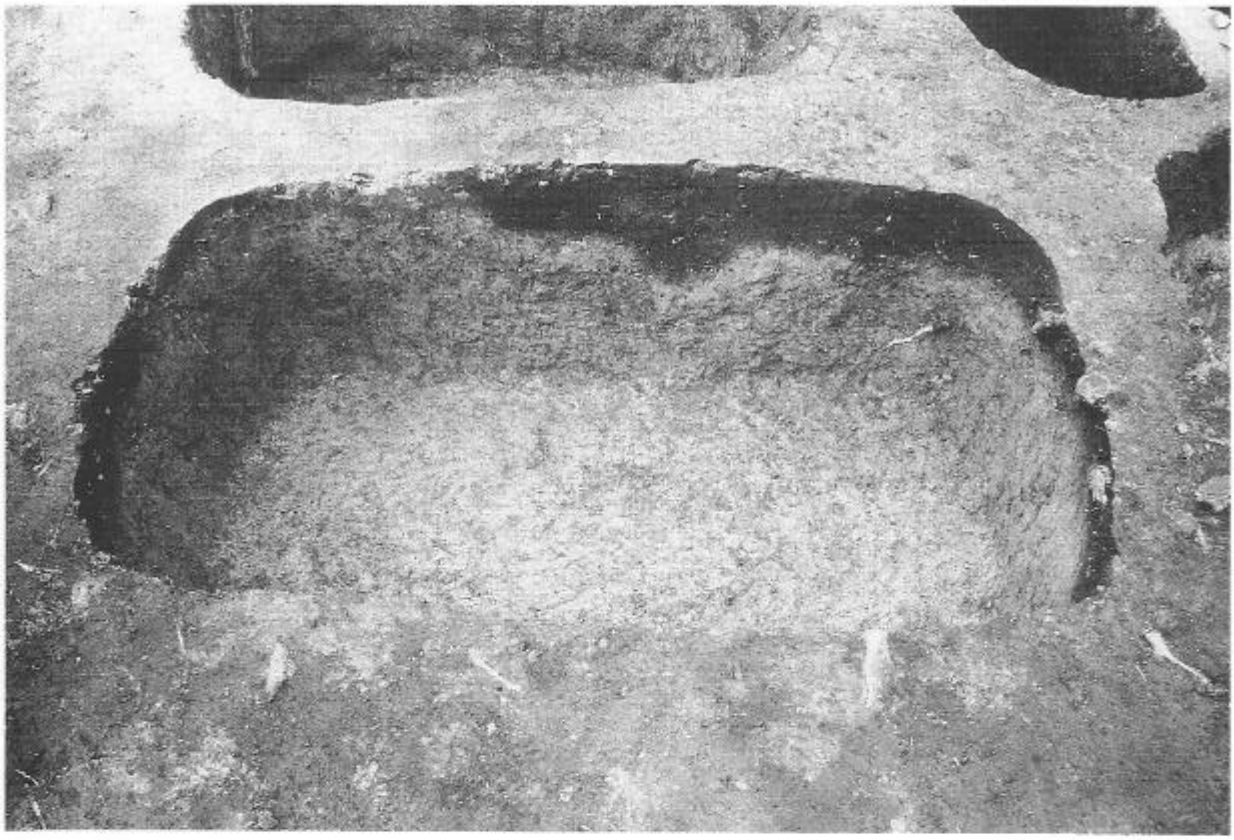
2　ＳＫ1154（南西から）

図版16　第105次調査

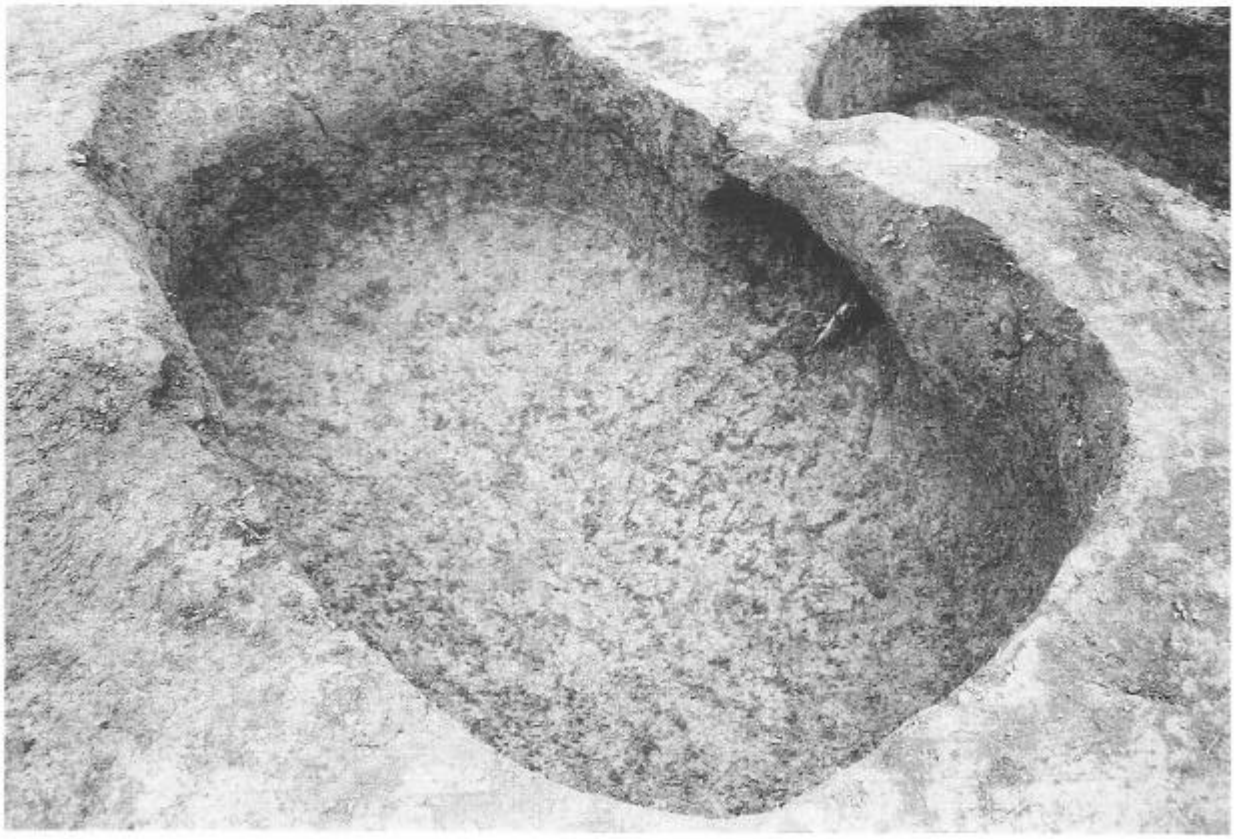
1　ＳＫ1155・1156（南から）



2　ＳＫ1163（西から）



1　ＳＫ1164（南から）

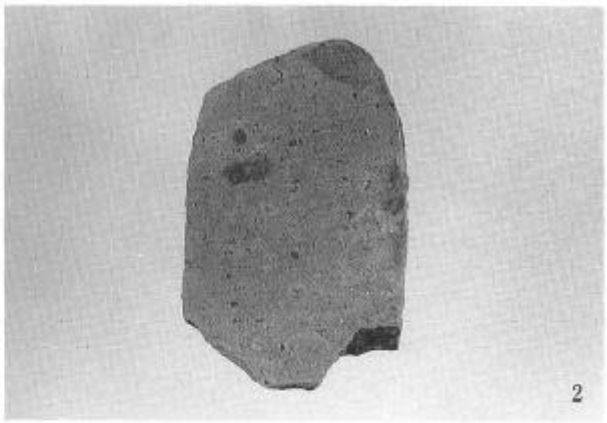


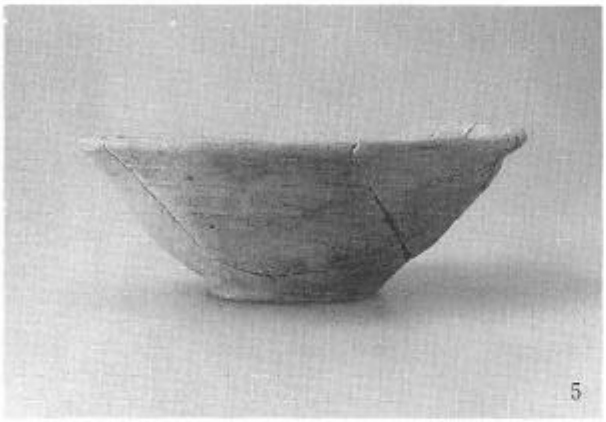
2　ＳＫ1176（北西から）

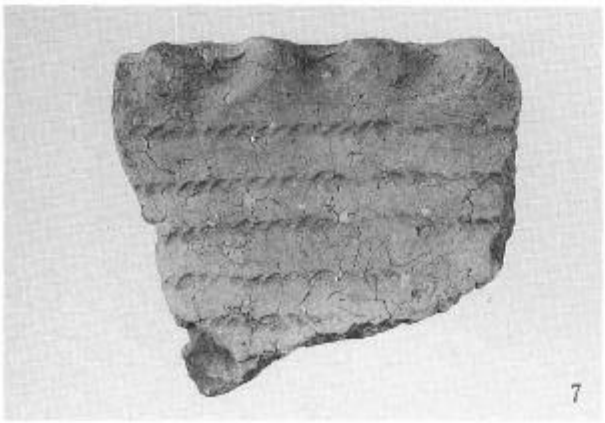
図版18　第106次調査

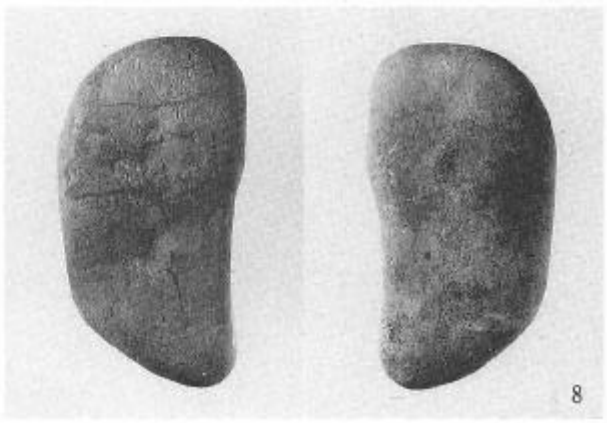
1　河川跡の電気探査

2　同　　上



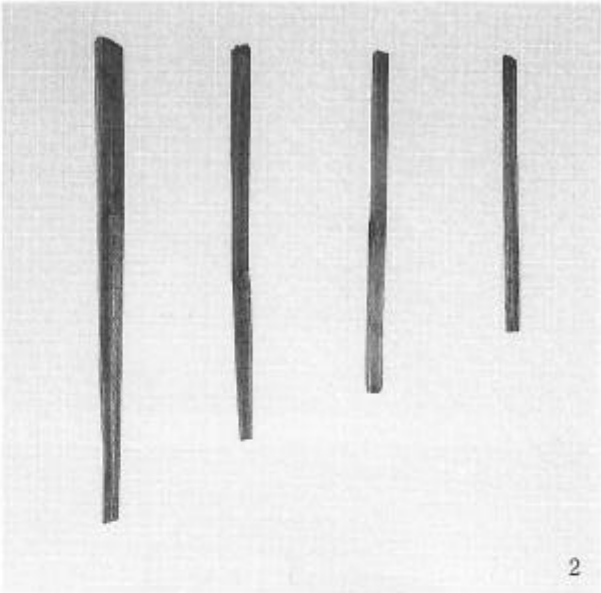


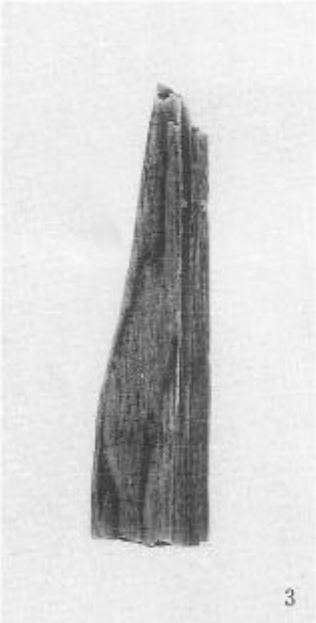


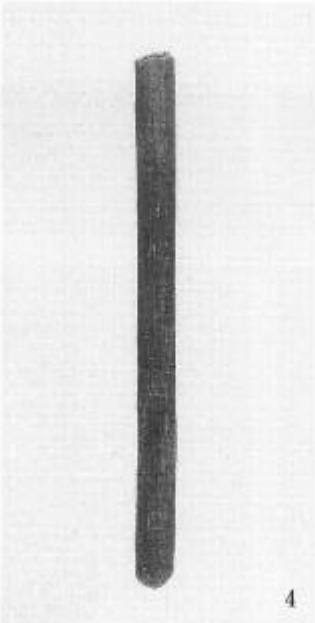


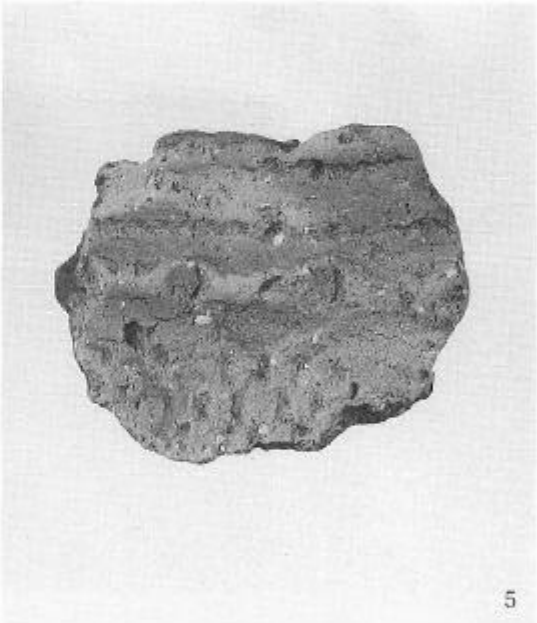
1　SA1100　2　SD1145　3～8　遺構外

図版20　第104次調査　　遺　　物(2)

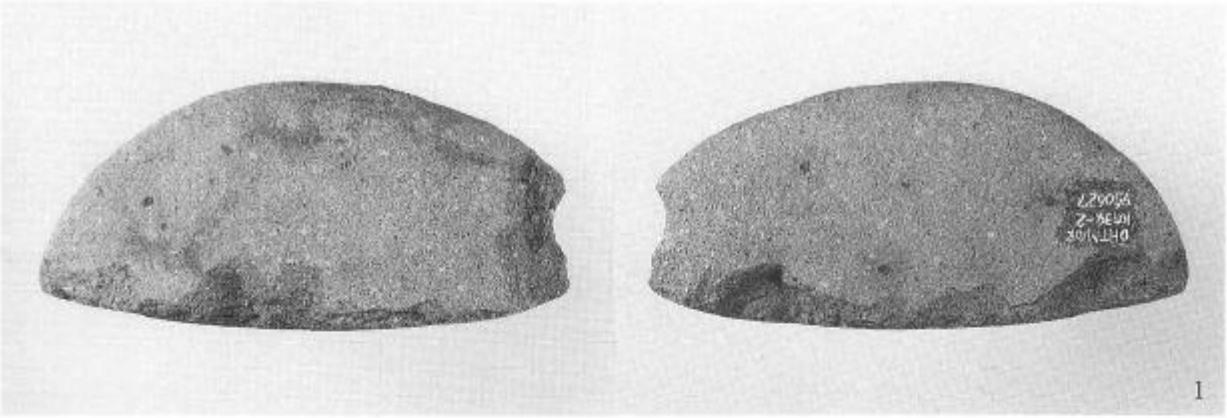


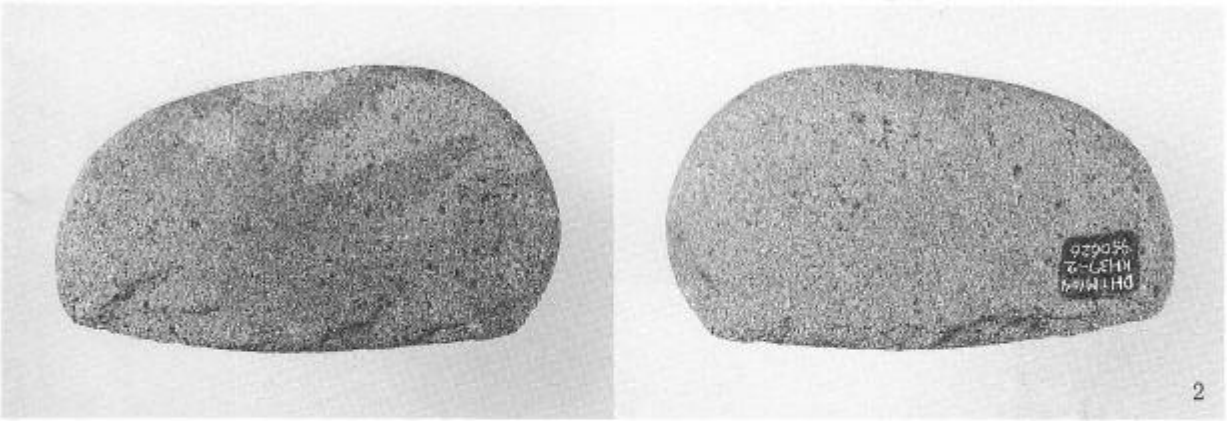


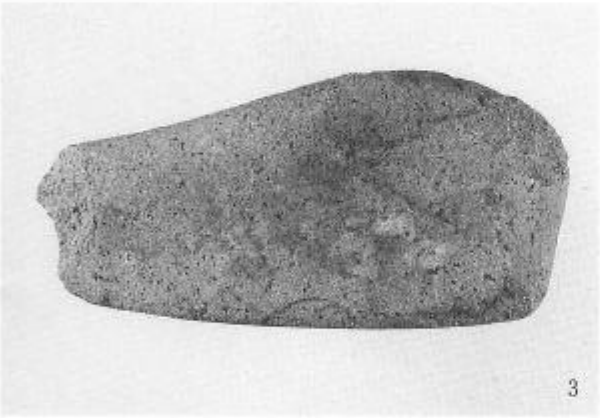


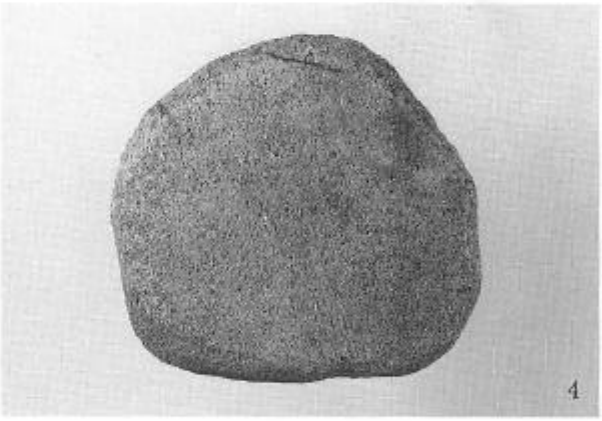


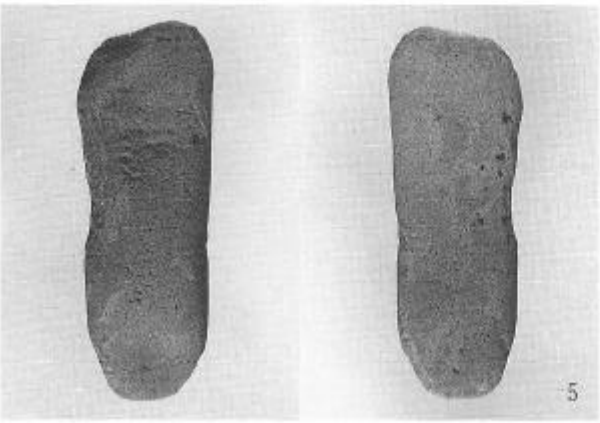
1～8　遺構外





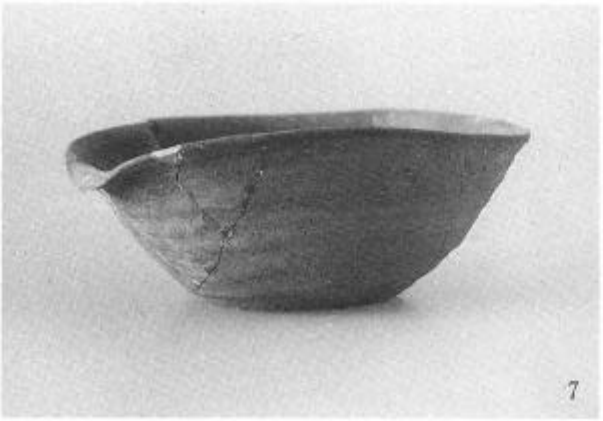




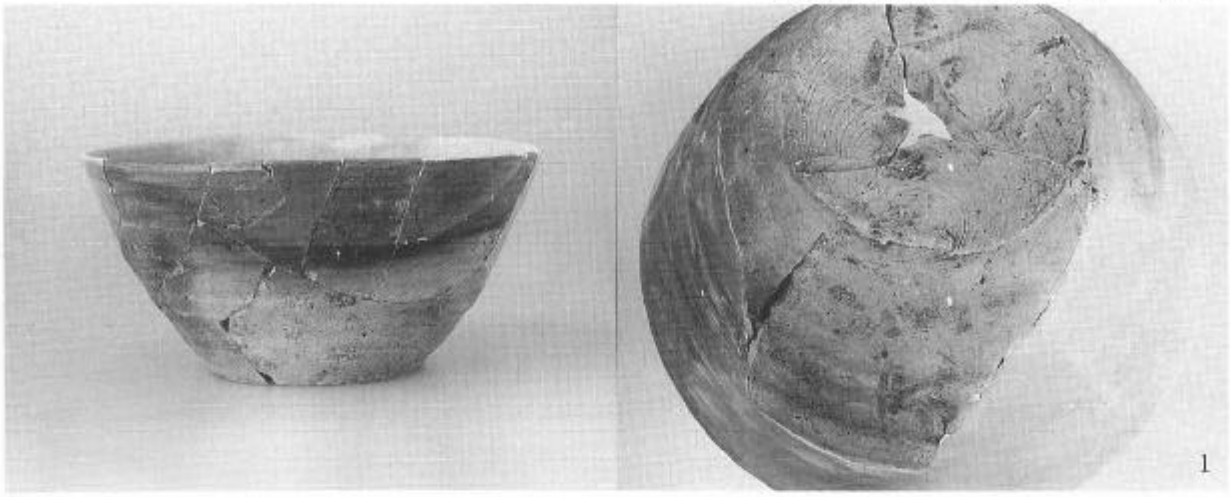


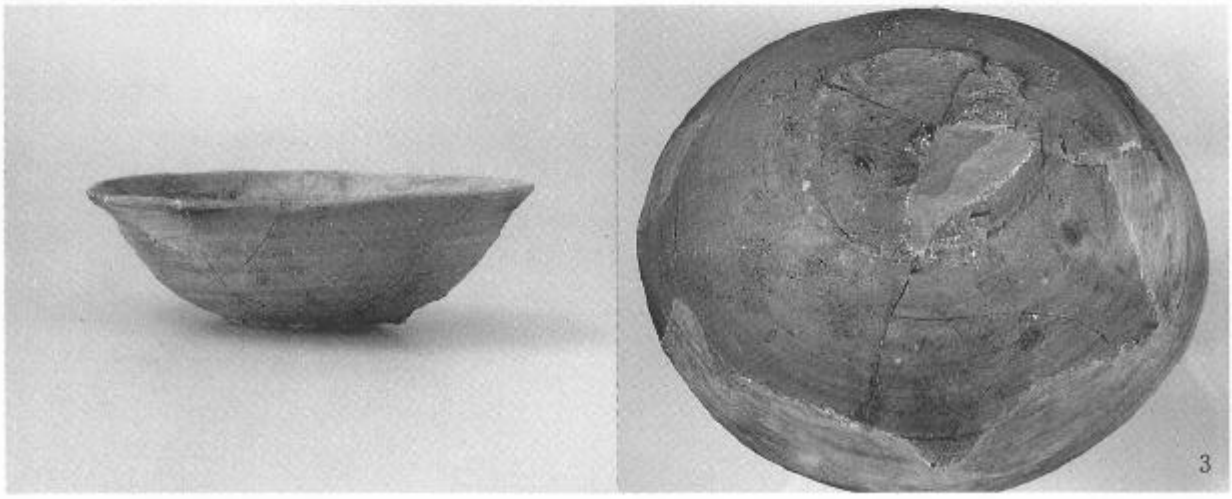
1～5　遺構外　6　S I 967

図版22　第105次調査　　遺　　物(4)



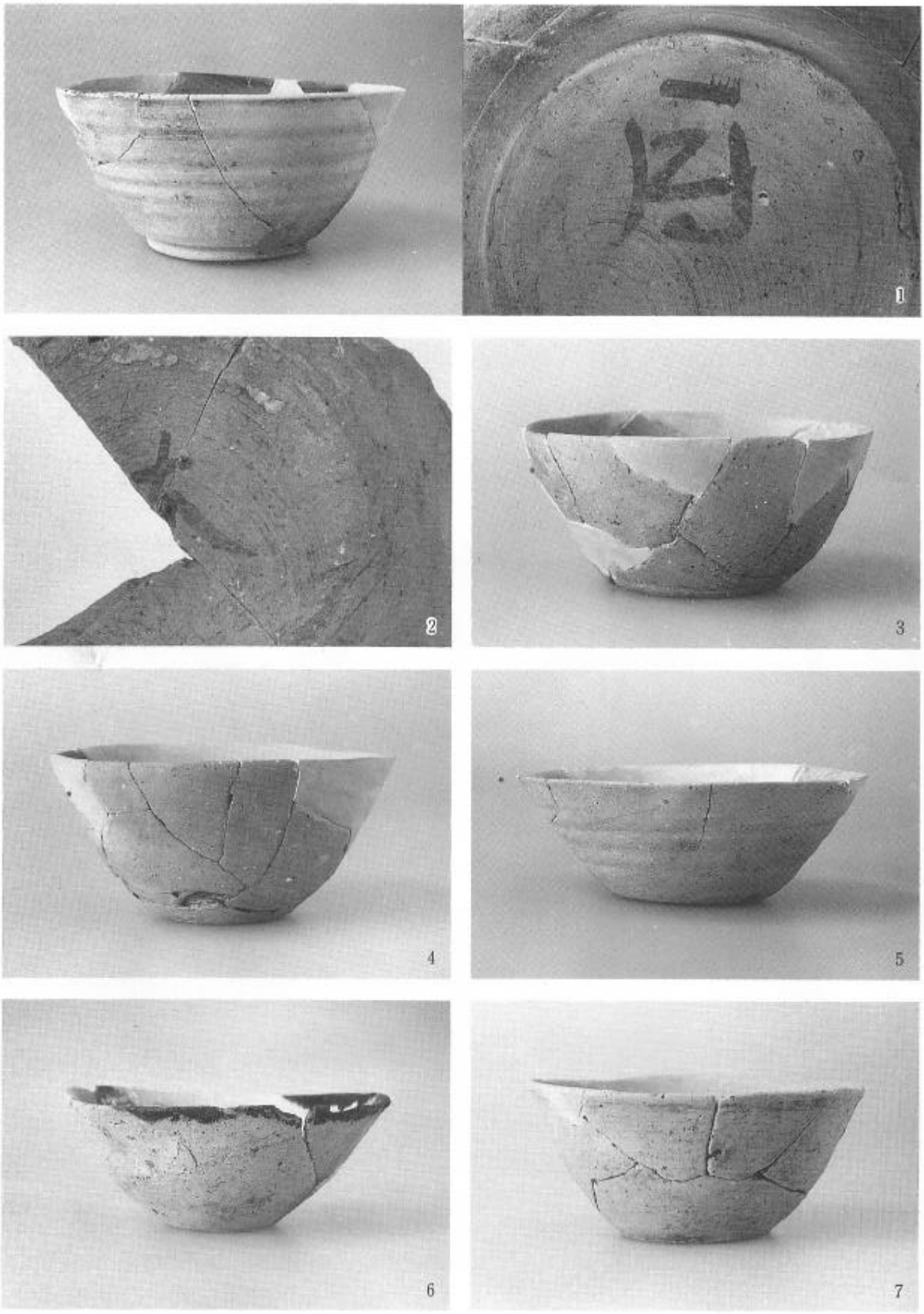
1～8　S I 1148



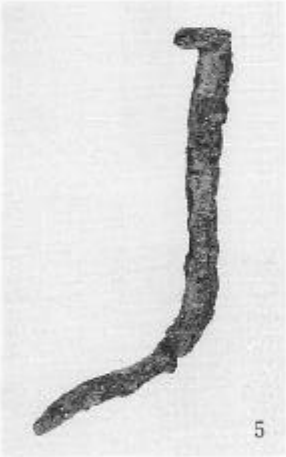


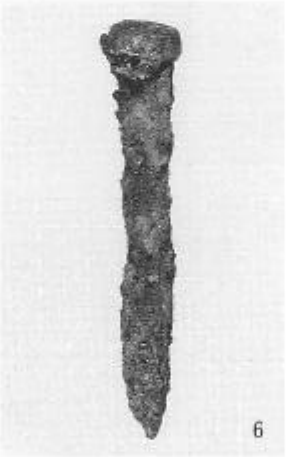
1～3　S I 1148

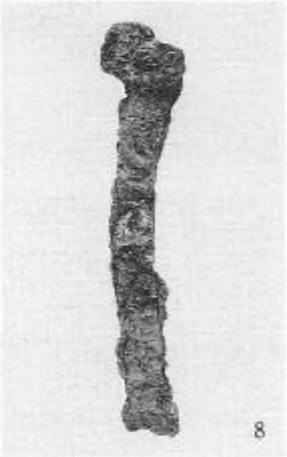
図版24　第105次調査　　遺　　物(6)



1～7　S I 1148

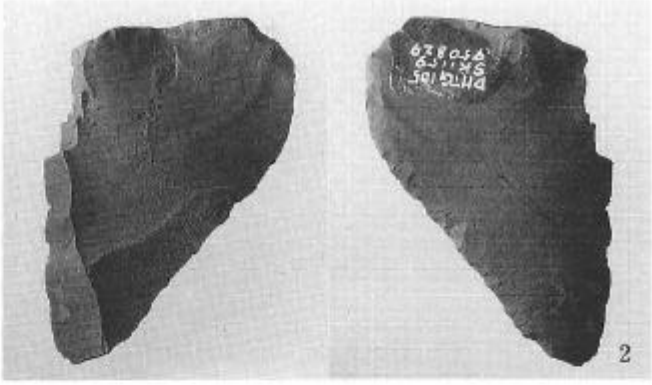


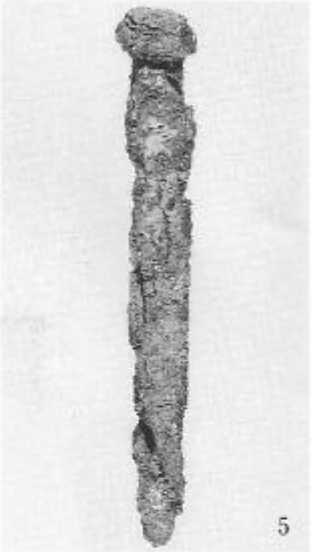




1　ＳＩ1149　2～4　ＳＩ1167　5～12　ＳＫ1154

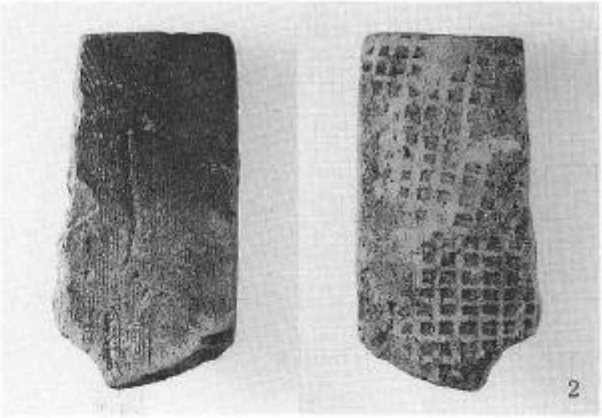
図版26 第105次調査　遺　物(8)

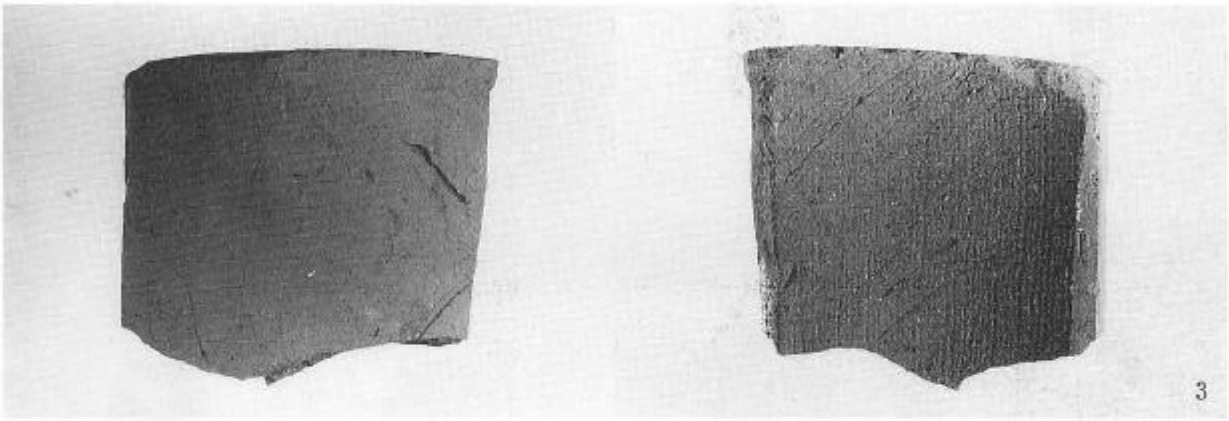


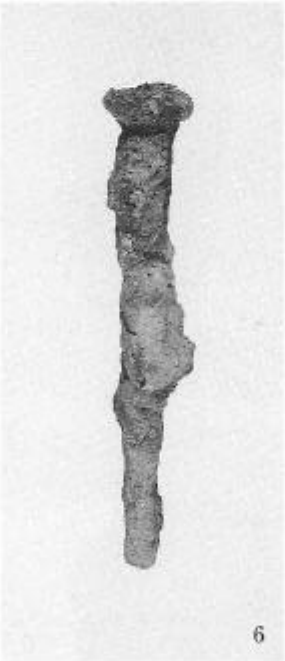


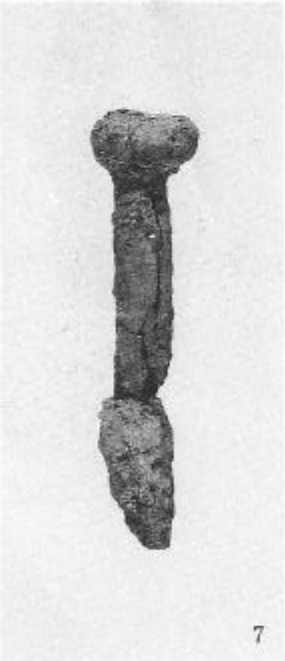
1　SK1157　2　SK1159　3　SK1161　4　SK1165　5　SK1172　6・7　SX1179

図版27　第105次調査　　遺　　物(9)



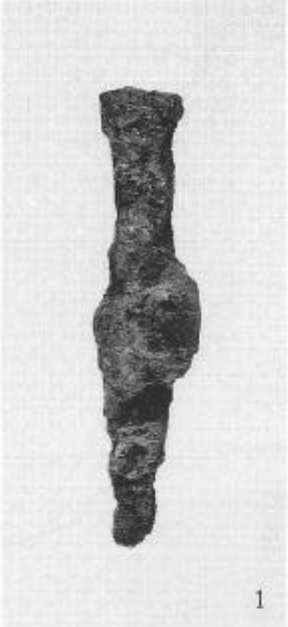


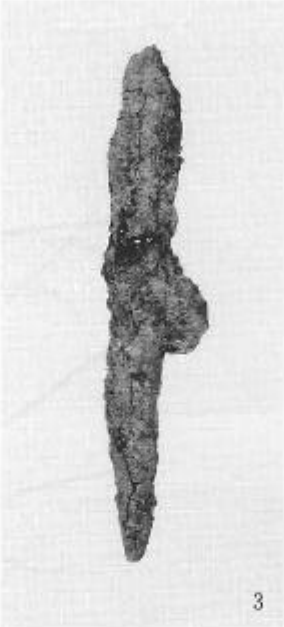


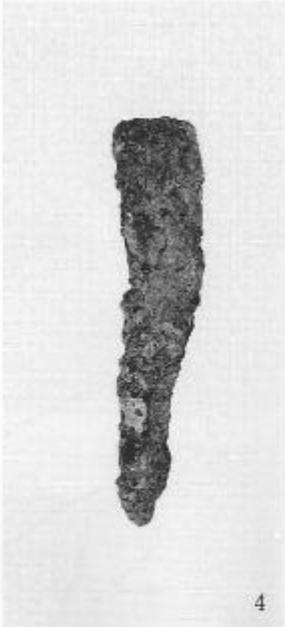


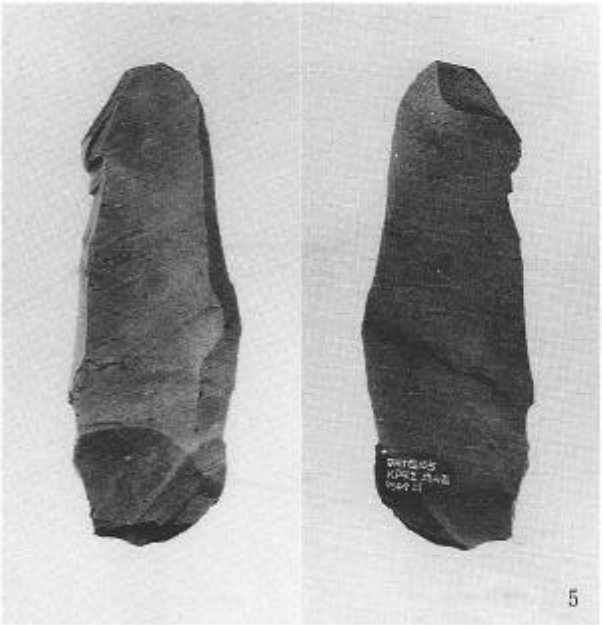
1～7　遺構外

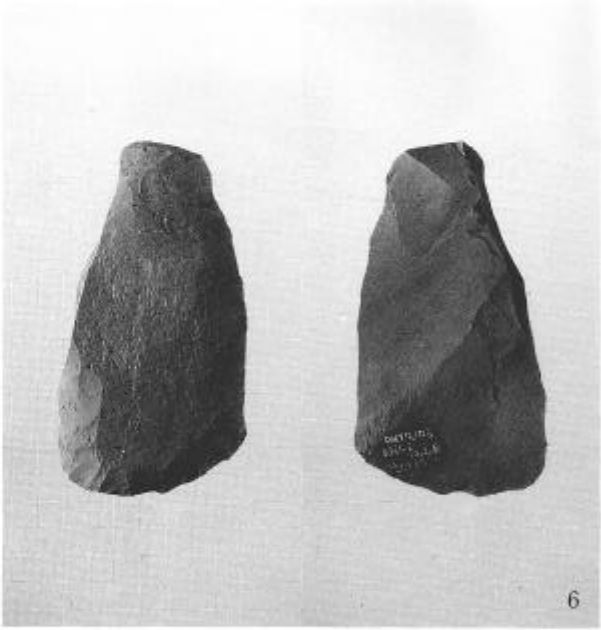
図版28　第105次調査　　遺　　物(10)

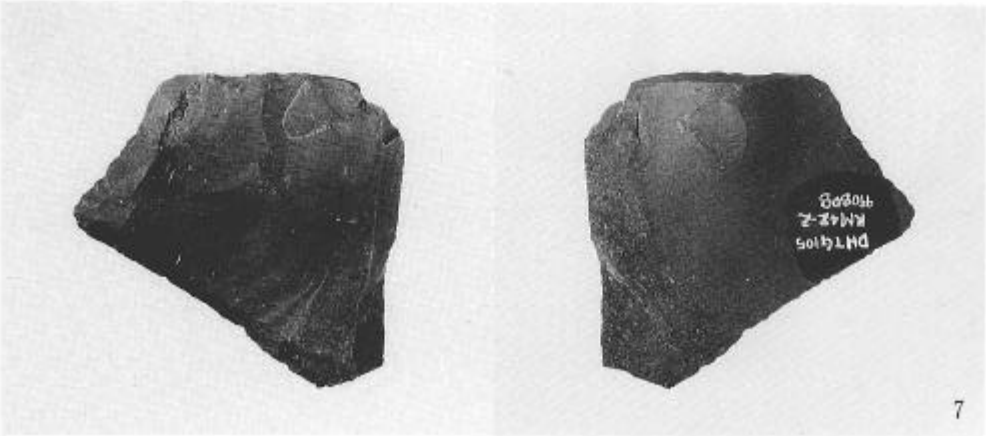












1～7　遺構外